

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
7

上喜来蛭子～中佐古遺跡

1994

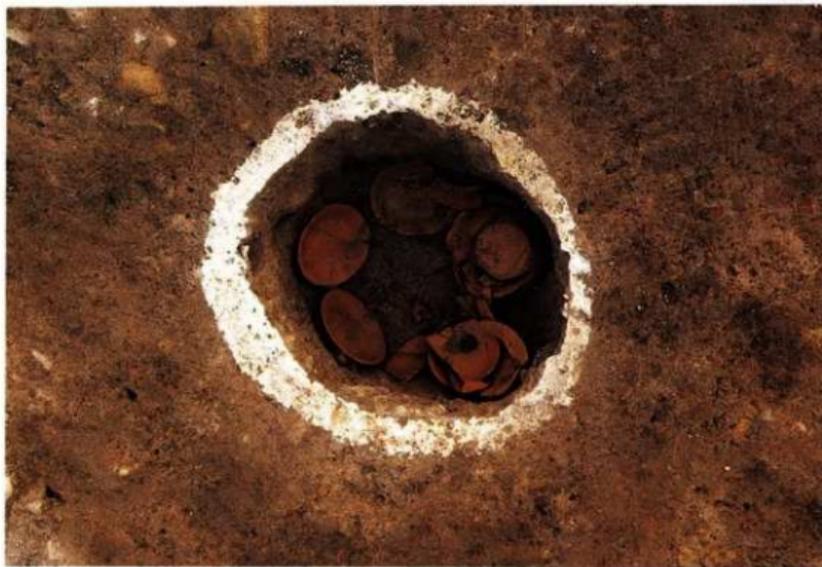
徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
7

上喜来蛭子～中佐古遺跡

1994

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



SP1178土器・錢貨出土狀況



鑄造関連遺物

序 文

本書は四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成2年度と3年度に実施した阿波郡市場町上喜来姪子～中佐古遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は古野川中流域左岸の阿讃山脈南麓に位置しており、縄文時代晩期の上坑や弥生時代中期の竪穴住居跡、室町時代の集落跡が確認できました。室町時代の集落の一角で確認された铸造工房は、出土した鋳型や溶解炉などと共に中世の铸造技術を考える上で重要な資料といえます。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様にも多人の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは重要な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成6年10月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 坂本松雄

例 言

- 1 本書は四国縦貫自動車道建設に伴い平成2年(1990)度と平成3(1991)度に調査を実施した上喜米蛭子～中佐古遺跡(阿波郡市場町所在)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
 - ・発掘調査期間 1次調査 平成2年6月4日～平成2年6月8日(試掘)
平成2年7月14日～平成3年3月11日(本調査)
2次調査 平成3年10月7日～平成3年11月25日(本調査)
 - ・報告書作成期間 平成5年4月1日～平成6年3月31日
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

SA	掘立柱建物跡	SB	竪穴住居跡	SK	土坑
SP	柱穴	ST	墓	SO	炭窯

- 5 方位は国土座標第IV系の北、高さは東京湾標準潮位(T.P.)を表す。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1989年度版によった。
- 7 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 8 遺構番号は1次調査終了後に新たに通し番号としたもので、『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol・2に掲載した番号と異なるものについては遺構番号の横に年報掲載時の番号を記載した。
- 9 第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「市場」を縮小・転載し

たものである。

- 10 調査に当たっては、次の機関の御協力・御指導を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公園高松建設局 同徳島工事事務所 同脇町工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 市場町

- 11 発掘調査、整理期間を通じて次の方々に御協力、御教示を得た。

五十川伸矢 魚島純一 嶋谷和彦 中山光夫 西澤古太郎 (五十音順・敬称略)

- 12 出土遺物の自然科学的分析は、鑄造遺物(鉄滓、耐火物等)の分析を中山光夫氏に依頼した。

- 13 本書の執筆はI-1を菅原康夫、その他を辻佳伸が行い、辻が編集した。遺物の写真撮影は島巡賢二が行った。

本文目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	6
(1) 調査の経過	6
(2) 発掘調査の方法	6
(3) 調査日誌抄	11
II 遺跡の立地と環境	13
1 地理的環境	13
2 歴史的環境	13
III 調査成果	17
1 層序	17
2 遺構と遺物	29
(1) 縄文時代	30
土坑	30
(2) 弥生時代	31
竪穴住居跡	31
(3) 室町時代	33
掘立柱建物跡	33
土坑	45
溝	75
中世墓	77
炭窯	86
柱穴	88
(4) 包含層出土遺物	95
3 考察	118
上喜来姪子～中佐古遺跡の鑄造工場の様相	118
4 まとめ	132
IV 上喜来姪子～中佐古遺跡の鑄造関係遺物の金属学的調査	135

中山光夫

插图目次

第1図	西国縦貫自動車道(神戸～船)路線図	3	第41図	SK1107出土遺物実測図	49
第2図	調査地位図	7	第42図	SK1108実測図	50
第3図	グリット配置図	9	第43図	SK1108出土遺物実測図	50
第4図	周辺の遺跡分布図	14	第44図	SK1109実測図	50
第5図	基本土層柱状図	18	第45図	SK1109出土遺物実測図	51
第6図	遺構配置図(第1～4調査区)	19	第46図	SK1110実測図	52
第7図	遺構配置図(第5～11調査区)	21	第47図	SK1110出土遺物実測図	52
第8図	遺構配置図(第12～14調査区)	23	第48図	SK1112実測図・同出土遺物実測図	53
第9図	遺構配置図(第15～22調査区)	25	第49図	SK1113実測図	53
第10図	遺構配置図(第23～26調査区)	27	第50図	SK1113出土遺物実測図	53
第11図	SK1039実測図	30	第51図	SK1117実測図	54
第12図	SK1039出土遺物実測図	31	第52図	SK1117出土遺物実測図	54
第13図	SB1001実測図	32	第53図	SK1118実測図	55
第14図	SB1001出土遺物実測図	32	第54図	SK1118出土遺物実測図	55
第15図	SA1001実測図	33	第55図	SK1119実測図	56
第16図	SA1002実測図	34	第56図	SK1119出土遺物実測図	56
第17図	SA1003実測図	35	第57図	SK1120実測図	56
第18図	SA1004実測図	36	第58図	SK1120出土遺物実測図	56
第19図	SA1005実測図	37	第59図	SK1124実測図・同出土遺物実測図	57
第20図	SA1006実測図	38	第60図	SK1126実測図	57
第21図	SA1007実測図	39	第61図	SK1126出土遺物実測図	58
第22図	SA1008実測図	40	第62図	SK1130実測図	58
第23図	SA1008出土遺物実測図	40	第63図	SK1130出土遺物実測図	58
第24図	SA1009実測図・同出土遺物実測図	41	第64図	SK1134実測図	59
第25図	SA1010実測図	43	第65図	SK1134出土遺物実測図	59
第26図	SA1011実測図	44	第66図	SK1135実測図	60
第27図	SK1012実測図	45	第67図	SK1135出土遺物実測図	60
第28図	SK1012出土遺物実測図	45	第68図	SK1136実測図	60
第29図	SK1017実測図	46	第69図	SK1137実測図	60
第30図	SK1036実測図	46	第70図	SK1138実測図	61
第31図	SK1036出土遺物実測図	46	第71図	SK1139実測図・同出土遺物実測図	61
第32図	SK1037実測図	47	第72図	SK1142実測図・同出土遺物実測図	62
第33図	SK1037出土遺物実測図	47	第73図	SK1147実測図・同出土遺物実測図	62
第34図	SK1094実測図	47	第74図	SK1157実測図	63
第35図	SK1095実測図	47	第75図	SK1166実測図	63
第36図	SK1096実測図	48	第76図	SK1173実測図	63
第37図	SK1097実測図	48	第77図	SK1179実測図	63
第38図	SK1106実測図	48	第78図	SK1181・1182・1183実測図	64
第39図	SK1106出土遺物実測図	48	第79図	SK1181出土遺物実測図(1)	65
第40図	SK1107実測図	49	第80図	SK1181出土遺物実測図(2)	67

第81図	SK1183出土遺物実測図(1)	68
第82図	SK1183出土遺物実測図(2)	69
第83図	SK1183出土遺物実測図(3)	70
第84図	SK1184実測図・同出土遺物実測図	71
第85図	SK1185・1186実測図	72
第86図	SK1187実測図	72
第87図	SK1189実測図	73
第88図	SK1190実測図	73
第89図	SX1011実測図	74
第90図	SX1011出土遺物実測図	75
第91図	SD1001実測図	76
第92図	SD1002実測図	76
第93図	ST1001実測図	77
第94図	ST1002実測図	78
第95図	ST1003実測図	78
第96図	ST1004実測図	78
第97図	ST1005実測図	79
第98図	ST1006実測図	79
第99図	ST1007実測図	80
第100図	ST1008実測図	80
第101図	ST1009実測図	81
第102図	ST1010実測図	82
第103図	ST1010出土遺物実測図	82
第104図	ST1011実測図	82
第105図	ST1012実測図	83
第106図	ST1012出土遺物実測図	83
第107図	ST1013・1014実測図	85
第108図	ST1015・1016実測図	86
第109図	SO1001実測図	87
第110図	SO1002実測図	87
第111図	SP1868実測図	88
第112図	SP1868出土遺物実測図	88

第113図	SP1178遺物出土状況実測図・ 同出土遺物実測図	89
第114図	SP1178底面湖線・塚山十状実測図	90
第115図	SP1178断面図	90
第116図	柱穴山十遺物実測図(1)	92
第117図	柱穴山十遺物実測図(2)	93
第118図	包含礫山十遺物実測図(1)	96
第119図	包含礫山十遺物実測図(2)	97
第120図	包含礫山十遺物実測図(3)	98
第121図	包含礫山十遺物実測図(4)	99
第122図	包含礫山十遺物実測図(5)	100
第123図	包含礫山十遺物実測図(6)	101
第124図	包含礫山十遺物実測図(7)	103
第125図	包含礫山十遺物実測図(8)	104
第126図	包含礫山十遺物実測図(9)	105
第127図	包含礫山十遺物実測図(10)	106
第128図	包含礫山十遺物実測図(11)	107
第129図	包含礫山十遺物実測図(12)	109
第130図	包含礫山十遺物実測図(13)	110
第131図	包含礫山十遺物実測図(14)	111
第132図	包含礫山十遺物実測図(15)	112
第133図	包含礫山十遺物実測図(16)	113
第134図	包含礫山十遺物実測図(17)	114
第135図	包含礫山十遺物実測図(18)	115
第136図	包含礫山十遺物実測図(19)	116
第137図	罎口跡型復元案	119
第138図	罎口復元案	120
第139図	銅鍍型復元案	121
第140図	羽釜鍍型復元案	122
第141図	SK1109・1181・1183 山十跡型関連遺物構成	126
第142図	13・14調査区鍍造土房配築図	129

IV 表 図版

第1図	No.10, SK1183鉄沖の CMAによる定性分析結果	143
表1	上喜米塚子～中佐古遺跡の 金属学的調査項目	135
表2	上喜米塚子～中佐古遺跡出土の 耐火物関係の化学組成	157
表3	上喜米塚子～中佐古遺跡出土の	

種類・鉄類の化学組成	157	
表4	木片屑・木片痕の計測値	138
図版1	No.1 粘土塊・外観	144
図版2	No.2 伊壁・外観	144
図版3	No.3 伊壁断面パッキン・外観	144
図版4	No.4 罎口・外観	144
図版5	No.5 ルツボ(トリベ)・外観	144

図版 6	No. 6 銕型 (胎土)・外履	145
図版 7	No. 7 銕型 (真土)・外履	145
図版 8	No. 8 鉄滓	145
図版 9	No. 9 鉄滓	146
図版10	No.10 鉄滓	147
図版11	No.11 鉄滓	147
図版12	No.12 鉄片	148
図版13	No.13 鉄滓	148
図版14	No.10 SK1183 鉄滓の顕微鏡組織	149
図版15	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Ca)	149
図版16	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Se)	150

図版17	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (K)	150
図版18	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Se)	151
図版19	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Al)	151
図版20	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Si)	152
図版21	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (C)	152
図版22	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Fe)	153
図版23	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Mn)	153
図版24	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (O)	154
図版25	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (Ti)	154
図版26	No.10 SK1183 鉄滓の特性X線像 (P)	155
図版27	No.10 鉄滓の融点温度測定	157

表目次

第1表	四国縦貫自動車道 (徳島一節) 埋蔵文化財調査地 一覧表	4
第2表	検出遺構 一覧表 塚穴住居跡	159
第3表	検出遺構 一覧表 孤立柱礎物跡	159
第4表	検出遺構 一覧表 土坑 (1)	159
第5表	検出遺構 一覧表 土坑 (2)	160
第6表	検出遺構 一覧表 土坑 (3)	161
第7表	検出遺構 一覧表 土坑 (4)	162
第8表	検出遺構 一覧表 土坑 (5)	161
第9表	検出遺構 一覧表 土坑 (6)	164
第10表	検出遺構 一覧表 土坑 (7)	165
第11表	検出遺構 一覧表 土坑 (8)	166
第12表	検出遺構 一覧表 不明遺構	166
第13表	検出遺構 一覧表 溝	167
第14表	検出遺構 一覧表 中世墓	167
第15表	検出遺構 一覧表 灰窯	167
第16表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (1)	168
第17表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (2)	169
第18表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (3)	170
第19表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (4)	171

第20表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (5)	172
第21表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (6)	173
第22表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (7)	174
第23表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (8)	175
第24表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (9)	176
第25表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (10)	177
第26表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (11)	178
第27表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (12)	179
第28表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (13)	180
第29表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (14)	181
第30表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (15)	182
第31表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (16)	183
第32表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (17)	184
第33表	出土遺物観察表 土器・陶磁器 (18)	185
第34表	出土遺物観察表 銅造関連遺物 (1)	186
第35表	出土遺物観察表 銅造関連遺物 (2)	187
第36表	出土遺物観察表 金属製品	188
第37表	出土遺物観察表 石器・石製品 (1)	188
第38表	出土遺物観察表 石器・石製品 (2)	189

図版目次

図版 1	(1) 調査前風景 (第12~14調査区)
	(2) 調査前風景 (第24~26調査区)
図版 2	(1) SK1039遺物出土状況 (1)
	(2) SK1039遺物出土状況 (2)

図版 3	(1) SK1039遺物出土状況 (3)
	(2) SK1039遺物出土状況 (4)
図版 4	(1) SB1001 (南より)
	(2) SB1001 (西より)

- 図版5 (1) 第4調査区遺構検出状況(西より)
(2) 第7調査区遺構完備状況(東より)
- 図版6 (1) 第11調査区西半遺構完備状況(南より)
(2) 第13調査区遺構完備状況(SA1009周辺)
- 図版7 (1) 第14調査区遺構完備状況(SA1010周辺)
(2) 第14調査区遺構完備状況(SA1011周辺)
- 図版8 (1) SK1012遺物出土状況
(2) SK1017検出状況
- 図版9 (1) SK1037遺物出土状況
(2) SK1109遺物出土状況
- 図版10 (1) SK1109跡地出土状況
(2) SK1183遺物出土状況
- 図版11 (1) SK1183遺物出土状況
(2) SK1188跡地出土状況
- 図版12 (1) SK1186遺物出土状況
(2) SK1186粘土塊出土状況
- 図版13 (1) SO1001検出状況
(2) 第6調査区中世墓群検出状況
- 図版14 (1) ST1002検出状況(南より)
(2) ST1003検出状況(東より)
- 図版15 (1) ST1004検出状況(南より)
(2) ST1005検出状況(北より)
- 図版16 (1) ST1006検出状況(南より)
(2) ST1007検出状況(東より)
- 図版17 (1) ST1008検出状況(西より)
(2) ST1009検出状況(西より)
- 図版18 (1) ST1010検出状況(北より)
(2) ST1011検出状況(東より)
- 図版19 (1) ST1012検出状況(西より)
(2) ST1012断面(西より)
- 図版20 (1) ST1012内小ピット検出状況
(2) ST1012遺物出土状況
- 図版21 (1) ST1013検出状況(北より)
(2) ST1014検出状況(西より)
- 図版22 (1) 第6調査区中世墓群完備状況
(2) 第6調査区横瓦輪塔集積状況
- 図版23 (1) SP1178遺物出土状況
(2) SP1178土器總称状況
- 図版24 (1) SP1178土器總称状況(南側)
(2) SP1178土器埋納状況(北側)
- 図版25 (1) SP1178土器内銅線出土状況
(2) SP1178底面銅線出土状況
- 図版26 (1) SP1178底面銅線出土状況
(2) SP1178底面銅線出土状況
- 図版27 (1) SP1761増場出土状況
(2) SP1868備前焼埴鉢出土状況
- 図版28 (1) SA1009、P15土器出土状況
(2) SP1093土器出土状況
- 図版29 (1) SP1274土器出土状況
(2) 包倉器十器出土状況
- 図版30 (1) 包倉器十器出土状況
(2) 包倉器十器出土状況
- 図版31 出土遺物 縄文土器・弥生土器
- 図版32 出土遺物 土師質土器
- 図版33 出土遺物 土師質土器
- 図版34 出土遺物 土師質土器
- 図版35 出土遺物 土師質土器・瓦質土器
- 図版36 出土遺物 瓦質土器・土師質土器
- 図版37 出土遺物 土師質土器
- 図版38 出土遺物 土師質土器
- 図版39 出土遺物 土師質土器
- 図版40 出土遺物 土師質土器
- 図版41 出土遺物 土師質土器・須恵質土器
- 図版42 出土遺物 瓦質土器・備前焼
- 図版43 出土遺物 備前焼
- 図版44 出土遺物 備前焼
- 図版45 出土遺物 備前焼・輸入磁器
- 図版46 出土遺物 輸入磁器
- 図版47 出土遺物 陶型
- 図版48 出土遺物 陶型
- 図版49 出土遺物 陶型
- 図版50 出土遺物 銅造関連道具
- 図版51 出土遺物 溶解炉壁
- 図版52 出土遺物 溶解炉壁
- 図版53 出土遺物 溶解炉壁
- 図版54 出土遺物 溶解炉壁
- 図版55 出土遺物 増場・クライ・羽口
- 図版56 出土遺物 羽口
- 図版57 出土遺物 羽口
- 図版58 出土遺物 放射状・鉄滓・粘土塊
- 図版59 出土遺物 金属製品
- 図版60 出土遺物 金属製品
- 図版61 出土遺物 金属製品
- 図版62 出土遺物 石器
- 図版63 出土遺物 石器
- 図版64 出土遺物 石器・石製品

写真目次

写真1 調査風景（第21調査区）	11	写真2 調査風景（第11調査区）	12
------------------	----	------------------	----

付 図

付図1 第6調査区造構配置図

付図2 第7調査区造構配置図

付図3 第11調査区造構配置図

付図4 第13・14調査区造構配置図

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国上開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として整備された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施行命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施行命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ、区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には蓋住I.C（追加I.C）の施行命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間にかかる58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標になっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業地区面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の

把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行することによって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度には33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡85,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から工事の工程を勘案の上、調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	目下 昭（平成元・2年度）	佐藤信博（平成3・4年度）
	柴田 広（平成5年度）	
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度）	木内正幸（平成3年度）
	岡本一仁（平成4・5年度）	
主事	佐藤 馨（平成2～4年度）	三木和文（平成5年度）
研究補助員	扶川道代	
臨時補助員	田村隆子 上田曉美 岸いくみ 大岸さとみ	
	福原幸恵 柴田みのり 鳴滝淑江 安芸敦子	
調査課長	桑原邦彦（平成元・2年度）	羽山久男（平成3・4年度）
	紀伊司郎（平成5年度）	
調整係長	菅原康夫（平成元年度）	島巡賢二（平成2～5年度）
技師	森長 進（平成元・2年度技術主任）	堀江隆治（平成3・4年度）
	酒井彰彦（平成5年度）	
調査係長	島巡賢二（平成元年度）	菅原康夫（平成2～5年度）

調査担当

第1次調査

第1分割

研究員 浅尾忠明（当時） 安友克佳（当時） 辻 佳伸

研究補助員 高橋浩二 (当時)

第2分割

研究員 藤川智之 横島道彦 (当時) 佐野耕市

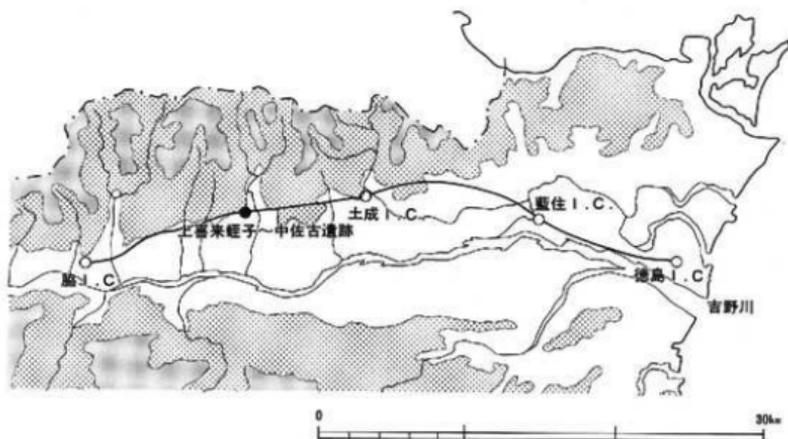
第2次調査

研究員 高岡 裕 (当時) 中野健次 (当時) 安友克佳 (当時)

近藤隆弘 (当時)

調査報告書作成業務

研究員 辻 佳伸



第1図 四国縦貫自動車道 (徳島～脇) 路線図

第1表 四国縦貫自動車道(徳島～脇間)埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面 積 (㎡)				備 考
			実施面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	口吉谷遺跡	阿波郡阿波町口吉谷	4,080	1,840	2,240		報告書第5集所収
5	赤坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		報告書第1集所収
6	赤坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		報告書第1集所収
7	赤坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		報告書第1集所収
8	榎ノ岡遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町榎ノ岡	8,000	2,690	5,310		報告書第3集所収
9	榎ノ岡遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町榎ノ岡	240	240			報告書第3集所収
10	榎ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣字佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜来郷子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840	本報告書所収
16	八坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町尾間	11			11	
17	八坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町尾間	360	360			
18	八坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡市場町尾間	114			85	29
19	八坂遺跡(Ⅳ)	阿波郡市場町尾間	2,000	2,090			
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾間	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡十成町浦池	2,790	2,790			報告書第1集所収
27	北原～人法寺遺跡	板野郡土成町上成	4,890		4,890		報告書第6集所収
28	横田遺跡	板野郡土成町上成	10,810		7,710	3,100	報告書第2集所収
29	権ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		報告書第6集所収
30	北門～塚堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広塚～宮ノ下遺跡	板野郡土成町吉川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町吉川内	50			50	
33	森ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林池跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡(Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		490		報告書第6集所収
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡土成町引野	2,140			2,140	
39	關根遺跡	板野郡土成町引野	20			20	
40	大神山遺跡	板野郡土成町引野	1,330		1,330		報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡土成町引野	3,990		3,110	870	報告書第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡土成町引野	194		80	114	

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)					備 考
			実施面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
43	栲谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650		
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31		
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142	
46	高瀬谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330		
47	高瀬谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250	
48	高瀬谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115		
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200		
50	山田古墳	板野郡上板町神宅	8			8		
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250	
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30	
53	大谷集落遺跡	板野郡上板町神宅	180		180			
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90	
55	堀天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115	
56	嵐谷竈跡	板野郡板野町黒谷	91				91	
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860		
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	353			65	288	
59	蓮華遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	340		340			報告書第4集所収
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220			報告書第4集所収
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	40	40				
62	嵐谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450			
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840	
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975		
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125		
66	東中富遺跡	板野郡赤住町東中富	760			550	210	
67	前須遺跡	板野郡赤住町徳命	876			625	251	
68	新須須遺跡	板野郡赤住町徳命	190				190	
		計	133,464					

2 調査の経過

(1) 調査の経過

上喜来姦了～中佐古遺跡は分布調査により50,200㎡が遺跡の推定範囲とされていた。当初この内の23,250㎡が調査対象面積とされたが、暫定控除分の1,850㎡を除く22,370㎡を対象として試掘調査を行った。試掘調査は平成2年6月4日～8日の間、重機によるトレンチ掘りで170㎡につき行った。試掘調査の結果、設定された調査対象地が広範囲にわたり、調査期間も限定されたものであったため、調査対象地を東西に2分し、西側を第1分割、東側を第2分割として2班を配置し、それぞれ同時進行で調査にあたることとなった。なお調査途中で新たに取得された用地については同様に試掘調査を行い、調査範囲を絞り込んだ。本調査は第1次調査を平成2年7月14日に開始し、平成3年3月11日に終了した。調査面積は11,720㎡である。第2次調査は平成3年10月7日に開始し、平成3年11月25日に終了した。調査面積は840㎡である。1次・2次にわたる発掘調査の総面積は12,560㎡である。(第2図)

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたりグリットの配画は発掘調査統一基準にならい、第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準とし、北にABC……、東に123……の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。調査区の設定は調査対象地が広範囲にわたるため、その間を横切る道路、用水路等の保守の必要性や地形を考慮した上で、便宜上田畑・宅地等の現地割りのもとまりごとに西から東に向かい第1調査区～第26調査区とした。(第3図)

遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後、遺構の確実性が乏しいと判断されたものについては欠番とした。これは遺構記号・番号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最小限にとどめた。なお第1分割と第2分割では調査当時それぞれ別個に遺構番号を付与していたため、同一の遺構番号を持つものが両分割の間で重複することとなった。そこで第1次調査終了後、両者の混乱を避ける目的で第2分割の遺構番号を第1分割の最終番号に継続するかたちでふりなおし、全てを通し番号とした。2次調査にあたっては1次調査の第2分割で使用した遺構番号の最終番号を継続するかたちで付与した。

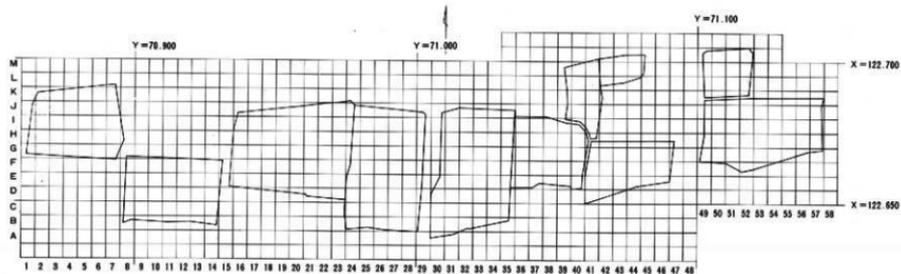
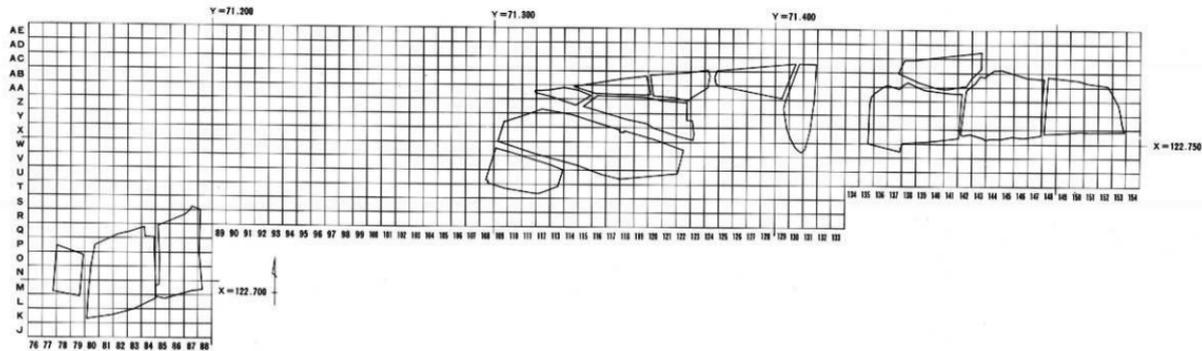


平成2年度調査区

平成3年度調査区

0 100

第2図 調査地位位置図



第3図 グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

1次調査

1990年

- 6月4日 機械掘削による試掘調査開始。
遺物確認。
- 6月8日 試掘トレンチの土層図作成、写真撮影。試掘調査終了。
- 7月27日 調査区内に20mメッシュの基準杭打設。
- 8月2日 第3調査区、第12調査区機械掘削。
- 8月6日 第12調査区人力掘削。第13調査区機械掘削。
- 8月8日 第3調査区、第13調査区人力掘削。
- 8月10日 第13調査区精査、遺構検出。
- 8月20日 第3調査区、第12調査区精査。
- 8月27日 第16調査区機械掘削。
- 8月29日 第13調査区遺構掘削。
- 9月1日 第5調査区南半機械掘削。
- 9月5日 第5調査区南半人力掘削。
- 9月10日 第5調査区南半精査、遺構検出。
第7調査区機械掘削。
- 9月11日 第5調査区南半遺構掘削。第7調査区人力掘削。
- 9月12日 第16調査区人力掘削。
- 9月13日 第3調査区確認掘削。第2調査区機械掘削。
- 9月27日 第16調査区精査、遺構検出。
- 10月3日 第7調査区精査、遺構検出。
- 10月5日 第2調査区人力掘削。
- 10月15日 第7調査区遺構掘削。
- 10月17日 第4調査区北半機械掘削。第2調査区精査。第21調査区機械掘

削。

- 10月22日 第21調査区人力掘削、精査。第20調査区人力掘削。
第11調査区機械掘削による試掘、遺物確認。
- 10月24日 第14調査区人力掘削。
- 10月29日 第7調査区確認掘削。第5調査区南半確認掘削。第14調査区精査、遺構検出。
- 10月31日 第14調査区遺構掘削。
- 11月1日 第15調査区東半人力掘削。
- 11月2日 第4調査区北半人力掘削。
- 11月5日 第11調査区東半機械掘削。
- 11月7日 第4調査区北半精査、遺構検出、遺構掘削。
- 11月8日 第5調査区南半機械掘削。第11調査区東半人力掘削。
- 11月13日 第22調査区機械掘削による試掘。第19調査区人力掘削。



写真1 調査風景(第21調査区)

- 11月16日 第11調査区精査、遺構検出。
- 11月20日 第18調査区人力掘削。
- 11月21日 第5調査区南半人力掘削。第19調査区精査。
- 11月22日 第18調査区精査。第17調査区人力掘削。
- 11月24日 第6調査区機械掘削。第17調査区精査。

- 11月26日 第22調查区人力掘削。
- 11月28日 第4調查区北半確認掘削。第22調查区精査。第15調查区西半人力掘削。
- 12月3日 第4調查区南半機械掘削。第11調查区追構掘削。第22調查区精査。
- 12月4日 第5調查区南半精査、遺構検出。第6調查区精査、遺構検出。
- 12月5日 第4調查区南半人力掘削。第5調查区南半遺構掘削。
- 12月6日 第15調查区西半精査。第25調查区人力掘削。
- 12月10日 第9調查区機械掘削。
- 12月12日 第1調查区東半機械掘削。
- 12月14日 第9調查区人力掘削。
- 12月18日 第11調查区東半確認掘削。第9調查区精査、遺構検出、掘削。第25調查区精査。
- 12月19日 第1調查区東半人力掘削。
- 12月20日 第11調查区西半機械掘削。
- 12月21日 第23調查区、第24調查区機械掘削。
- 12月27日 第11調查区西半人力掘削。

1991年

- 1月7日 第1調查区東半精査、遺構検出。
- 1月10日 第11調查区西半精査、遺構検出。第23調查区人力掘削。
- 1月11日 第24調查区人力掘削。
- 1月12日 第23調查区精査。
- 1月14日 第4調查区南半精査、遺構検出。第1調查区西半機械掘削。
- 1月16日 第24調查区精査。
- 1月17日 第11調查区西半遺構掘削。
- 1月18日 第1調查区西半人力掘削。

- 1月23日 第1調查区西半精査、遺構検出。第26調查区機械掘削。
- 1月25日 第4調查区南半遺構掘削。
- 2月1日 第1調查区西半遺構掘削。第27調查区人力掘削。
- 2月12日 第6調查区平面図作成。
- 2月23日 第26調查区精査。
- 3月1日 第6調查区追構掘削。
- 3月8日 第6調查区調査終了。
- 3月11日 現場撤収、調査終了。

2次調査

1991年

- 10月24日 第8調查区、第10調查区機械掘削。
- 10月28日 第8調查区人力掘削。
- 11月1日 第8調查区精査。
- 11月6日 第10調查区人力掘削。
- 11月11日 第10調查区精査、遺構検出、遺構掘削。第8調查区確認掘削。
- 11月14日 第10調查区確認掘削。
- 11月25日 現場撤収、調査終了。



写真2 調査風景（第11調査区）

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

徳島県（旧阿波国）は四国東部に位置し、北縁を香川県（旧讃岐国）、西縁を愛媛県（旧伊予国）、南縁を高知県（旧土佐国）に接し、東側は紀伊水道を挟んで和歌山県（旧紀伊国）に面している。県内の大部分は山地により占められ、平野部分は全体の2割ほどにすぎない。県北部を中央構造線と呼ばれる大断層が東西方向に貫通する。さらにこれに平行、あるいは雁行状に配列する中央構造線断層系と呼ばれる幾つかの断層が存在する。中央構造線を境として北側には和泉層群により構成される阿讃山脈、南側には二波川結晶片岩類により構成される四国山地がある。この阿讃山脈と四国山地に挟まれる形で西から東に向かい吉野川が流れる。吉野川は四国山地中央部瓶ヶ森付近を源流とし、延長194km、四国最大の河川である。流域北岸では扇状地が発達し、南岸では段丘地形が目立つ。

上喜来姪子～中佐古遺跡は徳島県阿波郡市場町に所在する。市場町は県北部、吉野川中流域左岸に位置し、徳島市より約30km程西に位置する。その北部の大半を阿讃山脈が占め、東は板野郡十成町、南は麻植郡鴨島町、同郡川島町、西は阿波町、美馬郡脇町に接し、北側を香川県大川郡白鳥町との県境としている。

遺跡は阿讃山脈の南麓、日開谷川右岸に広がる標高60m前後の段丘上および扇状地上に位置する。遺跡の位置する上喜来、大俣周辺には吉野川により形成された中位段丘面が発達しているが、阿讃山脈から南流する日開谷川をはじめとする諸河川により形成された新期扇状地礫層にそのほとんどが覆われており、段丘そのものは吉野川沿いに南縁がわずかに露出しているのみである。また遺跡の位置する段丘面は9mの比高差を持つ崖面により上位面と下位面に隔てられるが、これは阿讃山脈南麓を東西に走る父尾断層による垂直方向の変異によるものと捉えられており、本来は同一面であったと考えられている⁽¹⁾。

当地域は日開谷川沿いに阿讃山脈の境目集落を越えて香川県大川郡へと至る街道筋にあたり、物資の運搬を通じて阿讃交通の要衝であった。また東西方向の交通に関しては古くから吉野川を利用した水運が盛んであり、吉野川沿いの岩津などの地名にその名残をとどめている。

2 歴史的環境

ここでは日開谷川両岸に広がる段丘面、流域に広がる扇状地上に立地する遺跡を中心に当

遺跡周辺の歴史環境を概観する。

上喜来蛭子～中佐古遺跡周辺で現在確認されている旧石器時代の遺跡は、いずれも遺物の表面採集に伴う断片的なものであるが、主として日開谷川沿いの段丘面上に分布している。上喜来遺跡⁽²⁾は日開谷川右岸の標高約75mの段丘上に位置する。ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核などが採集されている。上喜来遺跡の立地する段丘上の北側1.2kmほどに位置する平地遺跡⁽³⁾では剥片が採集されており、日開谷川左岸の標高約45mの段丘先端部に位置する上野段遺跡⁽⁴⁾ではナイフ形石器が採集されている。今回の調査で出土した当遺跡の旧石器はいずれも原位置を遊離したものであるが、前述の上喜来遺跡と一連の遺跡を形成し、当地域での旧石器時代の遺跡群の拠点的な性格を持つ遺跡と考えられている⁽⁶⁾。

当地域では従来縄文時代の遺跡は確認されておらず、今回の調査で初めて縄文時代晩期に属する遺構が発見された。この他上喜来や切幡等の段丘から山間部にかけての地域で石畿が表面採集されており、今後これらの地域で縄文時代の遺跡が確認される可能性が高い。古田遺跡



- | | | | |
|------------|-----------|-----------------|------------|
| 1. 上喜来遺跡 | 2. 平地遺跡 | 3. 上野段遺跡 | 4. 古田遺跡(Ⅱ) |
| 5. 日吉～金清遺跡 | 6. 八坂神社古墳 | 7. 建布都古墳 | 8. 香美窯址 |
| 9. 上喜来遺跡 | 10. 秋月城址 | 11. 上喜来蛭子～中佐古遺跡 | |

第4図 周辺の遺跡分布図

(Ⅱ)⁽⁶⁾は、切幡の柿木谷川が形成する扇状地上に位置する。平成元年の発掘調査では包含層より縄文時代晩期前半の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡も不明な部分が多い。当遺跡で弥生時代中期の竪穴住居が1軒確認された他は、平成元年にセンターが発掘調査を行った日吉～金清遺跡⁽⁷⁾で弥生時代中期末葉～後期初頭にかけての土器が若干出土している程度である。

古墳時代後期にはいと古野川北岸地域には精力的に古墳の造築が開始される。当地域では古墳は主として口開谷川両岸の段丘突端に築造されている。主な古墳としては、昭和28年に発掘され、鉄剣、耳環、玉類を出土した香美の八坂神社古墳がある⁽⁸⁾。この他町筋、香美秋葉神社境内など数カ所で古墳の発掘がなされ、町筋では土器、金環、直刀が出土し、秋葉神社では金環が出土したとの記録があるが⁽⁹⁾、詳細は不明である。

古代から中世にかけての遺跡としては昭和62年に県教育委員会が発掘調査した香美窯址⁽¹⁰⁾がある。灰原のみの調査で窯本体は未調査であるが、須恵器の壺、甕を主体とした生産が行われており、平安時代中期(9世紀末)から平安時代末(11世紀末～12世紀)にかけて稼働したものと考えられている。現在のところ消費地遺跡での出土例が確認されておらず、製品の供給量、流通のシステムなど不明な点が多いが、当該期の古野川中流域における窯業生産の在り方を考える上で重要な遺跡である。

中世の遺跡としては前述の日吉～金清遺跡で14世紀後半～15世紀の掘立柱建物跡、土壌墓などが確認されており、該期の山間部の小集落の景観を復元し得る資料である。また出土遺物は当遺跡と比較的近い内容を有し、相互の比較検討を通じて14世紀～16世紀にかけての当地域の上器相をより明瞭にすることが可能となろう。当遺跡の西1kmの阿讃山脈南麓斜面に位置する上喜来遺跡⁽¹¹⁾は平成4年センターにより発掘調査され、15～16世紀にわたる火葬を主体とした中世墓群が確認されている。阿讃山脈から南に延びる尾根の斜面を段状に削平し、墓域としたもので、小石室、焼土壇、火葬施設などが検出されている。該期の墓制、墓域の構成を考える上で重要な遺跡である。また南北朝時代には阿波国守護に補任された細川氏が建武三(1336)年に秋月城(現板野郡土成町秋月)に守護所をおいた。秋月城は明德二(1391)年に守護所が勝瑞城(現板野郡熊住町勝瑞)に移されるまでの間、細川氏の領国支配の拠点となった。

注

- (1) 岡田篤正「吉野川流域の中央構造線の断層変異地形と断層運動速度」『地理学評論』43-1 1970
- (2) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 1976
- (3) 注(2)と同じ

- (4) 注(2)と同じ
- (5) 早淵隆人「旧石器遺跡立地についての一視点—吉野川北岸域を中心として—」徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真朱』創刊号 1992
- (6) 柴田昌児「古田遺跡(Ⅱ)」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 1』 1990
- (7) 久保隆美朗「日吉〜金清遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 1 1990
- (8) 市場町教育委員会『ふるさとの散歩路』 1982
- (9) 『市場町史』
- (10) 徳島県教育委員会『香美窯址現地説明会資料』 1987
- (11) 高岡裕「上喜来遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 4 1992
- なお上喜来遺跡の名称については、旧石器の散布地として知られる地点が別にある。

参考文献

- 地学班・阿子島功他「市場町とその周辺の中央構造線の活断層運動」『総合学術調査 市場』
市場町 阿波学会 徳島県立図書館 1979
- 『角川地名大辞典36 徳島』 1986 角川書店

Ⅲ 調査成果

1 基本層序

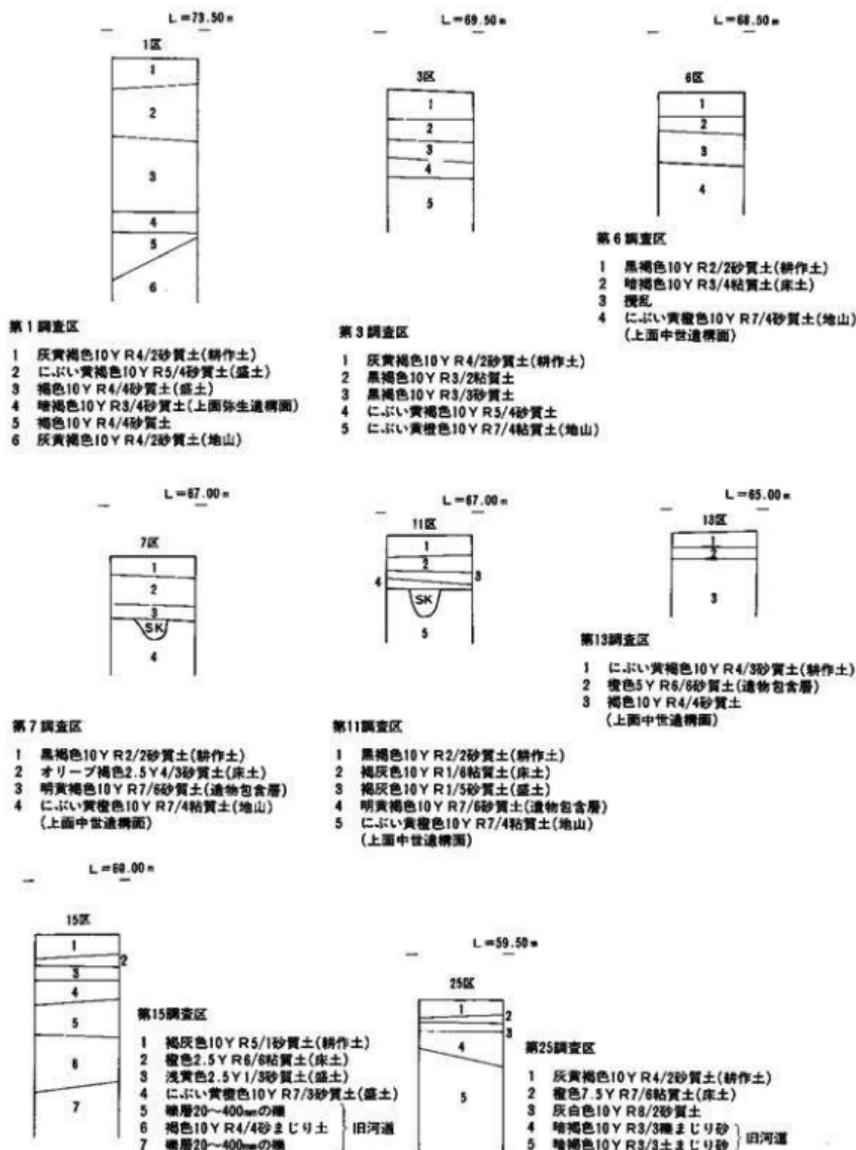
本遺跡は阿讃山脈南麓の段丘上及び日開谷川右岸の扇状地上に位置する。調査地はこれを東西に横断するかたちで設定され、西端の第1調査区から東端の第26調査区に至る総延長距離は765mに及ぶ。調査地は段丘上に位置する第1～14調査区と段丘下の扇状地上に位置する第15～26調査区の大きく2ヶ所に分かれており、土層もこれに従い大要2種の堆積を示す。

段丘上の各調査区は現在の市場町上喜米字窪二俣の集落内にあり、調査前は水出あるいは畑として利用されていた。こうした田畑の耕作に伴う削平、盛り土が繰り返して行われており、遺構の遺存状況は良好な状態とはいえない。また調査地が広範にわたるため、段丘上でも地点が異なれば土層の堆積に相違が認められ、調査区ごとの土層のつながりや、対応関係については不明な点が多い。扇状地上の各調査区は日開谷川の旧河道上に位置するものが多く、ほとんどの地点では下部に礫層あるいは砂層といった河川による堆積が確認された。現在はこうした砂礫層上に盛り土を施し田畑として利用がなされている。

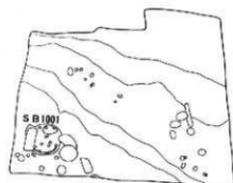
調査地現地表面の標高は最も高い地点が段丘上の上位面に位置する第1調査区で約72.5mを測る。段丘下位面は西側の第2調査区で標高約67.5m、段丘下位面東端の第14調査区で標高約64.5mを測り、西から東に向かい緩やかに下る。段丘東端と下部の扇状地は比高差およそ6.5mの崖面で隔てられている。扇状地上の第15調査区～第26調査区はほぼ平坦であり標高約58mほどである。各調査区の遺構面の現地表面からの深さは削平、盛り土の有無により様々であるが、概ね0.2～0.6m程度である。

本遺跡の土層断面の観察は基本的に各調査区の四壁について行ったが、記録は東西または南北の任意の壁について行った。報告にあたってはこの上層記録をもとに柱状模式図を作成した。以下にこの柱状模式図をもとに各調査区のうち、遺構の確認された地点と確認されなかった地点の基本的な土層の堆積状況について述べる。(第5図)

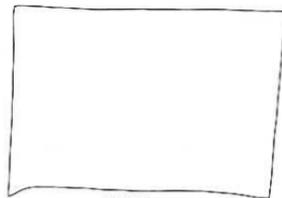
第1調査区は段丘上位面に位置しており、調査前は畑として利用されていた。表土下には厚さ1m以上にわたり盛り土が施されており、その下部の暗褐色砂質土の上面で弥生時代の堅穴住居跡を検出した。第3調査区は段丘下位面に位置し、調査前は水田や畑として利用されていた。地表面から基盤層に達するまで3層の遺物を殆ど含まない層が堆積し、明確な遺構面は確認できなかった。第6調査区では耕作土、床土の下に中世の遺物包含層が堆積し、その下部のふい黄褐色砂質土の上面で中世墓を検出した。第7調査区では中世の遺構群が確認されている。耕作土、床土の下に盛り土が施されているが、その下部に厚さ15cmほどの



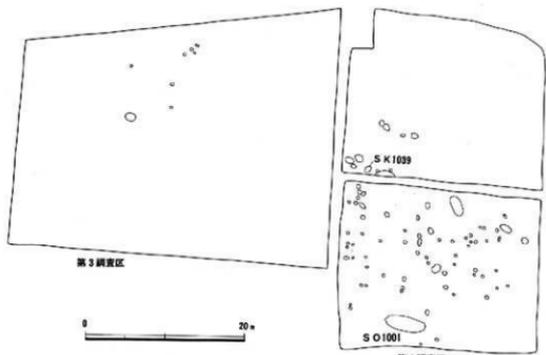
第5図 基本土層柱状図



第1調査区

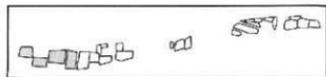


第2調査区

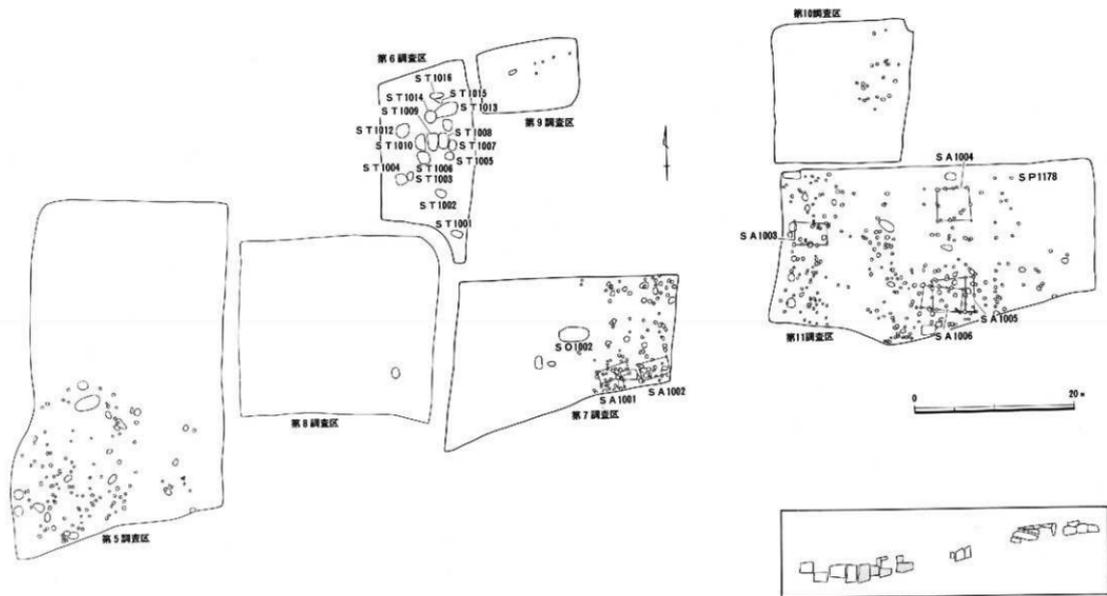


第3調査区

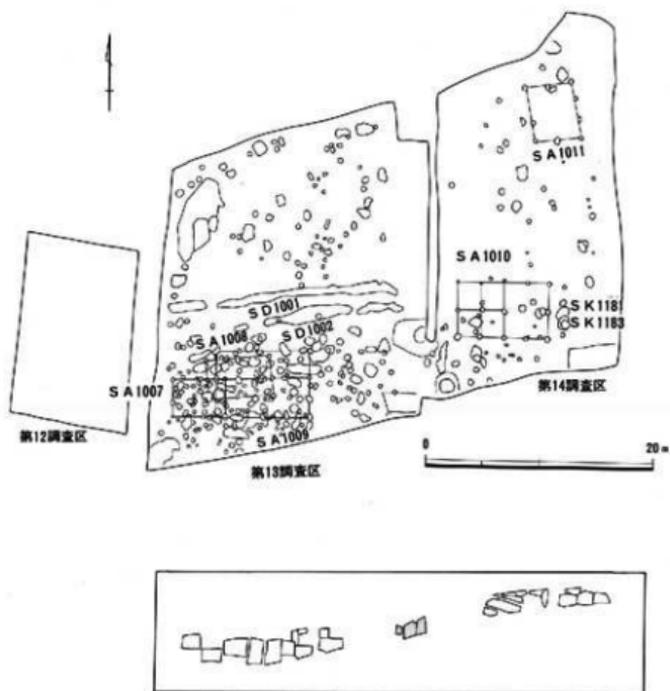
第4調査区



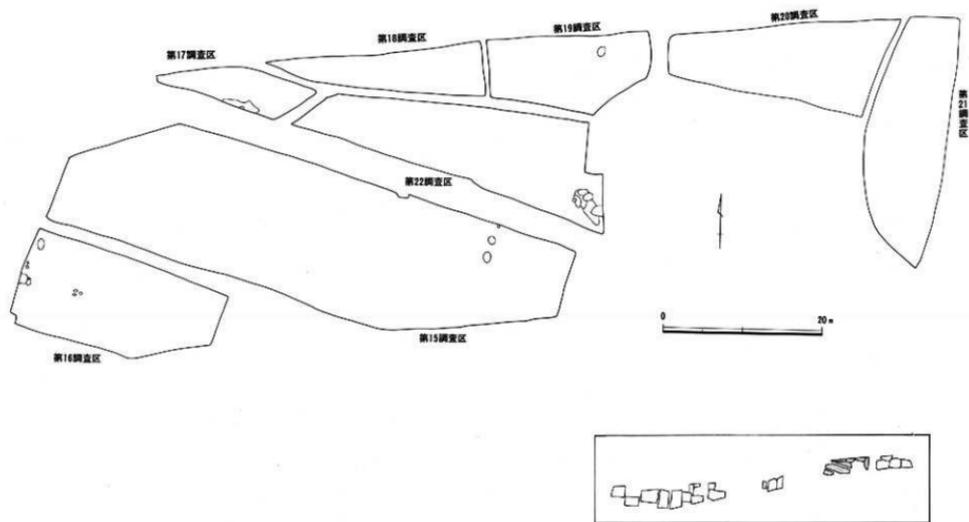
第6図 遺構配置図(第1~4調査区)



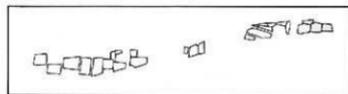
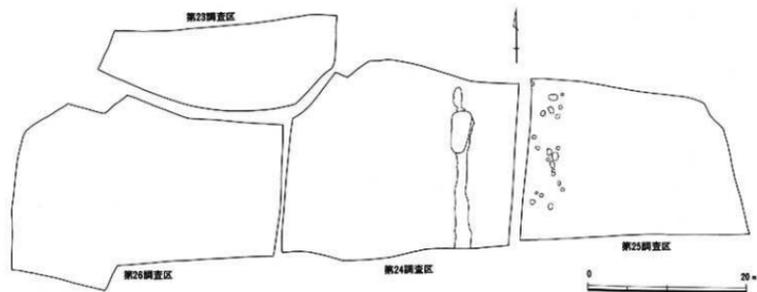
第7図 遺構配置図（第5～11調査区）



第 8 図 遺構配置図 (第12~14調査区)



第9図 遺構配置図 (第15~21調査区)



第10図 遺構配置図（第24～26調査区）

遺物包含層が確認できた。遺構はにぶい黄橙色粘質土を掘り込んでおり、第6調査区の中世遺構面と対応する。第11調査区でも中世の遺構群が確認されている。耕作土、床上、盛り土の下部に遺物包含層を確認した。遺物は中世を主体とし、これに若干の旧石器や弥生土器片をまじえる。遺構面は第6・7調査区と対応する。第13調査区でも中世の遺構群が確認された。第13・14調査区は耕作による削平が顕著であり、表土下20cmの褐色砂質土の上面で遺構を確認した。

扇状地上の第15調査区では表土下50cm程で礫層を検出した。これより下層は150cm以上にわたり、砂層、礫層の互層となっており、旧河道に相当するものと考えられる。第15～21調査区ではいずれも似通った堆積状況を示し、明確な遺構面は確認できなかった。第25調査区では表土下20cm程で礫混じりの砂層を検出した。ここでも厚さ1m以上にわたり同様の堆積が続き、やはり旧河道上に位置するものと考えられる。第23～26調査区ではこれと似通った堆積状況を示し、第24・25調査区で近世以降の溝とそれに付属すると考えられる若干の遺構を検出した他は確認できなかった。扇状地上に設定された第15～26調査区ではいずれも下層で礫層、砂層が確認されており、現在の日開谷川の流路変更に伴う、旧河道上に位置するものと考えられる。扇状地上では段丘上の調査区で検出したような中世まで遡りえる遺構は検出できなかった。

2 遺構と遺物

遺構の配置については第6～10図に示すとおりである。調査区は段丘上に位置する第1～14調査区と一段下がった日開谷川の旧河道上に位置する15～26調査区の2カ所に大別できる。遺構の多くは段丘上に位置する第1～14調査区で確認されており、旧河道部分にあたる第15～26調査区では第24・25調査区で若干の近世の遺構が確認されたにすぎない。以下では主として段丘面上に位置する第1～14調査区の遺構、遺物について述べる。

今回の調査では旧石器・縄文・弥生・中世・近世の各時代の遺物が出土している。旧石器は包含層よりの出土ではあるが、弥生時代～中世の遺物と混在しており、現位置を遊離したもので安定した出土状態とはいえない。

縄文時代晩期に属する上坑が1基、第4調査区で検出されている。他に同時期の遺構は検出されておらず、包含層中より縄文時代中期に属する上器片が若干出土した程度であり、縄文時代の遺跡の広がりについては確認できなかった。

弥生時代の遺構としては堅穴住居跡が1軒、段丘上位面に位置する第1調査区で検出されている。確実に弥生時代に属すると考えられる遺構はこれ1基のみであったが、弥生土器、石器等は各調査区の包含層より少量出土しており、該期には段丘面上に一定の遺跡の広がりがあったものと推定できる。

中世の遺構は主に段丘下位面の東側、第4～14調査区にかけて検出されている。柱穴約2000基、掘立柱建物跡11棟、土坑207基、中世墓16基、炭窯2基、溝、性格不明遺構などを検出しており、集落を構成している。これらは出土遺物からすると15～16世紀を中心とした前後の時期のものと考えられる。また13・14調査区では鋳造作業に伴う遺物、遺構が集中して検出されており、該期の集落の一角で鋳造作業が行われたことが確認された。

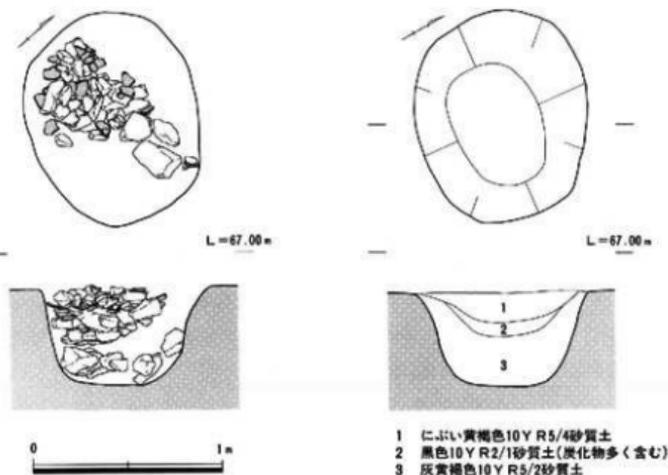
以下に検出遺構、出土遺物の内で資料化可能なものを抽出し、時代を追って説明を加える。

(1) 縄文時代

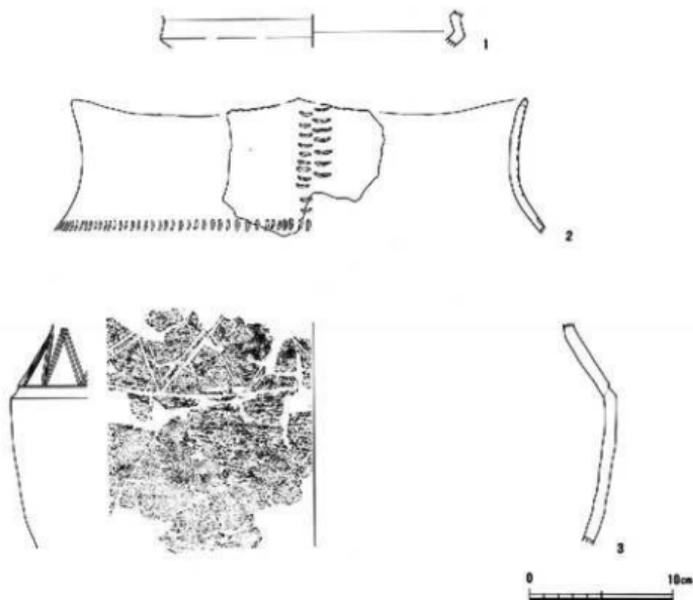
土坑

39号土坑 (SK1039) (第11図)

第4調査区の中央部、G-24で検出した。付近に縄文時代の遺構はなく1基のみが単独で位置する。長軸1.15m、短軸0.85m、深さ0.53mを測り、平面形は楕円形を呈する。壁は垂直に近い角度で立ち上がり底面は平坦である。覆土は3層に分層でき、2層において炭化物の層状の堆積が認められた。また上部から下部にかけて10～30cm大の砂岩角礫が多量に混入しており、礫間より縄文土器片が出土した。時期は遺物から縄文時代晩期中葉と考えられる。



第11図 SK1039実測図



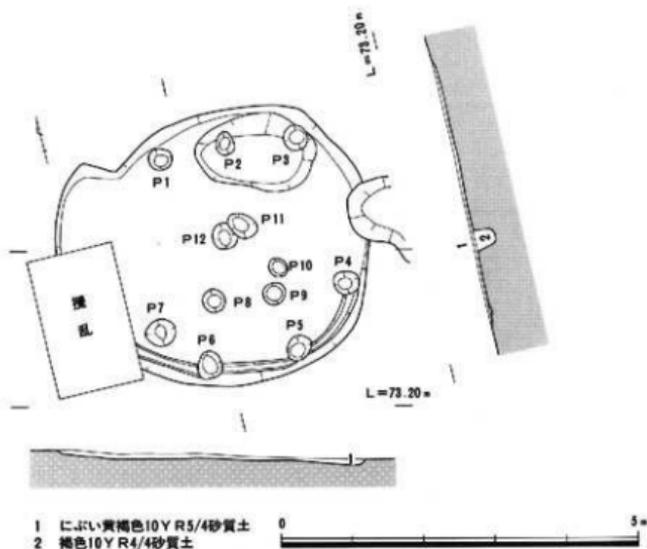
第12図 SK1039出土遺物実測図

出土遺物（第12図）

1～3は縄文土器である。1は浅鉢形土器の口縁部と思われる。内外面に横位のヘラミガキを施す。2は深鉢形土器の口縁部である。体部上半で大きく内屈し口縁部で外反する。口縁部は4単位の山形を呈すると考えられる。体部と口縁部の境に爪形文を1条横位に巡らし、山形から2条の垂下する爪形文を施す。3は深鉢形土器である。口縁部の形状は不明であるが、残存部からすると体部最張部で大きく内屈し口縁部で外反するものと思われる。体部外面は横方向のイタケズリ、上半は2本1組の沈線により斜格子文を描出する。これら縄文土器は原下層式に併行する時期のもので、縄文時代晩期中葉に位置づけられる。

(2) 弥生時代

竪穴住居跡

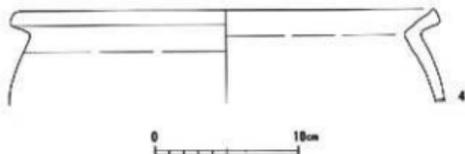


第13図 SB1001実測図

1号竪穴住居跡 (SB1001)

(第13図)

第1調査区の南西隅、G・H-2で検出した。遺構の上面は後世の削平を受けており、南西隅も攪乱により確認できなかった。また東側の一部をSX1010に切られて



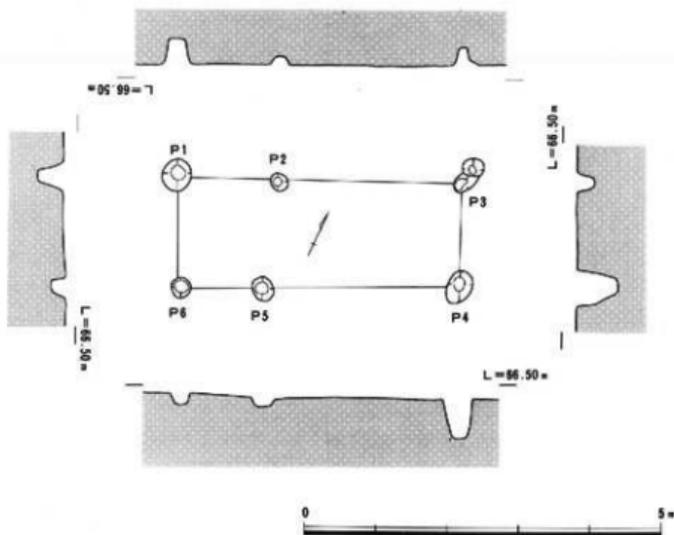
第14図 SB1001出土遺物実測図

いる。長軸4.4m、短軸3.8m、深さ0.07~0.1mを測り平面形は不整形円形を呈する。西側に床面と同じ高さの長方形の張り出しを持つ。床面には12基の柱穴が検出された。掘り方はいずれも円形を呈し直径25~40cm、深さ20~40cmを測る。このうちP1・P2・P3・P4・P5・P6・P7の7基が主柱穴と考えられる。また床面中央で検出した2基のピットP11・P12は内部に焼土、炭化物の堆積がみられず、炉とは考えられないことから中心柱穴としての機能を果たしていた可能性がある。炉穴あるいは焼土面は床面上に確認できず、位置については不明である。床面南半には浅い周壁溝を検出した。本住居跡の覆土は1層であり、少量の弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第14図)

4は菱形土器である。口縁部が「く」字状に外反し、端部をやや肥厚し方形気味におさめる。調整は磨減により不明である。時期は弥生時代中期におさまると考えられる。

(3) 室町時代

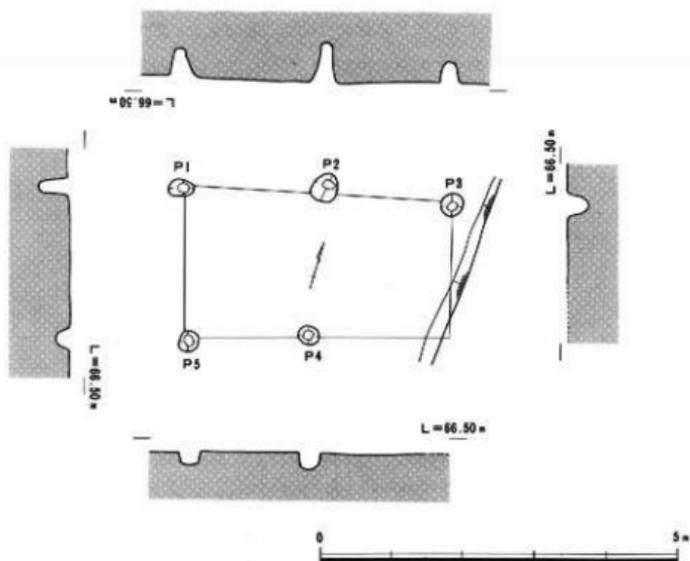


第15図 SA1001実測図

掘立柱建物跡

1号建物跡 (SA1001) (第15図)

第7調査区南東部、E・F-4・5で検出した6基の柱穴より構成される。当遺跡で確認された建物跡の内では最も西に位置する。梁間1間(1.5m)、桁行2間(3.94m)で棟方向はN-70°-Eに向く。柱間距離は梁間1.4~1.6m、桁行1.44~2.76mを測る。柱穴掘り方は円形ないし楕円形を呈し、直径25~40cm、深さ12~50cmを測る。埋土は主に灰黄褐色砂質土でP4に柱痕が認められた。柱穴内部より土師質土器の小片が出土している。時期は14~15世紀頃と考えられる。



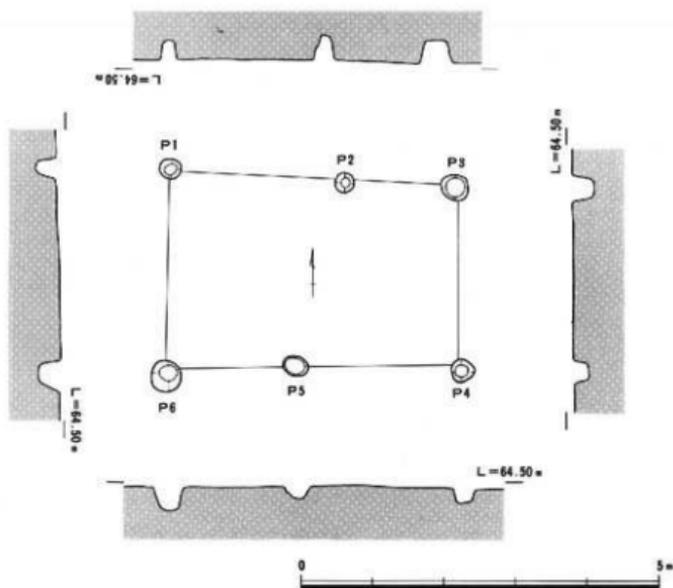
第16図 SA1002実測図

2号建物跡 (SA1002) (第16図)

第7調査区南東隅、E・F-4・6で検出した5基の柱穴により構成される。梁間1間(2.16m)、桁行2間(3.76m)で棟方向はN-74°-Eに向く。柱間距離は梁間2.16m、桁行1.72~2.00mを測る。南東隅の柱穴は確認できなかったが、柱穴の配置から1棟の建物を想定した。柱穴掘り方は不整形を呈し、直径28~40cm、深さ20~56cmを測る。埋土は主に灰黄褐色砂質土でP2に柱痕が認められた。柱穴より土師質土器の小片が出土している。時期は14~15世紀頃と考えられる。

3号建物跡 (SA1003) (第17図)

第11調査区西側、I-50で検出した6基の柱穴により構成される。梁間1間(2.86m)、桁行2間(3.96m)で棟方向はN-89°-Wに向く。柱間距離は梁間2.84~2.88m、桁行1.56~2.40mを測る。柱穴掘り方は不整形あるいは楕円形を呈し、直径20~44cm、深さ25~35cmを測る。埋土は褐色砂質土、黄褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。P4は根石を伴う。柱穴内部より土師質土器の小片が出土している。



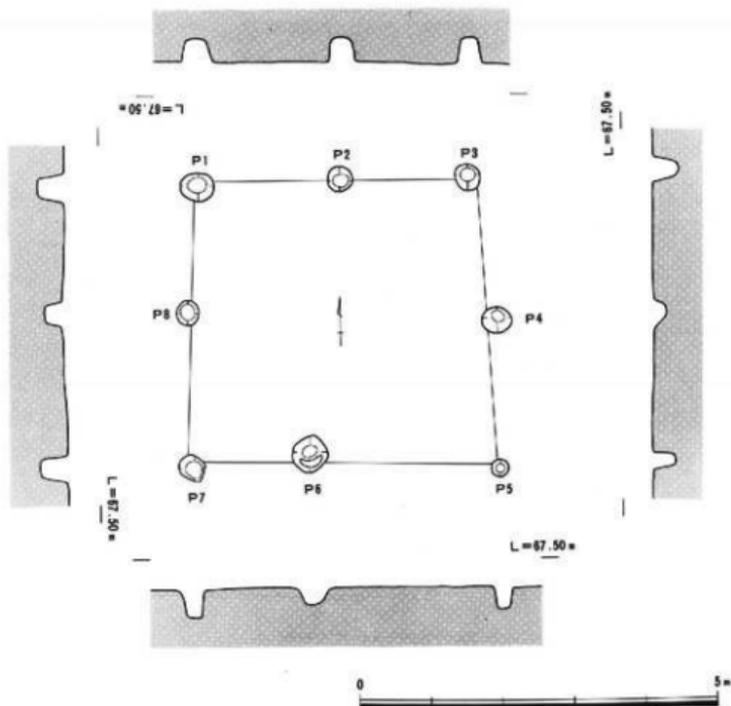
第17図 SA1003実測図

4号建物跡 (SA1004) (第18図)

第11調査区中央部北寄り、J・I-53・54で検出した6基の柱穴により構成される。梁間2間(4.02m)、桁行2間(3.98m)で棟方向はN-89°-Wに向く。柱間距離は梁間1.86~2.20m、桁行1.60~2.60mを測る。柱穴掘り方は不整形円形を呈し、直径32~52cm、深さ25~40cmを測る。埋土は主に褐色砂質土でP1・P4・P8の3基に柱痕が認められた。柱穴内部より土師質土器、瓦質土器の小片、鉄滓等が出土している。時期は出土遺物より15~16世紀と考えられる。

5号建物跡 (SA1005) (第19図)

第11調査区中央部南寄り、G・H-53・54で検出した10基の柱穴により構成される。SA1006と重複するが新旧関係は不明である。南側梁間列の中央の柱穴を欠くが、梁間2間(4.16m)、桁行2間(4.10m)で東側に半間(1.46m)×2間(4.4m)の廂をもつ。棟方向はN-89°-Wである。柱間距離は梁間1.92~2.40m、桁行1.88~2.16mを測る。柱穴掘り方は不整形円形または楕円形を呈し、直径24~56cm、深さ32~56cmを測る。埋土は主に灰黄褐色砂質

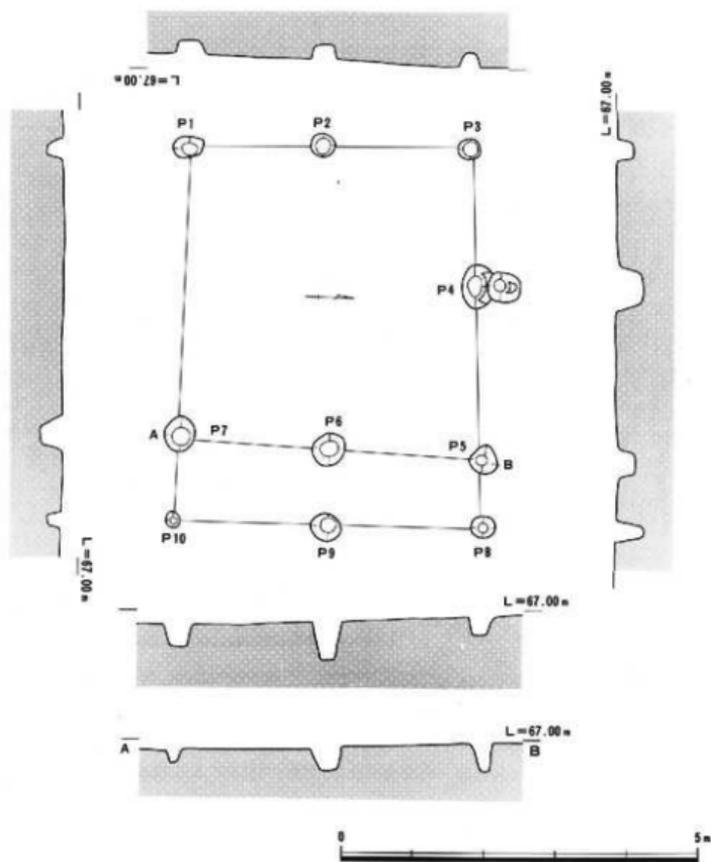


第18図 SA1004実測図

土でP4・P7の2基に柱痕が認められた。柱穴内部より土師質土器の片が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。

6号建物跡 (SA1006) (第20図)

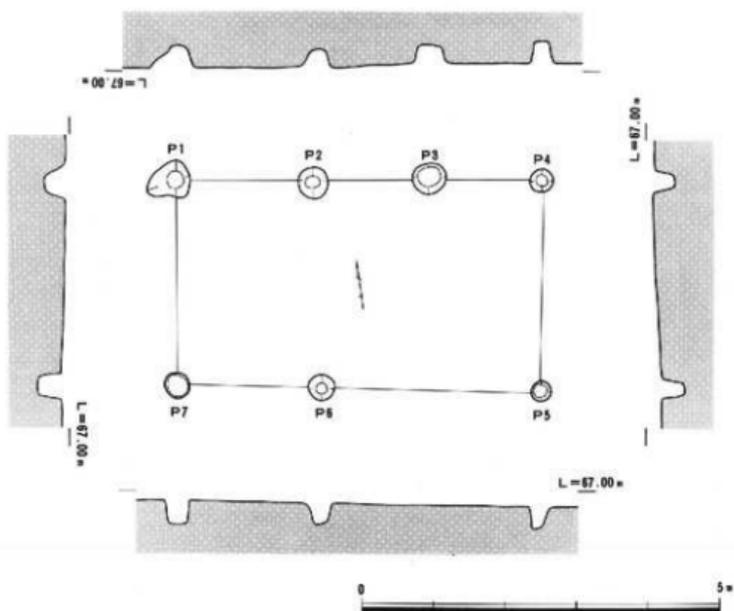
第11調査区中央部南寄り、H・G-53・54で検出した7基の柱穴により構成される。SA1005と重複するが新旧関係は不明である。南側桁行列の一部の柱穴を欠くが梁間1間(2.92m)、桁行3間(4.36m)で棟方向はN-82°-Wを向く。柱間距離は梁間2.88~2.96m、桁行1.60~1.96mを測る。柱穴掘り方は円形あるいは不整形円形を呈し、直径24~56cm、深さ30cm前後を測る。埋土は灰黄褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。P2では底面に根固めと考えられる隙を検出した。柱穴内部より土師質土器の片、サヌカイト片等が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



第19図 SA1005実測図

7号建物跡 (SA1007) (第21図)

第13調査区南西隅、L-80・81で検出した8基の柱穴により構成される。SA1008、SA1009と重複するが新旧関係は不明である。梁間2間(3.28m)、桁行2間(4.64m)で棟方向はN-89°-Wに向く。柱間距離は梁間1.28~2.00m、桁行2.00~2.68mを測る。柱穴掘り方は不整形円形ないしは楕円形を呈し、20~50cm、深さ16~48cmを測る。埋土は主に褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。柱穴内部より土師質土器、備前焼の小片、土製支脚、溶解炉壁片、鉄滓等が出土している。時期は出土遺物より15世紀後半~16世紀と考えられる。



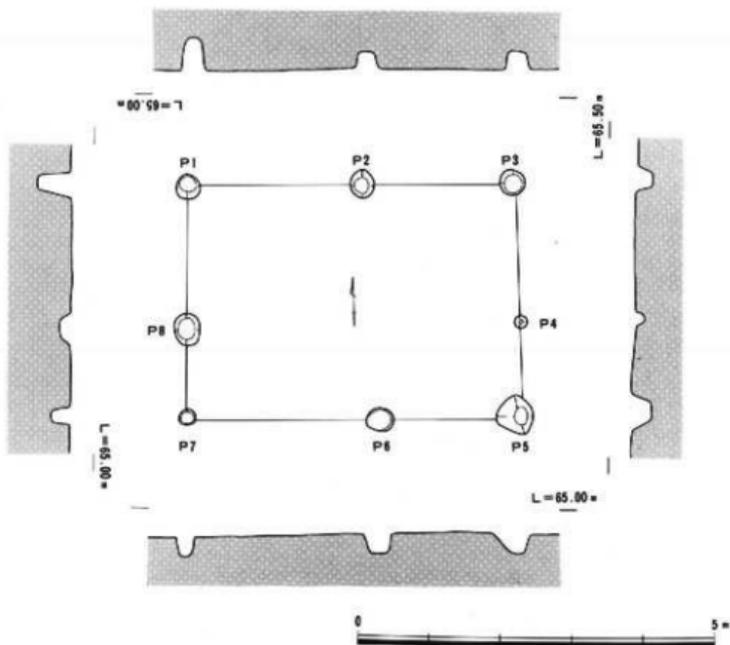
第20図 SA1006実測図

8号建物跡 (SA1006) (第22図)

第13調査区南西隅、M・L-81・82で検出した8基の柱穴により構成される。SA1007、SA1009と重複するが新旧関係は不明である。梁間2間(3.46m)、桁行2間(4.15m)で棟方向はN 86° Eに向く。柱間距離は梁間1.48~2.00m、桁行1.48~3.16mを測る。柱穴掘り方は不整形ないしは楕円形を呈し、直径25~40cm、深さ32~56cmを測る。P7に関しては土坑との切り合いと考えられるが埋土の切り合いは確認できなかった。埋土は主に褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。柱穴内部より土師質土器、備前焼甕の小片、羽口片、溶解灰片等が出土している。時期は出土遺物より15世紀後半~16世紀と考えられる。

出土遺物 (第23図)

5はP6より出土した土師質土器皿である。内外面をヨコナデし、口縁端部を尖り気味におさめる。



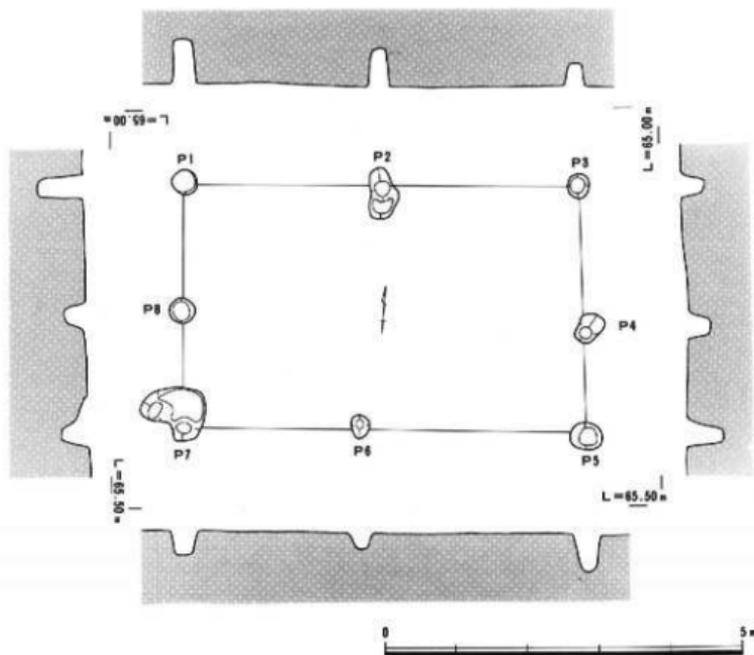
第21図 SA1007実測図

9号建物跡 (SA1009) (第24図)

第13調査区南西隅、M・L-81・82・83で検出した17基の柱穴により構成される。P5がSX1011、P10がSX1012を切り、P13がSK1117に切られている。またSA1007、SA1008と重複しているが、新旧関係は不明である。当遺跡において確認された建物跡の内では最大の規模を有し、梁間3間(6.16m)、桁行4間(7.96m)を測る。棟方向はN-88°-Eに向く。柱間距離は梁間1.64~2.48m、桁行1.80~2.16mを測る。柱穴掘り方は円形のものから長楕円のものまで様々であるが、P1・P4は柱の抜き取り痕と考えられる。規模は直径24~72cm、深さ25~70cmと幅がある。埋土は主に褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。柱穴内部より土師質土器、瓦質土器、備前焼の小片、鋳型、羽口片、溶解炉片、鉄滓等が出土している。時期は出土遺物より15世紀後半~16世紀と考えられる。

出土遺物 (第24図)

6~11はP15(年報SK1035)の肩の部分に一括して投棄されていた土師質土器皿である。



第22図 SA1008実測図

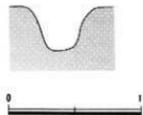
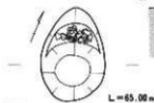
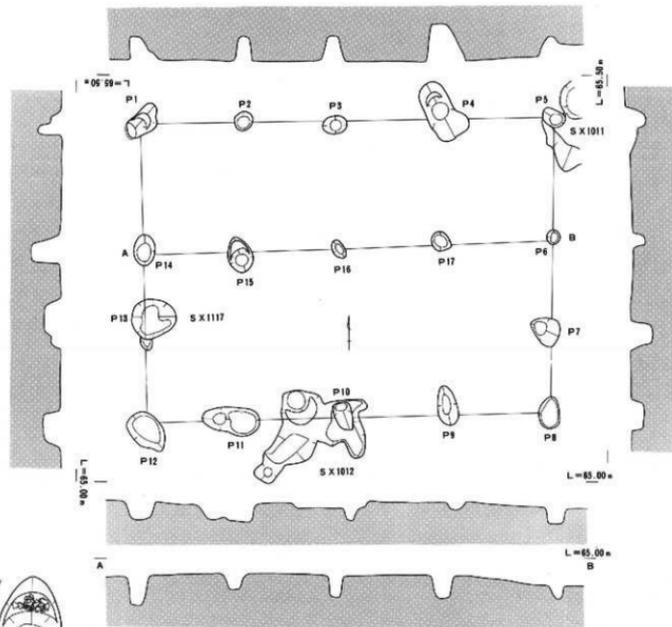
いずれも内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切りである。
 12は底部回転ヘラ切りの土師質土器杯、13は口縁端部を肥厚し、丸くおさめる青磁碗、14は土師質土器釜の口縁部破片である。



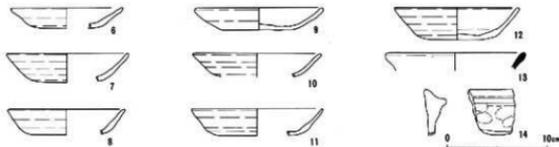
第23図 SA1008出土遺物実測図

10号建物跡 (SA1010) (第25図) (年報SA1002)

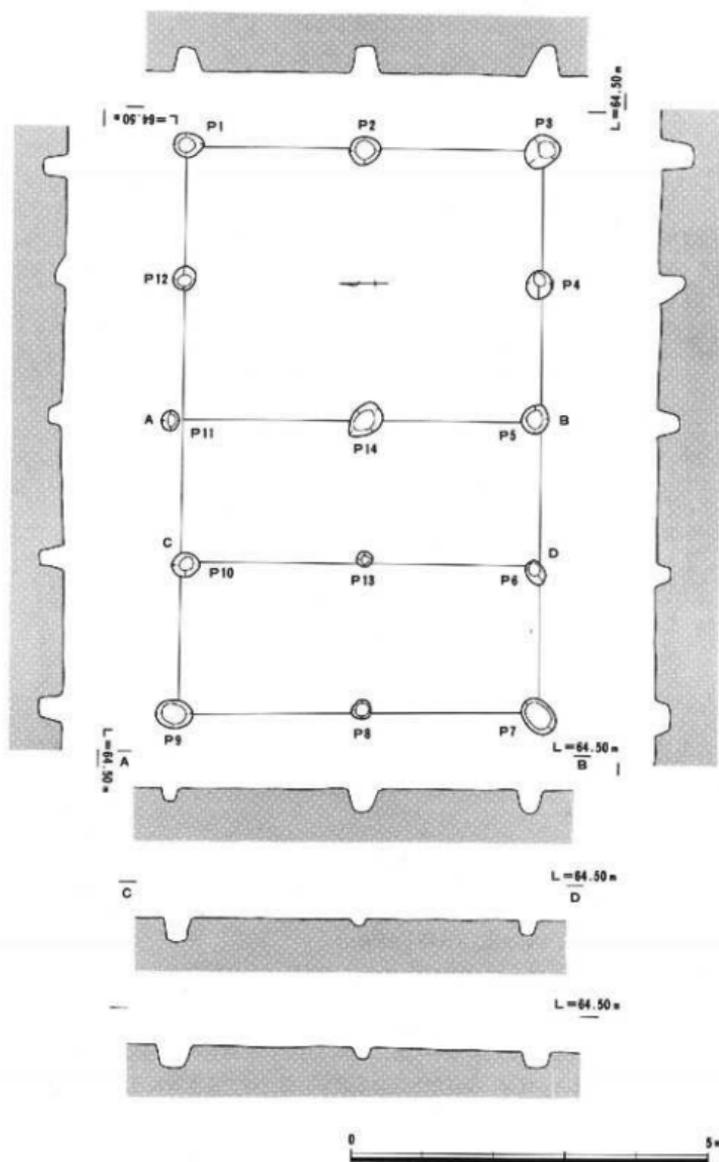
第14調査区南寄り、M・N-85・86・87で検出した14基の柱穴で構成される。梁間2間(5.02m)、桁行4間(7.88m)で、西側2間分の間仕切柱を立てる。棟方向はN-89°Eである。柱間距離は梁間2.48~2.56m、桁行1.80~2.08mを測る。柱穴掘り方は円形ないし楕円形を呈し、直径28~56cm、深さ20~44cmを測る。埋土は主に灰黄褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。柱穴内部より土師質土器の小片、鉄滓、炭化物等が出上している。時期は15世紀後半~16世紀と考えられる。



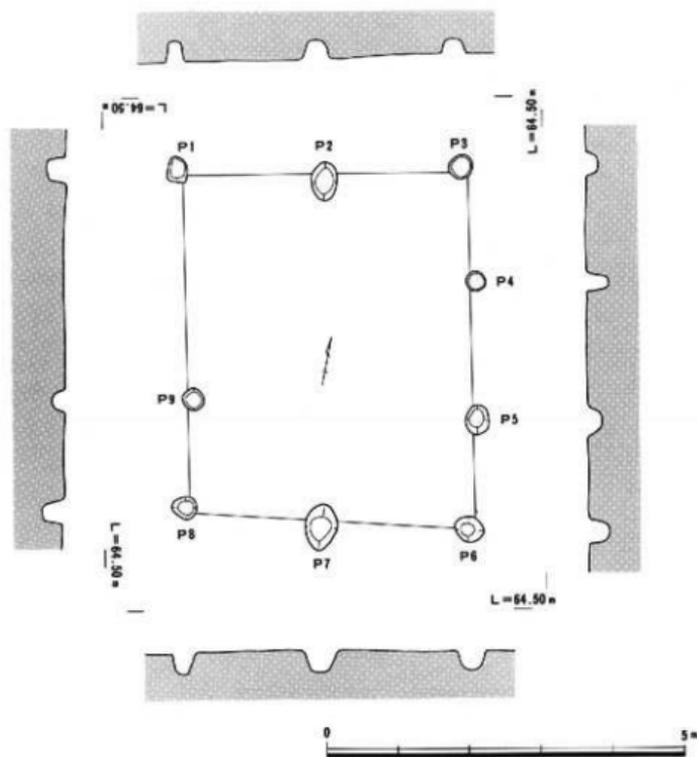
P 15実測図



第24図 SA1009実測図・同出土遺物実測図



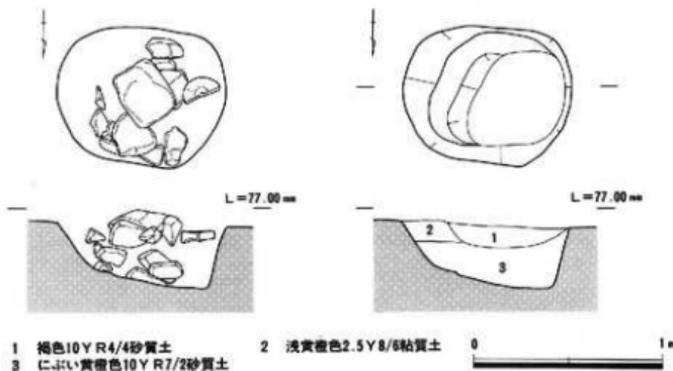
第25图 SA1010实测图



第26図 SA1011実測図

11号建物跡 (SA1011) (第26図) (年報 SA1001)

第14調査区北東部、Q・R-86・87で検出した9基の柱穴により構成される。西側柱穴列の一部の柱穴を欠くが、梁間2間(3.90m)、桁行3間(4.88m)を測り、棟方向はN-10°-Wに向く。柱間距離は梁間1.84~2.04m、桁行1.52~1.92mを測る。柱穴掘り方は円形ないし楕円形を呈し、直径24~56cm、深さ20~32cmを測る。埋土は主に灰黄褐色砂質土で柱痕をとどめるものはない。柱穴内部より土師質土器編、瓦質土器の小片、溶解炉壁片、鉄滓等が出土している。時期は出土遺物より15世紀後半~16世紀と考えられる。

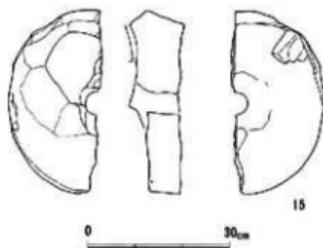


第27図 SK1012実測図

土坑

12号土坑 (SK1012) (第27図)

第11調査区東寄り、H-55で検出した。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸0.82m、短軸0.63m、深さ0.36mを測る。断面は階段状を呈し西側に1段の段を持つ。覆土は3層に分層できる。西側の上部に壁際に沿って厚さ15cm前後の浅黄褐色の粘土が貼られている。土坑内には5~30cm大の砂岩礫を多数混入している。覆土中より土師質土器の小片、砂岩製の挽臼が出土した。



第28図 SK1012出土遺物実測図

出土遺物 (第28図)

15は砂岩製の挽臼である。全周の1/2程を欠失しているが中心に径2.3cmほどの軸受け穴を持つ。外面には菱形の縁どりを施した挽き木穴を持つ。

17号土坑 (SK1017) (第29図)

第11調査区東隅、G-49・50で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸1.12m、深さ0.09mを測る。覆土は1層であり、5~40cm大の砂岩礫を多数混入している。礫中には結晶片岩の角柱状礫を1点まじえていた。覆土内および礫間より土師質土器杯・釜が出土している。

36号土坑 (SK1036) (第30図)

第7調査区南東隅、F-46で検出した。SP1124を切っている。平面形は楕円形を呈し長軸0.92m、短軸0.6m、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土1層であり、底面に20~30cm大の砂岩礫を配している。覆土中より土師質土器杯、鉄製品が出土している。



出土遺物 (第31図)

16は土師質土器皿である。内外面をヨコナデする。17は小刀の破片と考えられる。

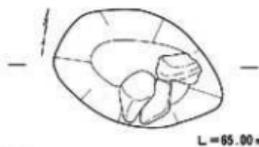


1 灰黄褐色10Y R5/3砂質土

37号土坑 (SK1037) (第32図)

第7調査区南東隅、SK1036の南側で検出した。SP1143により切られる。平面形は不整形を呈し残存長軸0.68m、短軸0.66m、深さ0.15mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土1層で、土師質土器杯・小皿が出土している。土坑底面近くで出土した、ほぼ完形の土師質土器杯(21)は正立した状態であり、中に桃核が1点入っていた。時期は出土遺物より14~15世紀と考えられる。

第29図 SK1017実測図



出土遺物 (第33図)

18・19は土師質土器小皿である。ともに内外面をヨコナデし、底面は回転糸切りである。20・21は土師質土器杯である。ともに内外面をヨコナデし、底面は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。

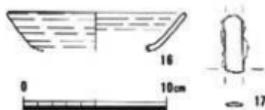


1 灰黄褐色10Y R6/2砂質土

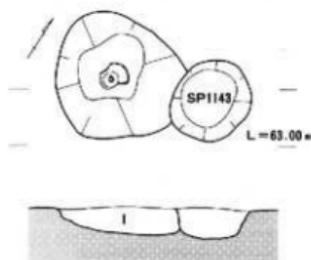
第30図 SK1036実測図

94号土坑 (SK1094) (第34図)

第13調査区、O・P-83で検出した。平面形は中程のくびれた不整形長方形を呈し、長軸0.9m、短軸0.46m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土1層で、土師質土器の小片、鉄滓が出土している。

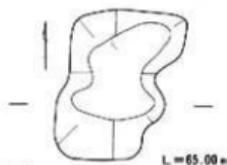


第31図 SK1036出土遺物実測図



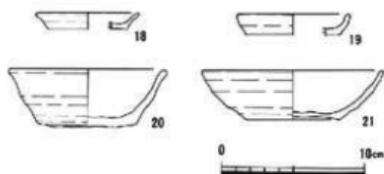
0 1m
1 灰黄褐色10Y R6/2砂質土

第32図 SK1037実測図

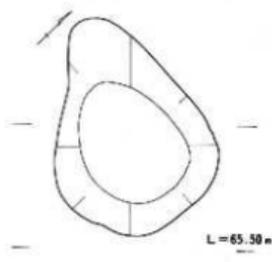


0 1m
1 暗灰黄色2.5Y 4/2砂質土

第34図 SK1094実測図



第33図 SK1037出土遺物実測図



0 1m
1 暗灰黄色2.5Y 4/2砂質土

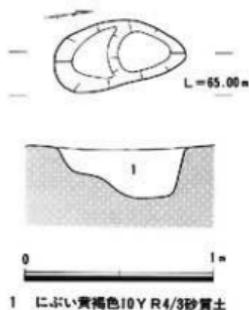
第35図 SK1095実測図

95号土坑 (SK1095) (第35図)

第13調査区、O-83で検出した。平面形は一端の突出した不整円形を呈し、長軸1.18m、短軸0.84m、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土1層で、土師質土器の小片、溶解卵壁が出土している。時期は15~16世紀と考えられる。

96号土坑 (SK1096) (第36図)

第13調査区、O-84で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.34m、深さ0.26mを測る。底面は2段に掘り込まれる。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、土師質

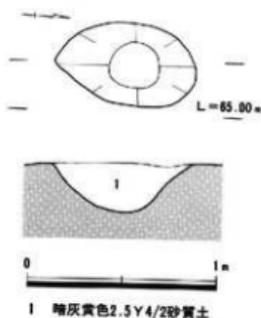


第36図 SK1096実測図

土器、須恵質土器、輪羽口、鉄滓が出土している。
時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

97号土坑 (SK1097) (第37図)

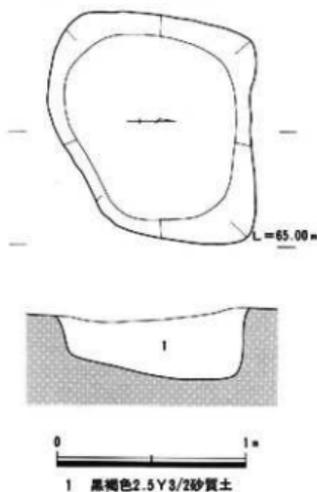
第13調査区、O-83で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.44m、深さ0.26mを測る。覆土は暗灰黄色2.5Y4/2砂質土1層で、土師質土器の小片、輪羽口、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



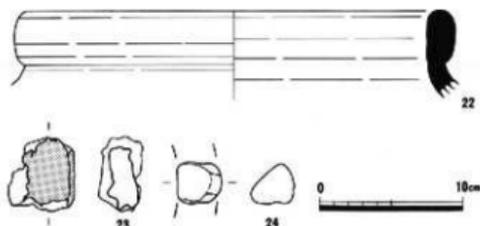
第37図 SK1097実測図

106号土坑 (SK1106) (第38図)

第13調査区西端、N-80で検出した。平面形は不整形を呈し、長軸1.47m、短軸1.10m、深さ0.33mを測る。覆土は黒褐色2.5Y3/2砂質土1層で、小礫を混入している。覆土中より土師質土器の小片、備前焼壺、輪羽口、鉄滓、鋳型、鋳造関連土製品が出土している。時期は出土遺物より15世紀後半～16世紀と考えられる。



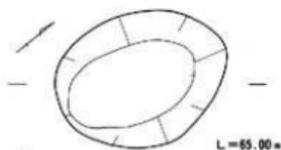
第38図 SK1106実測図



第39図 SK1106出土遺物実測図

出土遺物 (第39図)

22は備前焼の甕である。口縁部の玉縁を幅広くするもので、間壁編年⁽¹⁾のIV期後半に相当し、15世紀後半頃に位置づけられる。23は平坦な鋳型面を持つ鋳型片である。小片のため製品の判断はできない。24は環状土製品の破片である。断面三角形で内側面に被熱痕をとどめる。



107号土坑 (SK1107) (第40図)

第13調査区、M-81で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.62m、深さ0.54mを測る。覆土は黒褐色砂質土1層で炭化物を含む。覆土中より土師質土器杯・搦鉢、鋳型、鉄製品が出土している。時期は出土遺物から15世紀後半～16世紀と考えられる。

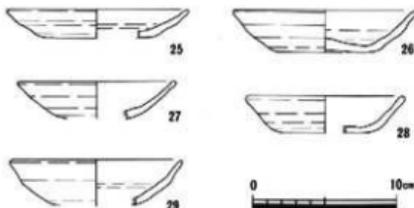


1 黒褐色2.5Y3/2砂質土(炭化物含む)

第40図 SK1107実測図

出土遺物 (第41図)

25は土師質土器皿である。26～29は土師質土器杯である。いずれも内外面をヨコナデし、底面は回転ヘラ切りである。28はヘラ切り後板状圧痕を施す。



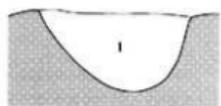
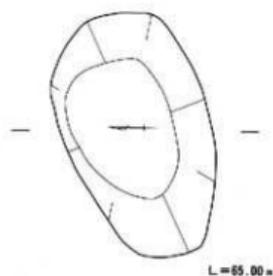
第41図 SK1107出土遺物実測図

108号土坑 (SK1108) (第42図)

第13調査区、M-80・81で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸0.76m、深さ0.42mを測る。覆土は暗灰黄褐色砂質土1層で炭化物を含む。覆土中より土師質土器杯・皿、鉄滓、銅片が出土している。時期は出土遺物から15世紀後半～16世紀と考えられる。

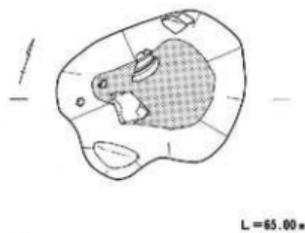
出土遺物 (第43図)

30は土師質土器杯である。底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。外面にタール状のススが付着しており灯明皿として使用されたものと考えられる。31は土師質土器皿である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切りである。



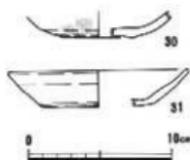
0 1m
1 暗灰色2.5Y4/1砂質土
(炭化物含む)

第42図 SK1108実測図



スクリーントーンは炭化物
1 暗灰色2.5Y4/1砂質土
0 1m

第44図 SK1109実測図

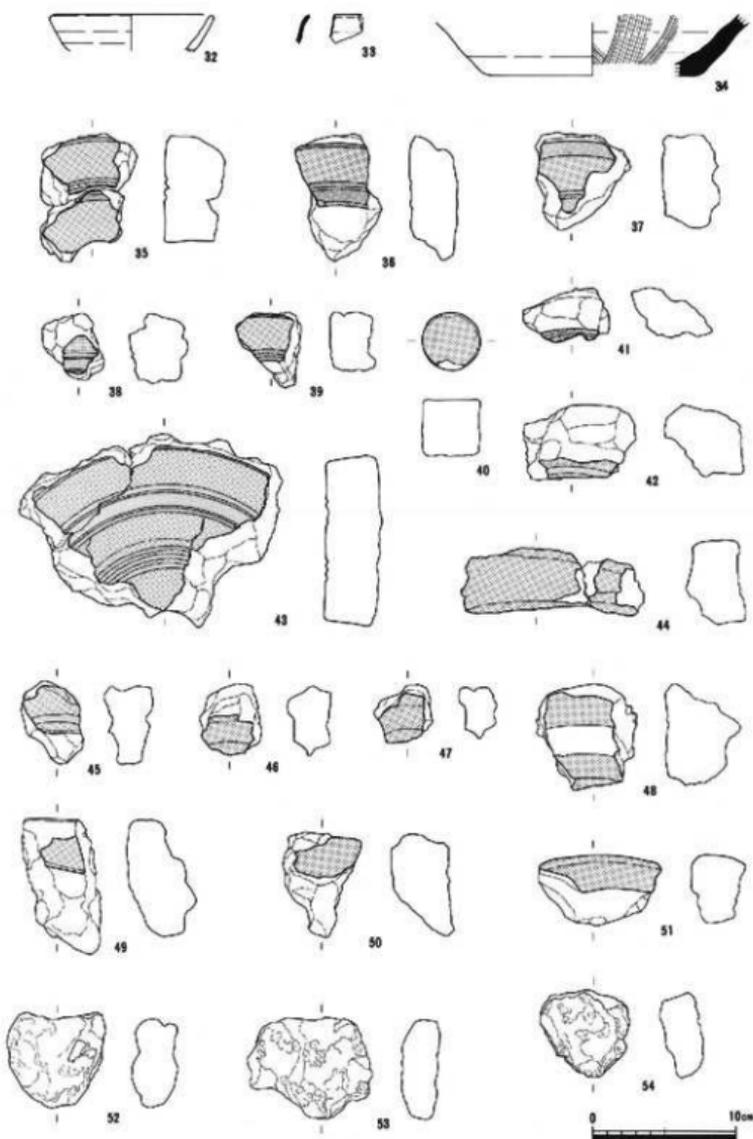


第43図 SK1108出土遺物実測図

109号土坑 (SK1109) (第44図) (年報SK1029)
第13調査区、M-81で検出した。平面形は隅丸の三角形を呈し、両側に半円形の張り出しを持つ。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.87mを測る。底面はほぼ平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。底面上に炭化物の広がりを検出したが、底面、壁面に燃焼痕跡などは認められなかった。覆土は暗灰黄色砂質土1層で、炭化物、砂岩礫を含む。覆土中より土師質土器杯、備前焼播鉢・甕、青磁皿、鋳型、溶解炉壁、鑄羽口、粘土塊が出土している。特に鋳型と粘土塊の出土が目立ち、鋳型は48点 (4.03kg)、粘土塊は75点 (1.65kg) 出土している。出土遺物より15世紀後半～16世紀頃のものと考えられる。

出土遺物 (第45図)

32は土師質土器杯である。33は青磁皿である。口縁部が外反し、端部を尖り気味におさめる。34は備前焼播鉢の底部である。内面に6条1単位の櫛条線を描き、すり目とする。35～51は鋳型である。いずれも真土で形成されており、遺存状態の良いものは断面を観察す

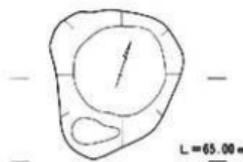


第45图 SK1109出土遗物实测图

ると鋳型面から背面に向かい真土の粒子が3～4段階にわたり粗くなる構造が確認できる。鋳型面は被熱により灰白色を呈するものが多い。35～45は同一個体の鋳型の破片と考えられる。残存部を総合すると、鋳型面は中央に円孔をもつ円盤状を呈し、幾筋かの沈線が圏線状に施されてくることから鋳口の鋳型であると推定できる。35は鋳型面の中央部に円孔を持ち、3条の沈線を施す。36は2条の沈線と1条の凹線を施す。37は1条の沈線と2条の凹線を施す。38は1条の沈線と1条の凹線を施す。39は2条の沈線を施す。40は円柱状を呈し、側面のカーブが35・43に見られる中央部円孔の内側面のカーブと一致することから、円孔を充填したものと考えられる。41・42・45は鋳型面が内屈し、屈曲部分に1条の沈線を施す。43は最も遺存状態がよい。鋳型中央部に円孔を持ち、円孔を中心に圏線状に巡る3条1組の沈線と2条の沈線に挟まれた1条の凹線を施す。さらに最外縁部には1条の沈線が確認できる。46～51は円盤状の鋳型面を持つが、前述の鋳口とは別製品の鋳型と考えられる。46～48は中央部に段を持ち、その部分のみが被熱し変色している。49～51は側面が背面にあたり、鋳型の最外縁部にあたと考えられる。52～54は不定形の粘土塊である。小礫を含み片面が被熱変色している。

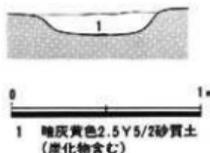
110号土坑 (SK1110) (第46図)

第13調査区、M-81で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で炭化物を含む。覆土中より土師質土器杯・鍋、備前焼甕の小片、鋳型、溶解炉壁が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



出土遺物 (第47図)

55は土師質土器鍋である。口縁部が「く」字状に外反するものと考えられ、端部を方形におさめ、若干凹面につくる。



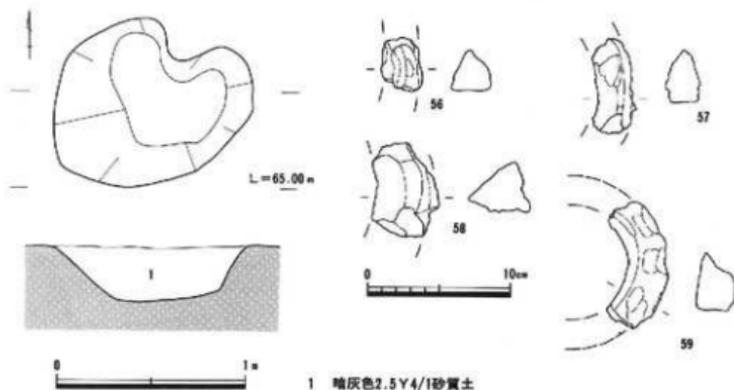
第46図 SK1110実測図

112号土坑 (SK1112) (第48図)

第13調査区、M-81・82で検出した。平面形は2カ所が突出する不整な楕円形状を呈し、長軸1.24m、短軸0.54m、深さ0.36mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色砂質土1層で、炭化物を含む。覆土中より土師質土器杯、備前焼播鉢の小片、溶解炉壁、鷺羽口、鉄滓、鋳造関連土製品が出土している。時期は出土遺



第47図 SK1110出土遺物実測図

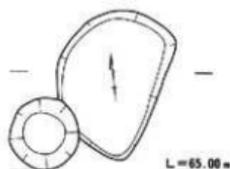


第48図 SK1112実測図・同出土遺物実測図

物より15世紀後半～16世紀と考えられる。

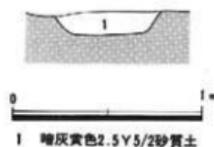
出土遺物（第48図）

56～59は環状土製品の破片である。いずれも断面が三角形を呈し、内側面は被熱変色する。59は復元値で内径8.8cm、外径12.2cmを測る。



113号土坑（SK1113）（第49図）

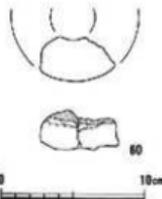
第13調査区、L-80で検出した。SP1725に切られ、SP1724を切っている。平面形は不整な隅丸の長方形を呈し長軸0.74m、短軸0.56m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土1層である。比較的浅めの土坑であるが覆土中より土師質土器の小片、襷羽口、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



第49図 SK1113実測図

出土遺物（第50図）

60は襷羽口である。先端部は溶融し、黒色の滓が付着する。復元値で外径4.4cm、内径1.6cmを測る。

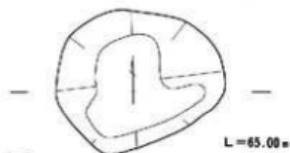


117号土坑（SK1117）（第51図）

第13調査区、L-81で検出した。平面形は不整形を呈

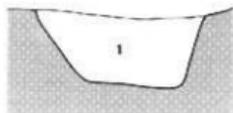
第50図 SK1113出土遺物実測図

し、長軸0.88m、短軸0.64m、深さ0.38mを測る。底面は平坦で壁は西側が緩やかに立ち上がる。覆土は暗灰黄色砂質土1層で、土師質土器皿・播鉢、青磁碗、溶解炉壁、クライ、櫛羽口、鋳型、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



出土遺物 (第52図)

61は土師質土器皿である。内外面をヨコナデし、底部は静止糸切りである。底部内面と口縁部内外面にタール状のスガが付着しており、灯皿として使用されたものと考えられる。62は土師質土器播鉢である。口縁端部はヨコナデにより凹線状を呈し、内面に3条の櫛描条線を施す。63は青磁碗の底部である。比較的高い高台を持ち、見込みに陶線を1条施す。上田分類⁽²⁾の龍泉窯系青磁碗D-II類に相当すると思われる。

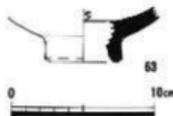


1 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土

第51図 SK1115実測図

118号土坑 (SK1118) (第53図)

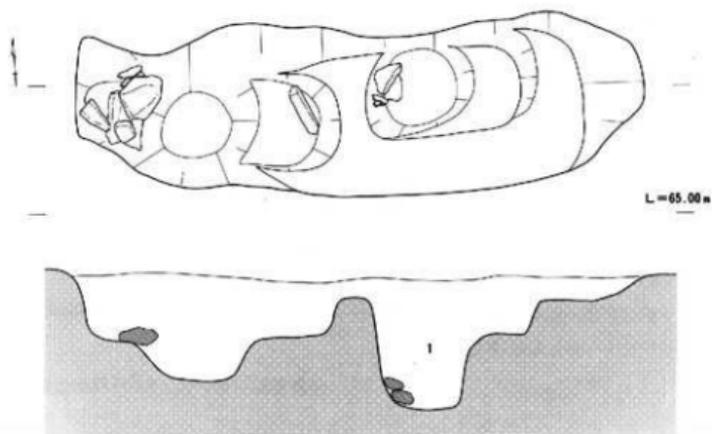
第13調査区、M-82で検出した。東西方向に長く伸びる長楕円形の平面形を呈し、長軸2.78m、短軸0.83m、深さは最深部で0.68mを測る。底面は2ヵ所で深く落ち込み、2～3基の柱穴あるいは土坑の切り合いと考えられるが、調査時には確認できなかった。覆土は暗灰黄色砂質土1層で炭化物を少量含む。覆土中より土師質土器皿、備前焼甕、鋳型、溶解炉壁が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



第52図 SK1117出土遺物実測図

出土遺物 (第54図)

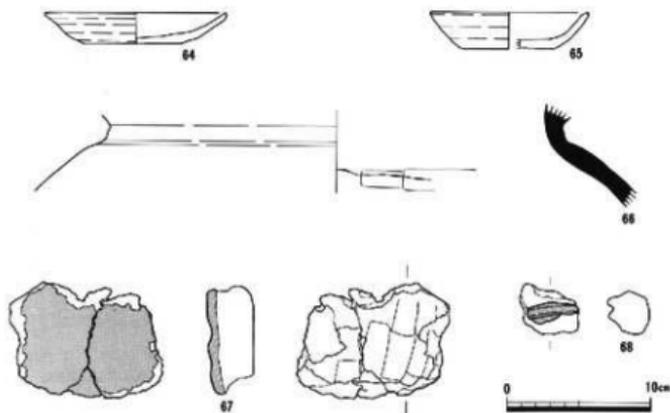
64・65は土師質土器皿である。ともに内外面をヨコナデし、底部は静止糸切りである。65は他の静止糸切の皿に比べて口径が小さく器高が高い。66は備前焼甕の頸部から体部上半にかけての破片である。外面をヨコナデし、内面に横位のイタナデが施される。67は溶解炉壁の破片である。外面に指ナデの痕跡をとどめる。68は鋳型面に1条の沈線を持つ鋳型の破片である。



1 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(炭化物含む)



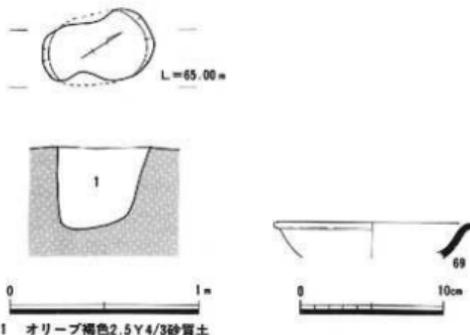
第53図 SK1118実測図



第54図 SK1118出土遺物実測図

119号土坑 (SK1119) (第55図)

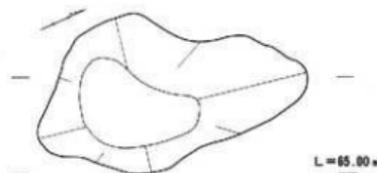
第13調査区、L-80で検出した。平面形は中央のくびれる楕円形を呈し、長軸0.54m、短軸0.24m、深さ0.42mを測る。底面はやや丸く、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土はオリーブ褐色砂質土1層で、土師質土器小片、青磁碗、溶解炉壁、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



第55図 SK1119実測図 第56図 SK1119出土遺物実測図

出土遺物 (第56図)

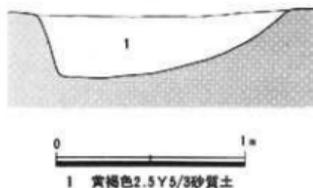
69は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる青磁碗である。上田分類の龍泉窯系青磁碗D-II類に相当し、15世紀代に位置づけられる。



120号土坑 (SK1120)

(第57図)

第13調査区、L-80で検出した。平面形は不整な楕円形に近く、長軸1.44m、短軸0.84m、深さ0.3mを測る。底面は南側が深く、北側で緩やかに立ち上がる。覆土は黄褐色砂質土1層で、炭化物を少量含む。覆土中より土師質土器皿・杯、鉄滓が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



第57図 SK1120実測図

出土遺物 (第58図)

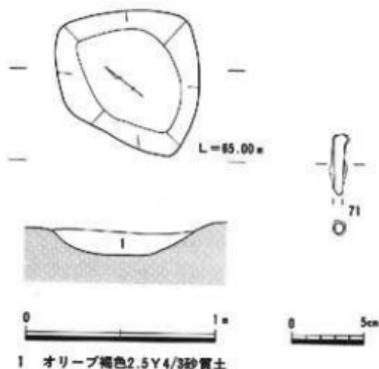
70は土師質土器皿である。底部は静止糸切りである。



第58図 SK1120出土遺物実測図

124号土坑 (SK1124) (第59図)

第13調査区、L-82で検出した。平面形は不整な円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.7m、深さ0.12mを測る。覆土はオリブ褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器、鋳型、鉄釘が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



出土遺物 (第59図)

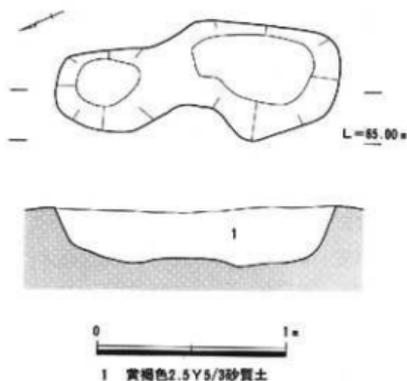
71は鉄釘である。先端部を欠損している。

第59図 SK1124実測図・同出土遺物実測図

126号土坑 (SK1126)

(第60図)

第13調査区、L-82で検出した。南北方向に延びる、中央のくびれた長楕円形の平面形を呈し、長軸1.5m、短軸0.38m、深さ0.3mを測る。底面は南北両端に若干の落ち込みが認められ、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。2基の土坑の切り合いとも考えられるが、調査時には確認できなかった。覆土は黄褐色砂質土1層で、土師質土器皿、播鉢が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



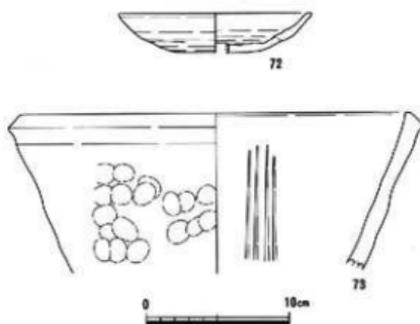
第60図 SK1126実測図

出土遺物 (第61図)

72は土師質土器皿である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。73は土師質土器播鉢である。口縁部内外面をヨコナデし、端部を若干肥厚する。体部外面にユビオサエをとどめ、内面には4条1単位の櫛描条線を施し、すり目とする。

130号土坑 (SK1130) (第62図)

第13調査区、M-84で検出した。平面形は南西側に張り出しを持つ不整な楕円形を呈し、長軸1.24m、短軸0.86m、深さ0.22mを測る。北端にビット状の掘り込みを持つが調査時には切り合いは確認できなかった。覆土は灰黄褐色砂質土1層で土師質土器、溶解炉壁、鉄滓、土製支脚が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



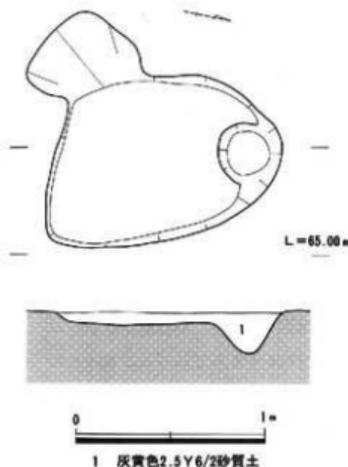
第61図 SK1126出土遺物実測図

出土遺物 (第63図)

74は三叉状の土製支脚の脚部である。

134号土坑 (SK1134) (第64図)

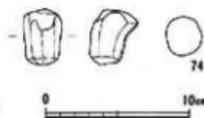
第13調査区、M・L-83で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸1.18m、短軸0.65m、深さ0.28mを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土はオリーブ褐色砂質土1層であり、焼土とともに2cm大の砂岩礫を含む。覆土中より溶解炉壁、鉄滓とともに鉄製品の破片が90点(4.1kg)出土している。錆による劣化が著しいが薄板状の外観を呈しており、農具、あるいは工具であった可能性が高い。時期を決定し得る遺物の出土はないが、周辺の遺構との関連から考えて15～16世紀におさまる可能性が高い。



第62図 SK1130実測図

出土遺物 (第65図)

75～80は鉄製品である。75～79は薄板状で、75は中央部に軸受け穴状の円孔を持つ。79は先端が三角形で断面が山形を呈する。

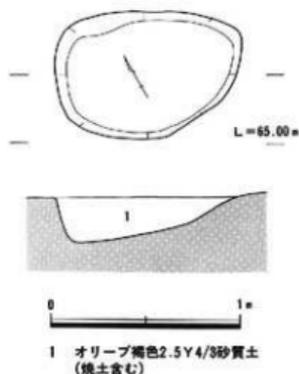


第63図 SK1130出土遺物実測図

80は棒状で断面が菱形を呈する中実の鉄製品である。

135号土坑 (SK1135) (第66図)

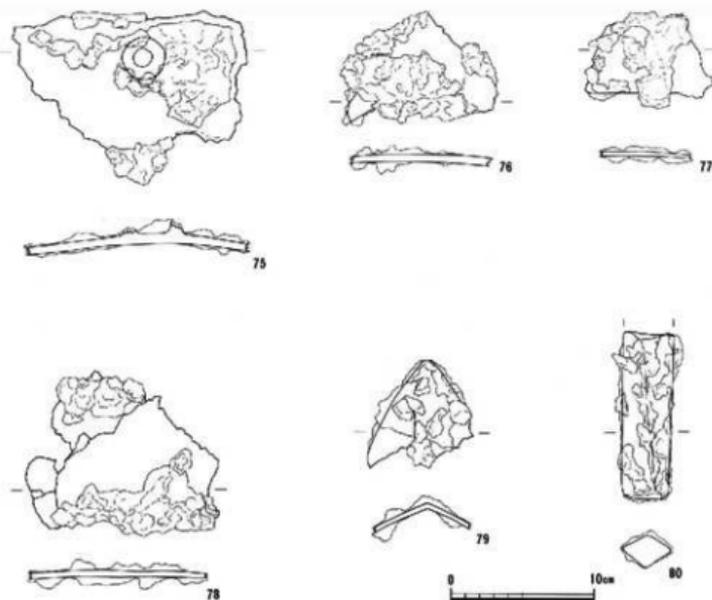
第13調査区、L・M-83・84で検出した。平面形は隅丸状の五角形を呈し南側にテラス状の段を持つ。長軸1.21m、短軸1.08m、深さ0.25mを測る。覆土は黄褐色砂質土1層で5cm大の礫を含む。覆土中より土師質土器小皿が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



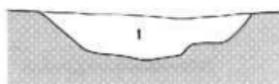
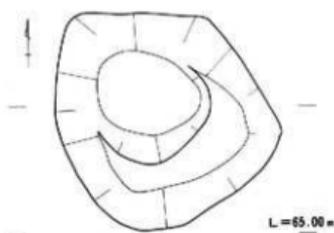
第64図 SK1134実測図

出土遺物 (第67図)

81は土師質土器小皿である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切りである。



第65図 SK1134出土遺物実測図



1 黄褐色2.5Y5/3砂質土

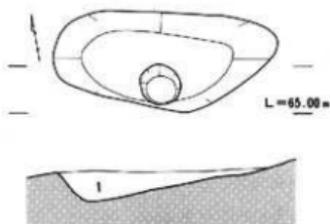
第66図 SK1135実測図



第67図 SK1135出土遺物実測図

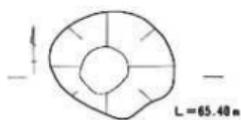
136号土坑 (SK1136) (第68図)

第13調査区、L-83で検出した。平面形は長楕円形を呈し長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.14mを測る。上部は削平を受けていると考えられるが、底部は西側に向かい深くなっている。覆土はオリーブ褐色砂質土1層で、土師質土器の小片、溶解炉壁が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土

第68図 SK1136実測図



1 灰黄色2.5Y6/2粘質土
2 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土

第69図 SK1137実測図

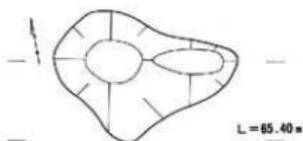
137号土坑 (SK1137) (第69図)

第13調査区、L-83で検出した。平面形は不整形円形を呈し、長軸0.68m、短軸0.54m、深さ0.24mを測る。覆土は灰黄色粘質土と暗灰黄色砂質土の2層に分層でき、土師質土器杯、鉄滓、炭化物が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。

138号土坑 (SK1138) (第70図)

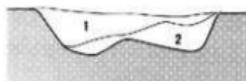
第13調査区、L-83で検出した。平面形は不整形な三角形を呈し、長軸0.98m、短軸0.6m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土と暗オリーブ褐色砂質土の2層に分層でき、特に

下層において炭化物と焼土を含む。覆土中より備前焼の小片、鋳型、溶解炉壁、鉄滓、鉄製品等出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



139号土坑 (SK1139) (第71図)

第13調査区、L-82で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.24m、短軸0.7m、深さ0.32mを測る。覆土は黄褐色砂質土1層で、土師質土器、溶解炉壁、鉄釘が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



- 1 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土
- 2 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土 (焼土・炭化物含む)

第70図 SK1138実測図

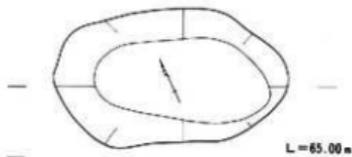
出土遺物 (第71図)

82は釘である。完形で長さ10cmを測る。

142号土坑 (SK1142)

(第72図)

第13調査区、M-81で検出した。平面形は不整な円形を呈し長軸0.46m、短軸0.34m、深さ0.44mを測る。覆土は褐灰色砂質土1層で、土師質土器煮沸具の小片が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。



82



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土

出土遺物 (第72図)

第71図 SK1139実測図・同出土遺物実測図

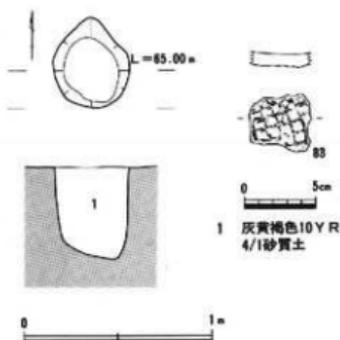
83は土師質土器煮沸具底部の破片である。平底で外面に格子タタキを施す。

147号土坑 (SK1147) (第73図)

第13調査区、L-81で検出した。長軸1.6m、短軸0.52m、深さ0.5mを測る。底面は3カ所で落ち込みが認められ、2基以上の柱穴、土坑の切り合いと考えられる。覆土は灰黄褐色砂質土1層で、土師質土器の小片、備前焼甕、青磁碗、溶解炉壁が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。

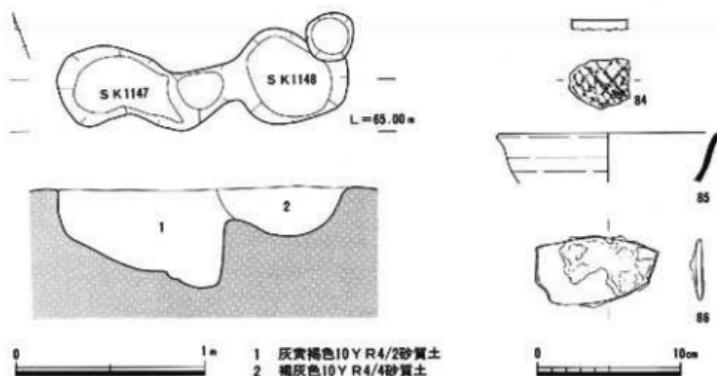
出土遺物 (第73図)

84は土師質土器煮沸具底部の破片である。平底で外面に格子タタキを施す。85は口縁部を外反し端部を丸くおさめる青磁碗である。器壁が薄く外面に回転ヘラケズリを施す。上田分類の龍泉窯系青磁碗D-I類に相当し15世紀代に位置づけられる。85は薄板状で両端部のすぼまる鉄製品である。



157号土坑 (SK1157) (第74図)

第13調査区、M-83・84で検出した。平面 第72図 SK1142実測図・同出土遺物実測図

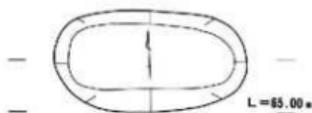


第73図 SK1147実測図・同出土遺物実測図

形は楕円形を呈し、長軸0.61m、短軸0.56m、深さは最深部で0.26mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土1層で、土師質土器の小片、羽口、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

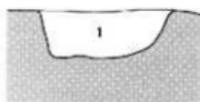
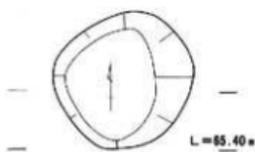
166号土坑 (SK1166) (第75図)

第13調査区、L-82で検出した。平面形は不整形を呈し、長軸0.70m、短軸0.68m、深さ0.24mを測る。覆土は黒褐色砂質土1層で、土師質土器鍋、備前焼の小片、鑊羽口、鋳造関連土製品が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



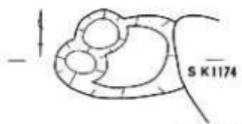
1 灰黄褐色10Y R4/2砂質土

第74図 SK1157実測図



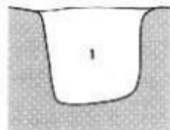
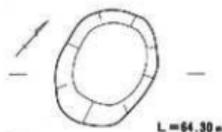
1 黒褐色10Y R3/2砂質土

第75図 SK1166実測図



1 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第76図 SK1173実測図



1 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第77図 SK1179実測図

173号土坑 (SK1173) (第76図)

第14調査区、M-85で検出した。2基の柱穴と土坑の切りあったものと考えられるが調査時には確認できなかった。東側の一端をSK1174に切られている。長軸0.76m、短軸0.5m、深さ0.38mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、土師質土器小皿、桃核が出土している。時期は15～16世紀と考えられる。

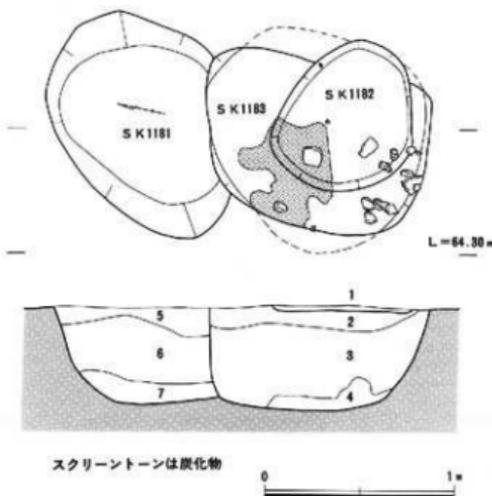
179号土坑 (SK1179) (第77図)

第14調査区、N-86・87で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.84m、短軸0.5m、深さ0.5mを測る。覆土にはふい黄褐色砂質土1層で、土師質土器小片、鑢羽口、鉄滓、鉄製品が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

181号土坑 (SK1181)

(第78図) (年報SK1101)

第14調査区、N-87で検出した。SA1010の東側に位置し、SK1183に切られている。平面形は切り合いのため不明であるが不整な楕円形を呈すると考えられる。長軸1.18m、短軸0.98m、深さ0.5mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は3層に分層でき、下層ほど粘性が強い。覆土中より鑄造関連の遺物が933点(22.2kg)出土しており、鑄造作業にともなう廃棄土坑であったと考えられる。主な鑄造関連遺物の数量は溶解炉壁158点(6.21kg)、クライ57点(1.41kg)、鑢羽口101点(3.42kg)、鉄滓422点(8.87kg)、鑄型48点(1.24kg)、鑄造関連土製品5点(0.2kg)である。地金の溶解作業に関連する溶解炉壁、クライ、鑢羽口、鉄滓の占める割合が特に高い。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

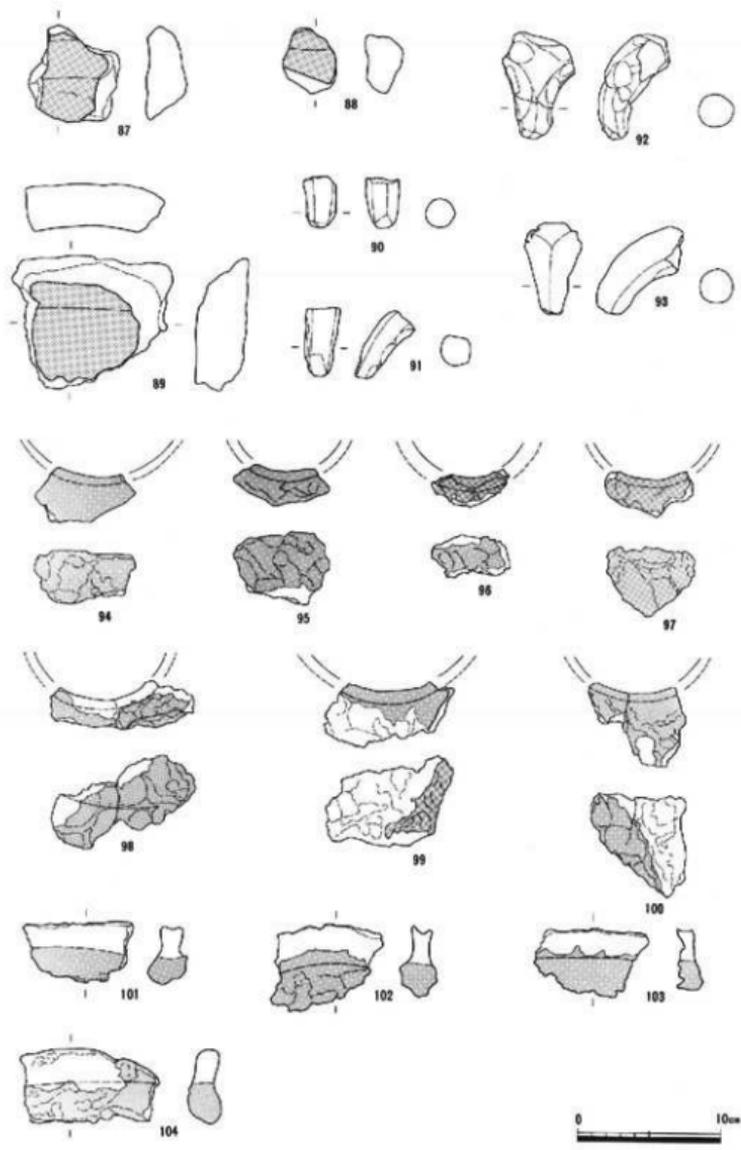


- 1 黄褐色10Y R5/6砂質土(焼土層)
- 2 黒褐色10Y R3/2砂質土(炭・灰含む)
- 3 黒褐色10Y R3/2砂質土(炭・灰多量に含む)
- 4 じふい黄褐色10Y R5/3粘質土(粘土塊)
- 5 暗褐色10Y R3/3砂質土
- 6 黒褐色10Y R3/1粘質土(炭含む)
- 7 黒褐色10Y R3/2粘質土(炭含む)

第78図 SK1181・1182・1183実測図

出土遺物 (第79～80図)

87～89は鑄型である。87は鑄型面に幅広の凹面を持つ。鑄型面は被熱により灰白色を呈し、一部にクロミが残存する。88も同様に幅広の凹面を持ち、87と同一個体と考えられる。一部にクロミが残存する。89は鍋の鑄型と考えられる。鑄型面は内側にアールをもち、上部で外



第79図 SK1181出土遺物実測図(1)

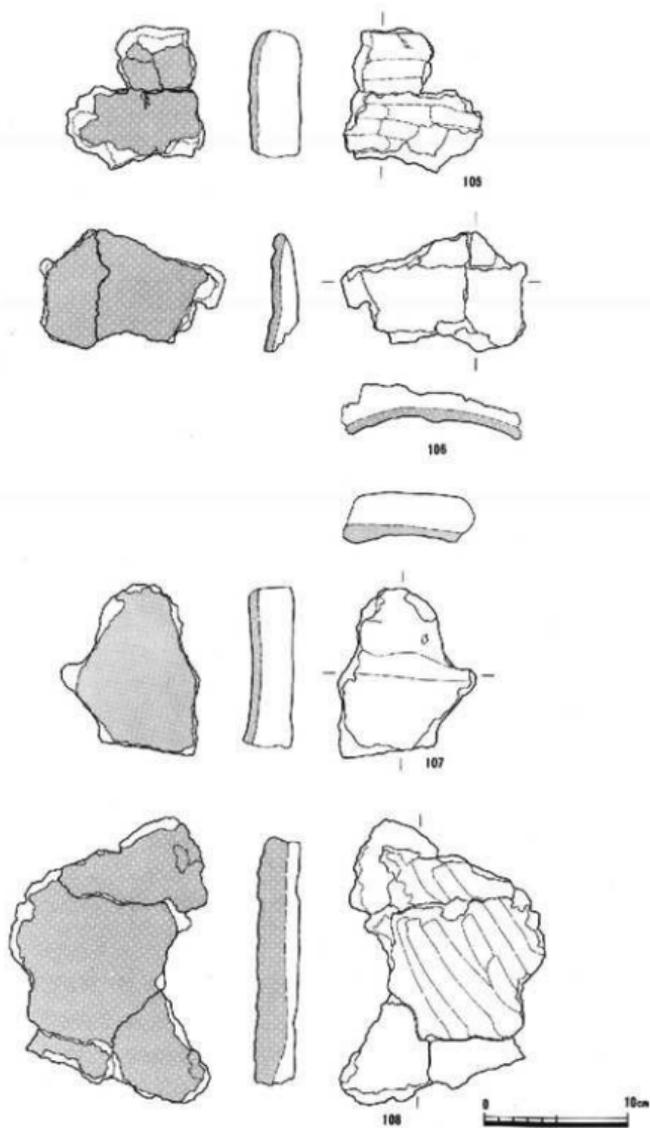
反する。鋤型面は被熱により灰白色を呈し、広範囲にクロミの残存が認められる。90～93は土製支脚である。上面は被熱痕が顕著であり、92・93には滓状の薄い皮膜が観察できる。90・91は脚部のみ、92・93は三又状を呈する。94～100は鞆羽口の破片である。前述したように遺構内からは多数の鞆羽口片が出土しているが、全容を復元し得るものではなく、比較的長さの短い破片が目立つ。ここでは内径、外径の復元値が得られる先端部を主に図示した。内径は8.1～14.0cm、平均10.3cmを測る。これら鞆羽口はいずれも先端部が溶融し、先端部から体部外面にかけて滓が付着している。先端部の滓は小粒状の鉄質を呈し、体部の滓は暗赤褐色のガラス質である。97は先端部より内側の如体内に向かい滓が突出する。101～104は溶解炉壁間を連結するクライの破片と考えられる。内側に滓が付着し、外側は粘土が上下に広がった断面T字状を呈する。図示したものは小片であるが内側に向かいアールをもつことから元来は輪状を呈したものと考えられる。105～108は溶解炉壁である。内側に向かいカーブを持つことから、「こしき炉」と呼ばれる分割可能な出筒状の溶解炉の壁と考えられる。105・108は外面に指ナデの痕跡をとどめ、内側に滓が付着する。108は中央に径20cm前後の円孔を持つことから鞆羽口の装着部分の可能性がある。

182号土坑 (SK1183) (第78図) (年報SK1102)

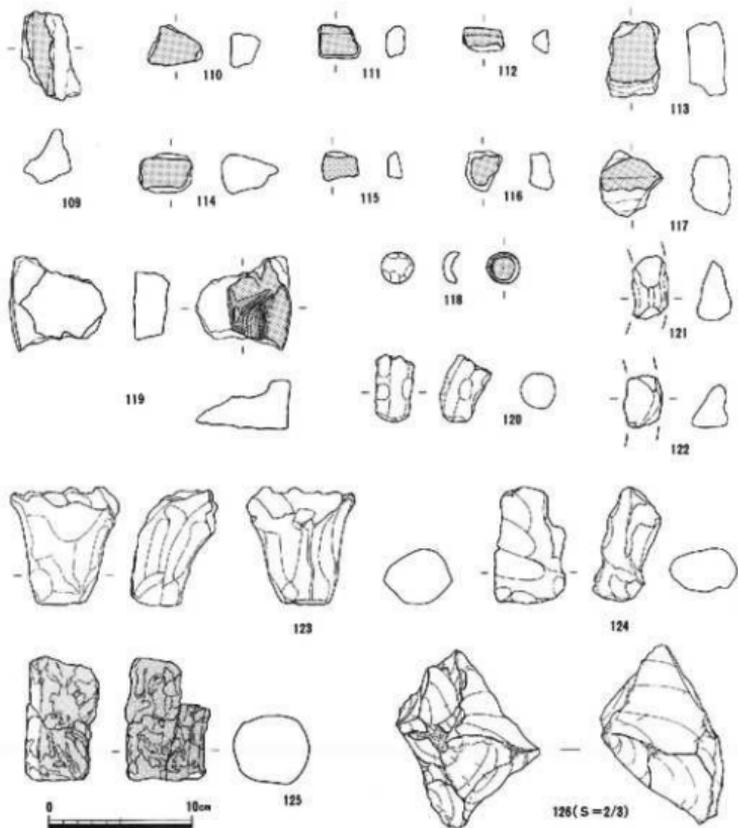
第14調査区、M・N-87で検出した。SA1010の東側に位置し、SK1183を切っている。平面形は不整な円形を呈するが掘り込みはほとんど認められず、長軸0.83m、短軸0.7mの範囲に黄褐色の焼土のみが堆積することから、焼土溜と考えられる。焼土中より鞆羽口2点、鉄滓2点が出土している。

183号土坑 (SK1183) (第78図) (年報SK1103)

第14調査区、M・N-87で検出した。SA1010の東側に位置し、SK1181を切り、SK1182に切られている。平面形は隅丸の楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸0.94m、深さ0.52mを測る。底面は平坦で、壁は南側と北側でほぼ垂直に立ち上がり、東西方向に袋状の広がりを持つ。覆土は3層に分層でき、第2・3層に炭、灰を多量に含む。また最下層の第4層は粘土塊である。第2・3層から主に鑄造関連の遺物が2,200点(38.8kg)出土しており、SK1181と同様鑄造作業に伴う廃棄土坑であったと考えられる。主な鑄造関連遺物の数値は溶解炉壁181点(7.1kg)、クライ133点(2.5kg)、鞆羽口162点(7.0kg)、鉄滓1306点(17.6kg)、鋤型103点(1.43kg)、鑄造関連土製品5点(0.6kg)である。SK1181と同様に地金の溶解に関連した遺物の出土が目立つ。時期はSK1181よりも新しいが、15世紀後半～16世紀におさまるものと考えられる。



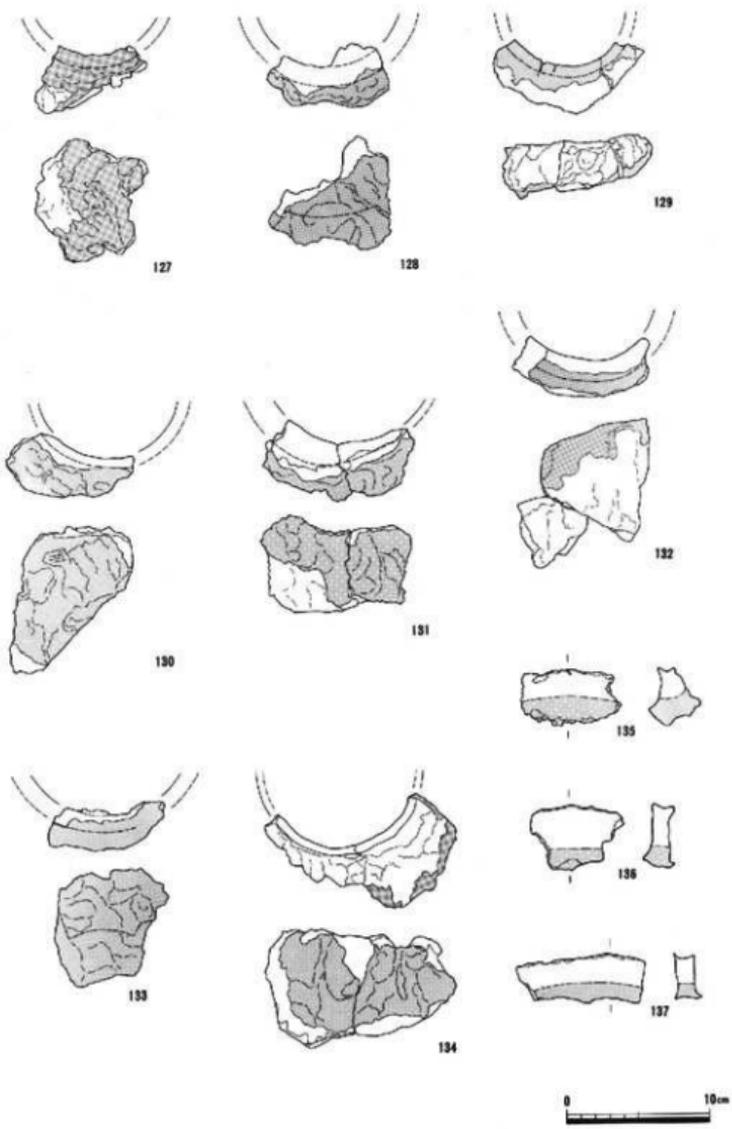
第80図 SK1181出土遺物実測図(2)



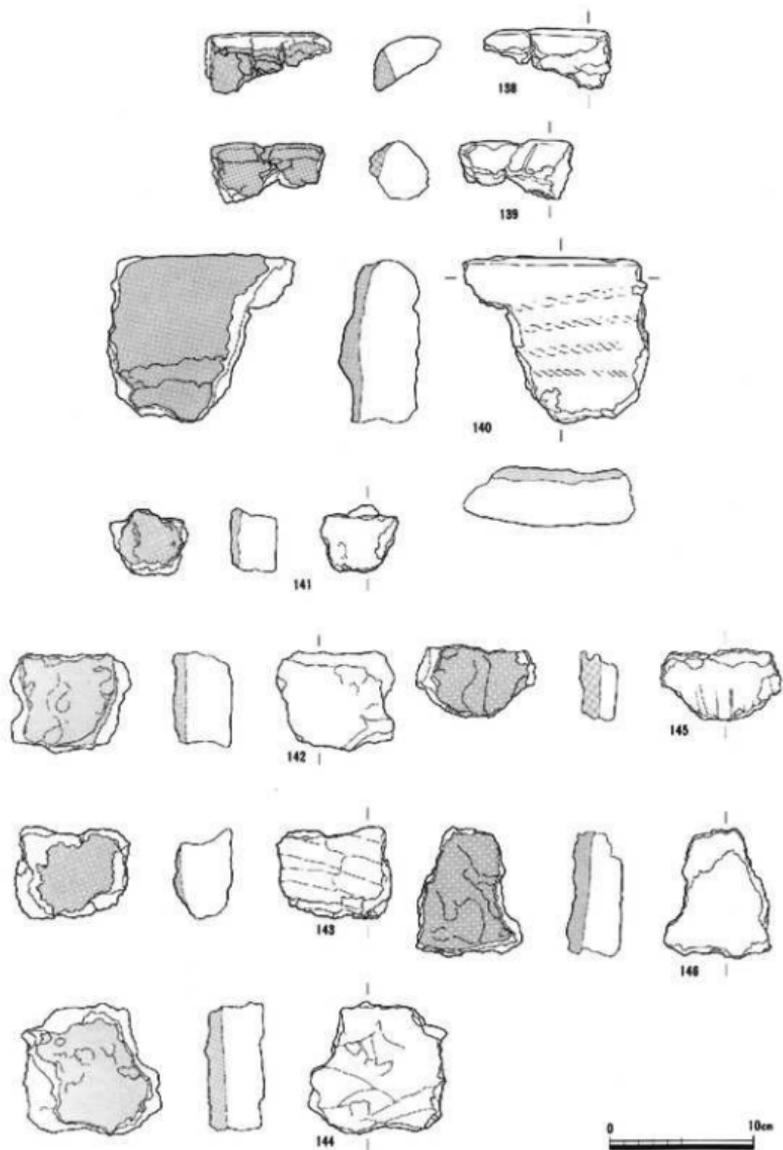
第81図 SK1183出土遺物実測図(1)

出土遺物(第81~83図)

109~119は鋳型である。109は鋳型面に幅広の凹面を持ち一端に接合面を持つ。110・114の鋳型面は平坦、111・112の鋳型面は有段、113・116の鋳型面は裏側に弱いアールを持ち、117は1条の沈線を持つ。いずれも小片のため、製品の判別はできない。118は円形の鋳型である。鋳型面の断面は円錐形を呈する。背面にはユビオサエの痕跡をとどめ、真土砂が付着する。鋳型面はクロミの塗布がみられ、下端部は破損している。梵鐘の乳の鋳型と考えられる。119は抜型を用いた鋳型と考えられ、鋳型面に7~8条の沈線による文様が認められる。



第82図 SK1183出土遺物実測図(2)

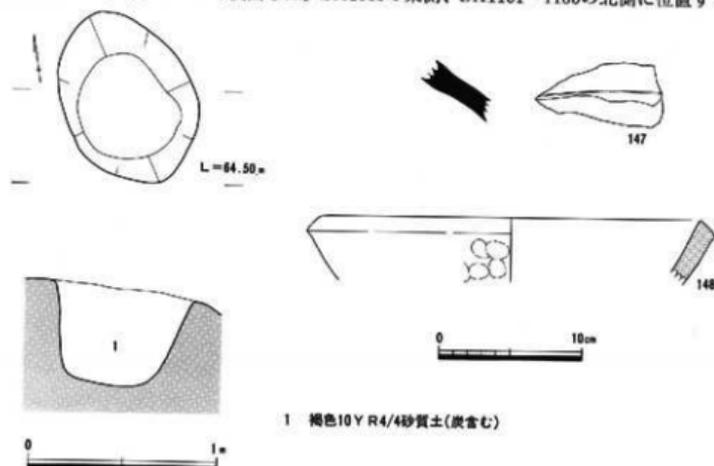


第83图 SK1183出土遺物実測図(3)

沈線部分は型抜き後、更に篋状の工具で修正を加えた痕跡が認められる。クロミは沈線部分にのみ残存している。一端には平坦な接合面をもち、背面には真土が付着している。梵鐘龍頭のたてがみ部分の鑄型と考えられる。120は土製支脚の脚部、121・122は環状の鑄造関連土製品である。123・124も鑄造関連の土製品である。大形の土製支脚の脚部であると考えられるが、123はその形状から土製トリベの把手の可能性も考えられる。125は円柱状の鑄造関連土製品である。上下面に鉄滓が付着しており鑄込み作業の一工程で使用されたものと考えられる。126はチャート製の火打ち石である。暗灰色のチャートをサイコロ状に加工したもので稜線が部分的につぶれて白くなっている。つぶれた部分には酸化した鉄分が付着しており、火打金と対で用いられたものと考えられる。127～134は鞆羽口の破片である。127～129は先端部である。SK1181出土の鞆羽口と同様鉄質の滓が付着し、127・128は先端部より内側の炉体に向かい滓の突出が認められる。130～134は筒部である。これら鞆羽口の内径は8.4～12.3cmに復元でき、平均10.4cmを測る。135～137はクライの破片である。いずれも内側に滓が付着し、外側は上下に粘土が広がった断面T字状を呈する。138～146は溶解炉壁の破片である。138～140は端部の破片であり、断面は138は平坦、139・140はやや丸みを帯びる。140は外面に4条の縄状の圧痕が認められる。141～146は胴部の破片である。143・145は外面に指ナデの痕跡が認められる。

184号土坑 (SK1184) (第84図)

第14調査区東端、N-87で検出した。SA1010の東側、SK1181～1183の北側に位置する。



第84図 SK1184実測図・同出土遺物実測図

平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.68m、深さ0.5mを測る。覆土は褐色砂質土1層であり、炭化物を含む。覆土中より土師質土器、瓦質土器插鉢、備前焼甕、溶解炉壁、鉄滓が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

出土遺物 (第84図)

136は備前焼甕の肩部である。外面に1条の沈線を描す。148は瓦質土器插鉢である。口縁端部を方形におさめ、外面にユビオサエをとどめる。

185号土坑 (SK1185) (第85図)

第14調査区、O-87で検出した。SK1186を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.02m、短軸0.71m、深さ0.22mを測る。底面は凹凸が認められ、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は黄褐色砂質土であるが2層に分層できる。覆土中より遺物の出土はない。

186号土坑 (SK1186) (第85図)

第14調査区東端、O-87で検出した。SK1185に切られており、平面形状は不明である。残存長0.2m、残存幅0.9m、深さ0.2mを測る。覆土は3層に分層でき、第2層に黄褐色の粘土塊が充填されている。覆土中より出土した粘土塊は重さ3.42kgを測る。粘土塊は粒子の細かい精良なもので、SK1109出土の粘土塊に見られたような被熱痕は認められない。

187号土坑 (SK1187) (第86図)

第14調査区中央部、O・P-87で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.01m、短軸0.81

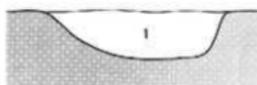
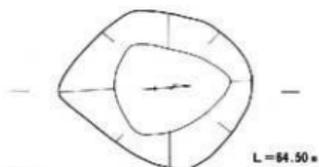


スクリーントーンは粘土塊



- 1 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
- 3 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土
- 4 にぶい黄褐色10Y R7/4粘質土(粘土塊)
- 5 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第85図 SK1185・1186実測図



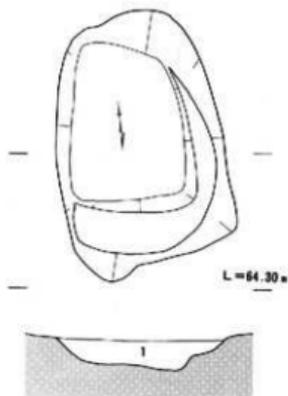
- 1 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土(粘土塊含む)

第86図 SK1187実測図

m、深さ0.24mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、SK1186出土のものと同様の粘土塊が2.5kg出土している。

189号土坑 (SK1189) (第87図)

第14調査区、P-86で検出した。不整な楕円形を呈し、南側から東側にかけてテラス状の段を持つ。長軸1.46m、短軸0.88m、深さ0.12mを測る。覆土はオリブ褐色砂質土1層で、鞆羽口、鋳造関連土製品が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。

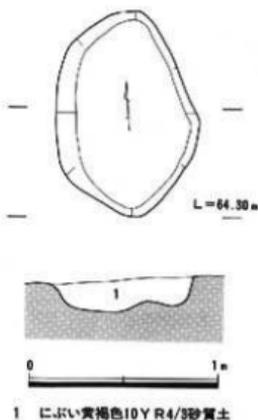


1 オリブ褐色2.5Y4/3砂質土

第87図 SK1189実測図

190号土坑 (SK1190) (第88図)

第14調査区北東隅、R-87で検出した。SA1011の北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.76m、深さ0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土1層で、溶解炉壁、鉄滓、鋳造関連土製品が出土している。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。



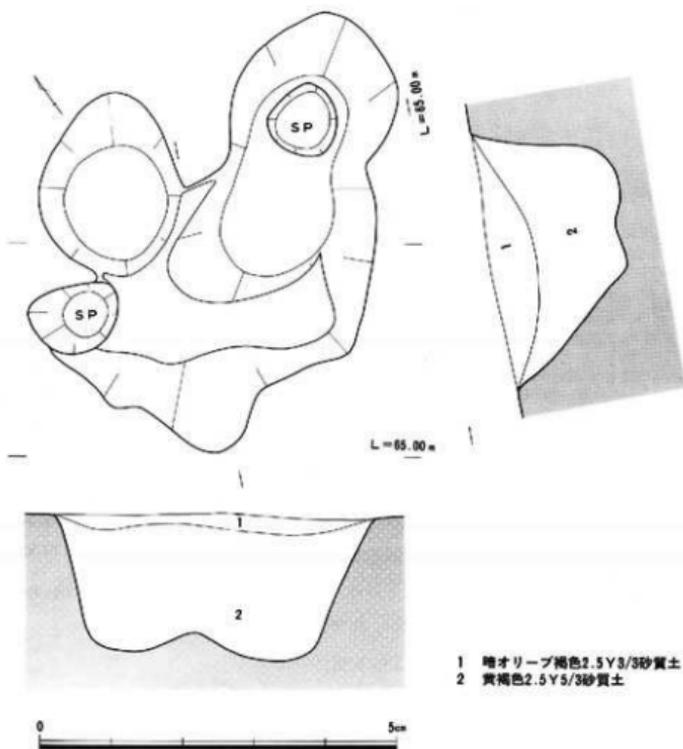
1 にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土

第88図 SK1190実測図

不明遺構

11号不明遺構 (SX1011) (第89図)

第13調査区、M-82・83で検出した。規模は最長部で2.4m、短軸の最長部で1.8m、深さは最深部で0.71mを測る。底面は3ヵ所で特に深い落ち込みが認められ、数基の柱穴・土坑の重複したものと考えられるが、土色による切り合いは確認できなかった。西端の落ち込みはSA1009を構成する柱穴の1基である。覆土は暗オリブ褐色砂質土と黄褐色砂質土の2層に分層でき、土師質土器杯・皿・播鉢・釜、備前焼壺・甕、青磁碗、溶解炉壁、クライ、鞆羽口、鋳造関連土製品、鉄製品等が多数出土している。時

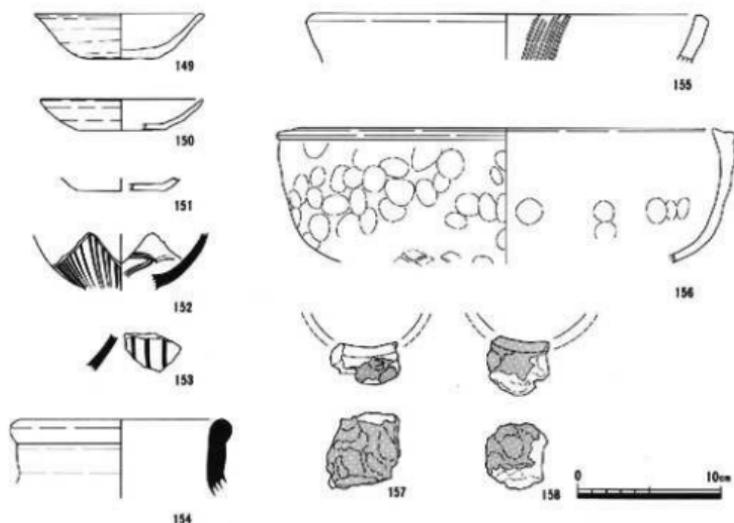


第89図 SX1011実測図

期は15～16世紀と考えられる。

出土遺物（第90図）

149は土師質土器杯である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。150は土師質土器皿である。内外面をヨコナデし、底部は静止糸切りである。151は土師質土器皿の底部である。内外面をヨコナデし底部は静止糸切りである。152・153は青磁碗である。152は体部が球形を呈し、外面に線描蓮弁文、内面に草花文を施す。上田分類の龍泉窯系青磁碗B-IV類に相当し、15～16世紀に位置づけられる。153は体部外面に間隔の狭い蓮弁文を施す。上田分類の龍泉窯系青磁碗B-III類に相当し、15世紀代に位置づけられる。154は備前焼壺の口縁部である。短い直立した頸部をもち口縁端部を玉縁に仕上げる。間壁編年のIV期に相当し、15世紀代に位置づけられる。155は土師質土器播鉢である。口縁端部を丸くおさ



第90図 SX1011出土遺物実測図

め、内面に8条1単位の帯描条線を施し、すり目とする。156は土師質土器釜である。口縁部外面に退化した鈎をもち、底部に格子タタキを施す。157・158は鞆羽口の先端部の破片である。内径の復元値はそれぞれ8.5cm・9.2cmを測る。

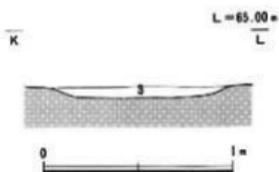
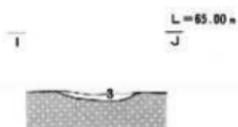
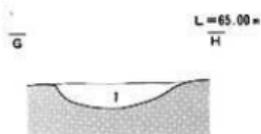
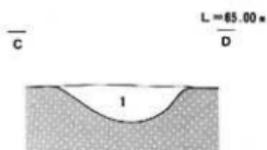
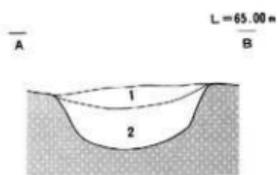
溝

1号溝 (SD1001) (第91図・付図4)

第13調査区中央部を東西方向に延びる溝でN-80~84にかけて検出した。調査区を南北に二分し、南側にSA1007~1009をはじめとする建物跡、土坑群が検出されており、建物に伴う小規模な区画溝と考えられる。西側の一部が削平により途切れるが、長さはおよそ20mに及ぶものと考えられる。幅0.4~0.8m、深さ0.1~0.35mを測り、断面はU字状を呈する。覆土は地点により異なるが、概ね黄灰色砂質土、オリーブ褐色砂質土、黄褐色砂質土の3層に分層できる。覆土中より土師質土器、鞆羽口、溶解炉壁が出土している。出土物よりこの溝は15~16世紀にかけて機能したものと考えられる。

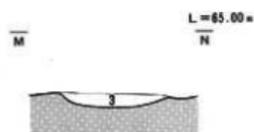
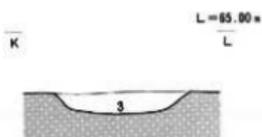
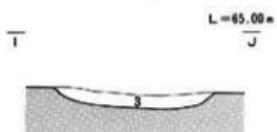
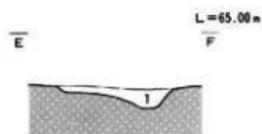
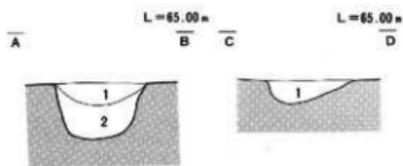
2号溝 (SD1002) (第92図・付図4)

第13調査区中央部、SD1001の南側をほぼ平行するかたちで東西方向に延びる溝で、M・



- 1 黄灰色2.5Y5/1砂質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3砂質土

第91図 SD1001実測図



- 1 黄灰色2.5Y5/1砂質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3砂質土

第92図 SD1002実測図

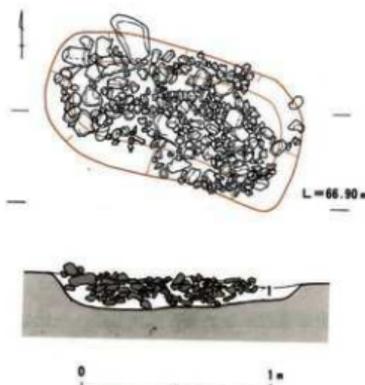
N-81~84にかけて検出した。北側のSD1001との間隔は1.0~1.7mを測る。2ヵ所で削平により途切れるが、長さはおよそ15mに及ぶものと考えられる。幅0.4~1.45m、深さ0.11~0.31mを測り、断面は浅いU字状を呈する部分が多い。覆土は地点により異なるが、概ね黄灰色砂質土、オリープ褐色砂質土、黄褐色砂質土の3層に分層できる。覆土中より土師質土器の小片、鞆羽口、溶解炉壁、鉄滓が出土している。出土遺物や覆土の堆積状況からしてSD1001と同時期に利用されていたと考えられる。

3号溝 (SD1003) (付図4)

第14調査区西南隅M-85で検出した。南北に延びる短い溝で南側を近所の井戸SE1002に切られる。長さ1.4m、幅0.58m、深さ0.4mを測る。覆土は黄灰色砂質土1層で土師質土器の小片が出土している。SD1001・1002と直交するかたちであり、同時期の区画溝の一部と考えられる。

中世墓 (第93~108図・付図1)

ここでは第6調査区で検出された16基の中世墓について述べる。中世墓のほとんどは浅い土壌上に砂岩礫を円形あるいは方形に集積するもので、形態上は集石墓と呼ぶべきものである。集石下部には小土壇を有するものも認められたが内部より蔵骨器と考えられる遺物の出土はみられなかった。これら中世墓はその諸特徴より葬法に火葬を採用した火葬墓であったと考えられる。出土遺物の見られたものは僅少であったが、時期的には15~16世紀の造墓年代が考えられる。調査区横には凝灰岩製、砂岩製の組み合わせ式五輪塔が集積されており、第6調査区を畑として開墾した際に出土したとのことである。元來は集石上に立塔されていたものと考えられる。これら五輪塔はその材質と形態から室町時代の所産であると考えられる。以下に個々の墓について述べる。

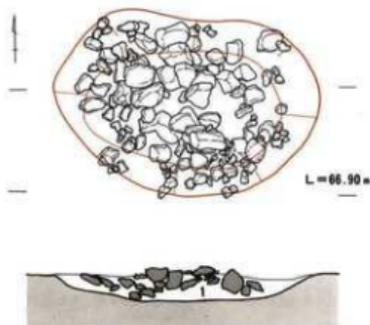


1号中世墓 (ST1001) (第93図)

I-41で検出した。第6調査区で検出された中世墓のうち最も南に位置する。5~30cm

1 1 における黄褐色10Y R5/4粘質土(炭化物含む)

第93図 ST1001実測図



1 にぶい黄褐色10Y R5/4粘質土(炭化物含む)

第94図 ST1002実測図

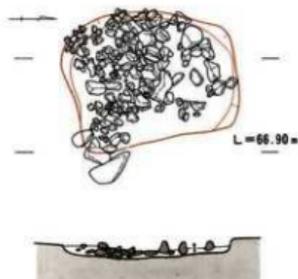
前後の自然礫を1.4×0.7mの範囲に楕円形に集石する。下部には石組の範囲に沿うかたちで、長軸1.37m、短軸0.68m、深さ0.33mの平面形隅丸長方形の土壌を検出した。長軸はN-73°-Wに向く。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石、土壌覆土中より遺物の出土はない。

2号中世墓 (ST1002) (第94図)

J-41で検出した。ST1001の北側5mほどに位置する。5~20cm前後の自然礫を径0.8mほどの円形に集石する。下部には長軸1.29m、短軸0.9m、深さ0.3mの平面形楕円形の土壌を検出した。長軸はN-62°-Wに向く。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石、土壌覆土中より遺物の出土はない。

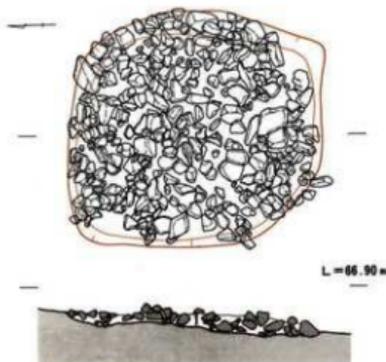
3号中世墓 (ST1003) (第95図)

J・K-41で検出した。ST1002の北西部4mほどに位置する。西側には近接してST1004



1 にぶい黄褐色10Y R5/4粘質土(炭化物含む)

第95図 ST1003実測図



1 にぶい黄褐色10Y R5/4粘質土(炭化物含む)

第96図 ST1004実測図

が位置する。5~15cm前後の自然礫を0.6×0.5 mの範囲に方形に集石する。下部には長軸0.84 m、短軸0.75m、深さ0.1mの平面形方形の土塊を検出した。長軸はN-10°-Wに向く。覆土にはぶい黄褐色砂質土1層で炭化物を含む。集石、土塊覆土中より遺物の出土はない。

4号中世墓 (ST1004) (第96図)

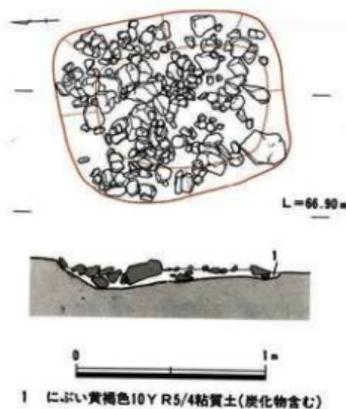
J・K-41で検出した。ST1003の西側に近接する。15cm前後の自然礫を1.3×1.2mの範囲に方形に集石する。下部には長軸1.31m、短軸1.2m、深さ0.2mの平面形方形の土塊を検出した。長軸はN-5°-Wに向く。覆土にはぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石、土塊覆土中より遺物の出土はない。

5号中世墓 (ST1005) (第97図)

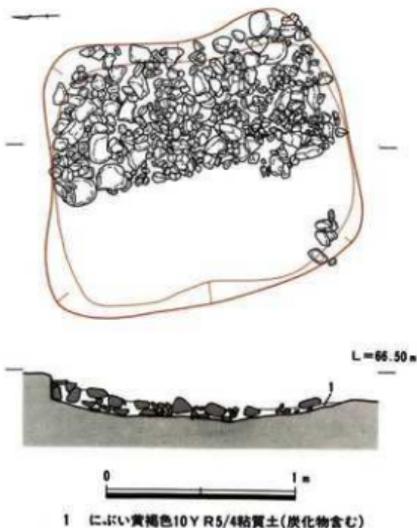
K-41で検出した。ST1002の北側4.5mに位置し、ST1007の南側に近接する。1.05×0.9mの範囲に方形に集石する。下部には長軸1.2m、短軸0.97m、深さ0.26mの平面形方形の土塊を検出した。東側がやや深く、長軸はN-87°-Wに向く。覆土にはぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。土塊覆土中より土師質土器が出土している。

6号中世墓 (ST1006) (第98図)

K-40・41で検出した。ST1005の西側3mに位置し、ST1010の南側に近接する。集石は5~20cm

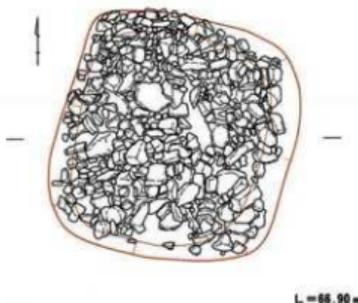


第97図 ST1005実測図



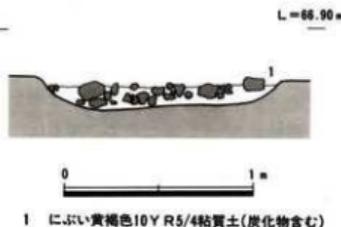
第98図 ST1006実測図

の自然礫を用いたもので、西半分が削平を受け、
 1.5×0.66mの範囲に残存している。下部には
 長軸1.69m、短軸1.36m、深さ0.2mの平面形
 方形の土壌を検出した。集石も元はこの土壌の
 かたちに沿い、方形を呈していたと考えられる。
 土壌の長軸はN-10°-Wに向く。覆土はにぶい
 黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石、土壌
 覆土中より遺物の出土はない。



7号中世墓 (ST1007) (第99図)

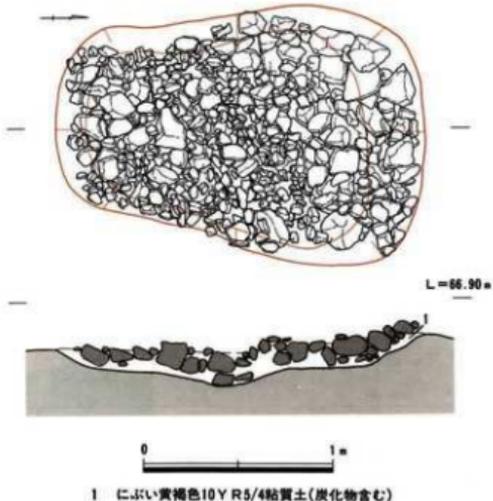
K-41で検出した。ST1005の北側に近接し
 西縁をST1008に接する。5~30cmの自然礫を
 1.2×1.14mの範囲に方形に集石する。集石中
 には石英質の白色円礫を含む。下部には長軸
 1.3m、短軸1.2m、深さ0.26mの平面形方形の
 土壌を検出した。長軸はN-9°-Eに向く。覆
 土はにぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。
 集石、土壌覆土中より遺物の
 出土はない。



第99図 ST1007実測図

8号中世墓 (ST1008) (第100図)

K・L-41で検出した。ST
 1007と ST1009の間に位置
 し、東縁の一部をST1007、
 西縁の一部をST1009にそれ
 ぞれ接する。集石は5~30cm
 の自然礫、5cmの石英質の白
 色円礫を1.83×1.23mの範囲
 に長方形に配したものであ
 る。北縁部から西縁部は遺存
 状態が良好で、30cmの礫を直
 線的に配し、基壇状を呈する。

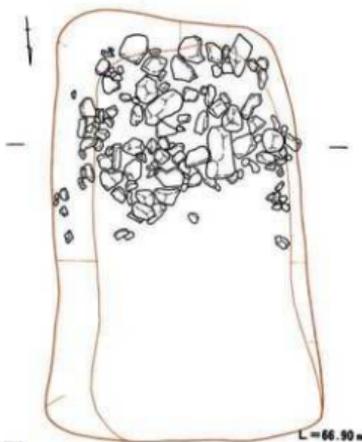


第100図 ST1008実測図

また白色礫は集石上を被覆するかたちで配される。下部には長軸1.92m、短軸1.18m、深さ0.45mの平面形楕円形の土壌を検出した。土壌底面中央部には浅い落ち込みが認められる。長軸はN-5°-Eに向く。覆土にはにぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石、土壌覆土中より土師質土器、鉄滓、瓦の小片が出土している。

9号中世墓 (ST1009) (第101図)

K・L-41で検出した。ST1010とST1008の間に位置し、東縁の一部をST1008に接する。集石は5~30cmの自然礫を用いたもので北側半分程が削平を受け1.1×1.0mの範囲に残存している。下部には長軸2.24m、短軸1.19m、深さ0.22mの平面形長方形の土壌を検出した。長軸はN-2°-Wに向く。覆土はにぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石中より備前焼の小片が出土している。



1 にぶい黄褐色10YR5/4粘質土(炭化物含む)

第101図 ST1009実測図

10号中世墓 (ST1010) (第102図)

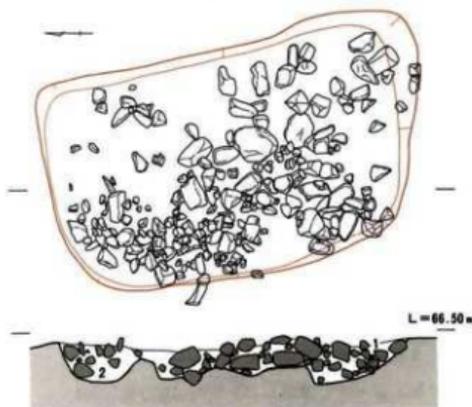
K・L-40で検出した。ST1006の北側、ST1009の西側に近接する。5~20cmの自然礫を1.74×1.08mの範囲に長方形に集石する。下部には長軸1.99m、短軸1.22mの平面形長方形の土壌を検出した。底面西側には1段低い掘り込みが認められ、この部分での深さは0.4mを測る。土壌の長軸はN-6°-Wに向く。覆土は明黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土の2層に分層でき、西側の掘り込み部分に炭化物を含む。土壌覆土中より土師質土器皿の底部が出土している。

出土遺物 (第103図)

159は土師質土器皿の底部である。内外面をヨコナデシ、底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。

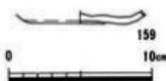
11号中世墓 (ST1011) (第104図)

L-41で検出した。ST1008とST1013の間に位置する。5~20cmの自然礫を1.32×0.96mの範囲に長方形に集石する。下部には長軸1.38m、短軸1.15mの平面形長方形の土壌を検出した。底面は南側にテラス状の高まりが認められ低い部分で深さ0.36mを測る。土壌の長軸はN-2°-Eに向く。覆土は灰黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。土壌覆土中より土師質土器の小片が出土している。



- 1 明黄褐色10Y R7/6粘質土
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘質土(炭化物含む)

第102図 ST1010実測図

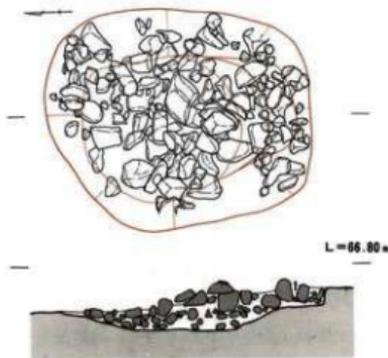


第103図 ST1010出土遺物実測図

12号中世墓 (ST1012)

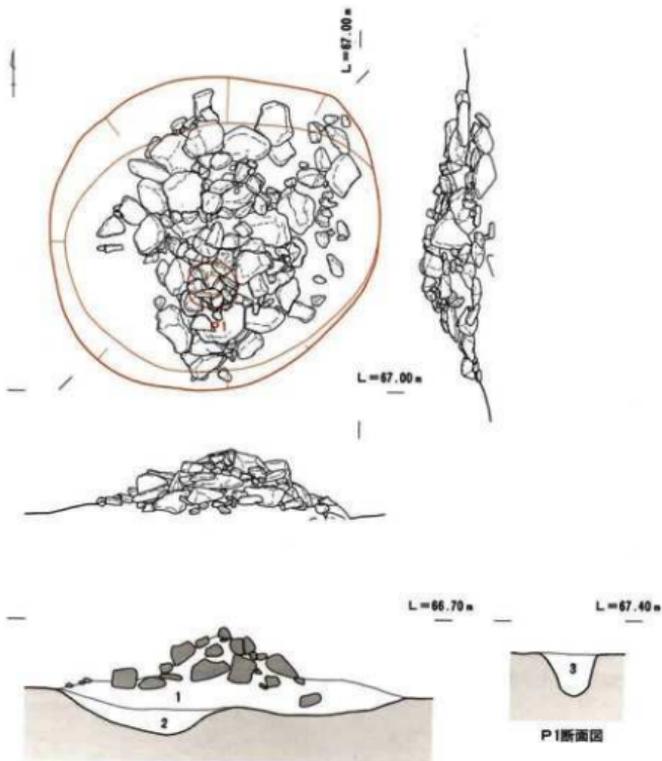
(第105図)

L-40で検出した。ST1010の北西側1m程に位置する。他の墓に比べ外部表象の遺存が良好である。10~30cmの自然礫を盛り土とともに1.5×1.2mの範囲に不整形な方形に積み上げ、外部表象とする。これら礫中には石英質の白色円礫が多用されており、元々の形態は方形の基壇状を呈したものと考えられる。下部には長軸1.75m、短軸1.63mの平面形不整形の土壌が確認された。底面は2段に掘り込まれており、西側が低くなる。深さは深い部分で0.27m、浅い部分で0.15mほどである。覆土は盛り土部分の灰黄褐色砂質土と土壌部分のにぶい黄褐色砂質土の2層に分層でき、盛り土中より骨片、



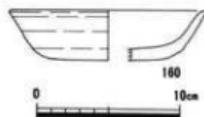
- 1 灰黄褐色10Y R4/2粘質土(炭化物含む)

第104図 ST1011実測図



- 0 1m
- 1 灰黄褐色10Y R5/2砂質土(骨片、炭化物含む)
 - 2 にぶい黄褐色10Y R砂質土
 - 3 にぶい黄褐色10Y R砂質土(炭化物含む)

第105図 ST1012実測図



第106図 ST1012出土遺物実測図

炭化物、土師質土器杯が出土している。また底面中央やや南寄りに直径0.29m、深さ0.27mの小土壇P1が検出された。小土壇内からは少量の炭化物が出土している。

出土遺物 (第106図)

160は土師質土器杯である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。器壁は全体に厚めである。

13号中世墓 (ST1013) (第107図)

L-41で検出した。ST1011とST1015の間に位置し、西端をST1014に切られている。5～20cmの自然礫を2.8×1.35mの範囲に長方形に集石する。北縁部から西縁部にかけては遺存状態が良好で直線的な礫の並びが観察できる。下部には長軸残存長2.85m、短軸1.62m、深さ0.3mの平面形長方形の土壇を検出した。長軸はN 73°-Eに向く。覆土にはぶい黄褐色砂質土1層である。集石中、土壇覆土中より遺物の出土はなかった。

14号中世墓 (ST1014) (第107図)

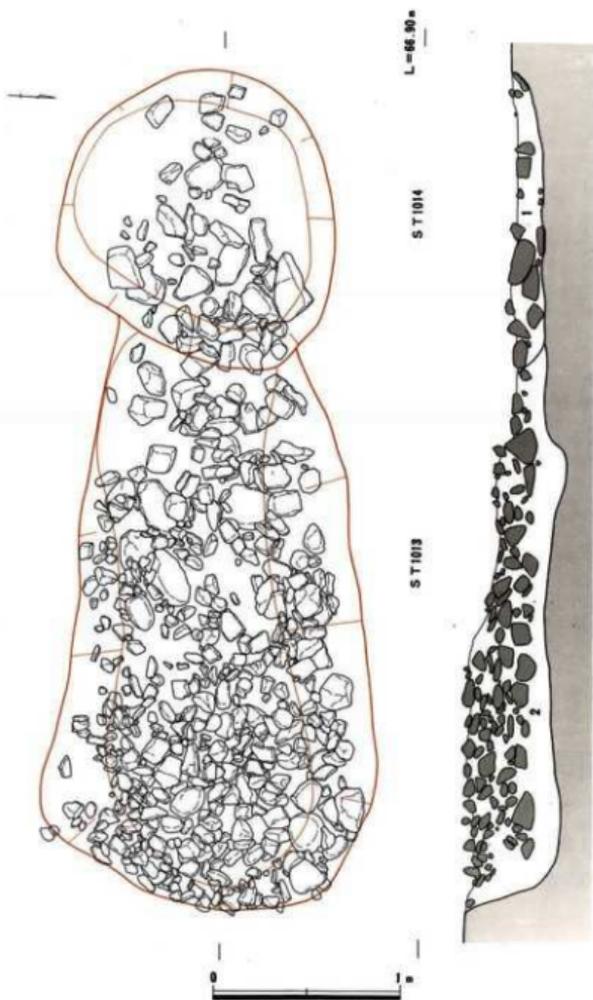
L-41で検出した。東側がST1013を切っている。5～30cmの自然礫を1.5×1.05mの範囲に集石する。下部には直径1.6m、深さ0.34mの平面形不整形円形の上壇を検出した。覆土にはぶい黄褐色砂質土1層で、炭化物を含む。土壇覆土中より骨片、土師質土器の小片が出土している。

15号中世墓 (ST1015) (第108図)

L-41で検出した。ST1013とST1016の間に位置し北側をST1016に切られている。5～20cmの自然礫を0.75×0.5mの範囲に楕円形に集石する。下部には長軸残存長1.2m、短軸0.56m、深さ0.15mの平面形楕円形の上壇を検出した。長軸はN-43° Wに向く。覆土にはぶい黄褐色粘質土1層で炭化物を含む。集石中、土壇覆土中より遺物の出土はない。

16号中世墓 (ST1016) (第108図)

M-41で検出した。ST1015を切っており、本調査区で確認された中世墓の内では最も北側に位置し、最も南側に位置するST1001とは18mほど隔たっている。5～20cmの礫を1.85×0.84mの範囲に長方形に集石する。下部には長軸1.51m、短軸0.84m、深さ0.22mの平面形長方形の土壇を検出した。長軸はN-86°-Eに向く。覆土にはぶい黄褐色粘質土1層である。集石中、土壇覆土中より遺物の出土はない。



- 1 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土
 2 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (1よりやや黒い, 炭化物含む)

第107図 ST1013・1014実測図



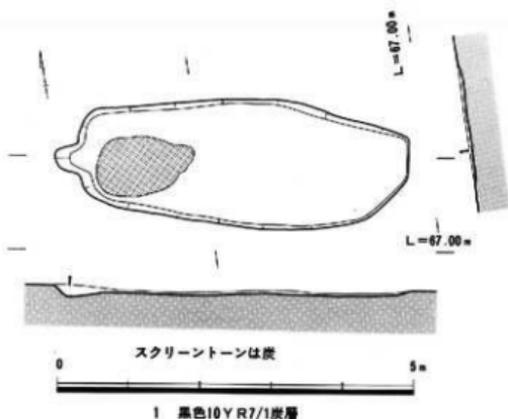
第108図 ST1015・1016実測図

炭窯

ここでは平面形が楕円形を呈し、底面や壁面に燃焼痕跡をとどめ、覆土中に焼土、炭化物を充填した、木炭焼成窯と考えられる土坑について述べる。当遺跡では第4調査区で1基、第7調査区で1基の計2基の炭窯が確認されている。いずれも土器の出土がなく、明確な時期の決定はできないが、類例や周囲の遺構の時期から考えて中世のものである可能性が高い。

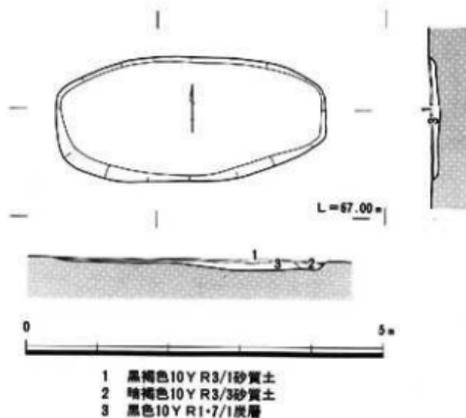
1号炭窯 (SO1001) (第109図)

第4調査区南寄り、C・B-25・26で検出した。平面形は楕円形を呈する土坑で、長軸4.8m、短軸1.84m、深さ0.05~0.16mを測る。東側はやや丸く西側は肩の張るかたちで、中央部が0.3mほど半円形に突出する。底面はほぼ平坦であり、東側の突出部のみが深さ0.3mほどに落ち込む。形態からすると西側の突出部が煙道にあたり、反対側の東端が焚口にあたる



第109図 SO1001実測図

ものと考えられる。覆土は全体に炭化物が充滿しており、特に底面西側に炭の堆積が認められた。覆土中は炭化物以外の出土遺物はない。



第110図 SO1002実測図

2号炭窯 (SO1002) (第110図)

第7調査区西寄り、G・F-43で検出した。第7調査区の掘立柱建物、柱穴群の西側に位置する。平面形は楕円形を呈する土坑で長軸3.77m、短軸1.73m、深さ0.05~0.15mを測る。SO1001に見られたような突出部はない。底面は西から東にかけて深くなる。覆土は3層に

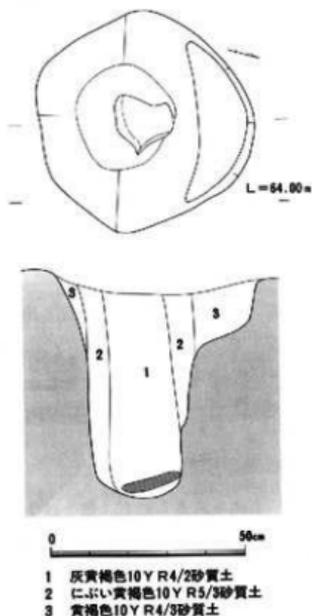
分層でき、下層に炭化物を多く含む。覆土中は炭化物以外の出土遺物はない。

柱穴

ここでは独立柱建物を構成するに至らなかった柱穴のうち、遺物の出土状況が資料化可能なものについて述べる。

SP1868 (第111図)

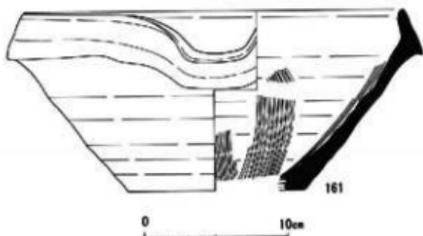
第14調査区、L-85で検出した。平面形不整形の柱穴で、長軸0.38m、短軸0.37m、深さ0.58mを測る。覆土は3層に分層でき中央に柱痕を明瞭にとどめる。柱痕内より備前焼播鉢の破片が出土している。全周の1/4程度の破片であるが、内面を上向きにし、底面に接して置かれていたことから、柱の受けとして用いられたものと考えられる。



第111図 SP1868実測図

出土遺物 (第112図)

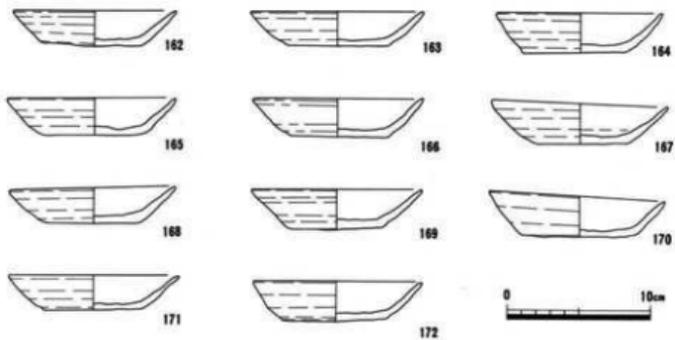
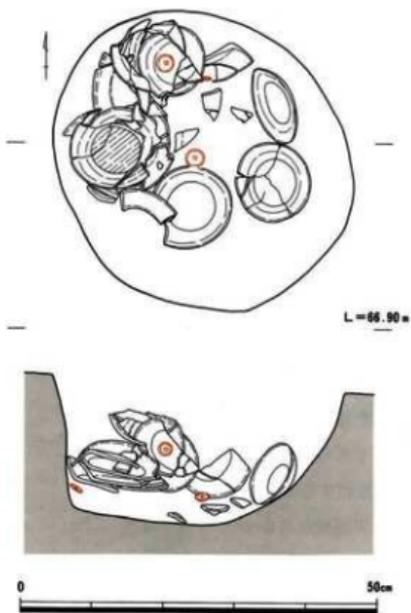
161は備前焼播鉢である。内外面をヨコナデし、内面に10条1単位の櫛描条線を施す。端部を上方に大きく拡張するもので、間壁編年のIV期後半に相当し、15世紀後半に位置づけられる。



第112図 SP1868出土遺物実測図

SP1178 (第113~115図)

第11調査区北東部、J-55で検出した。平面形は円形を呈する柱穴で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。覆土は2層に分層でき、中央に柱痕を明瞭にとどめる。この柱痕をとりまくように覆土中から土師質土器皿が11点出土した。皿は東側では3点が上向きに、西側では4点ずつ重なった状態で8点が出土した。この南側4点の内、一番上の皿は下向きで、下部の皿と合わせ口の状態で呈していた。検出状態ではこれらの皿に伴い銅銭が3枚出土している。この内1枚は皿に乗せられていた。更にこれら皿を取り除くと底面より銅銭12枚と硯が出土し



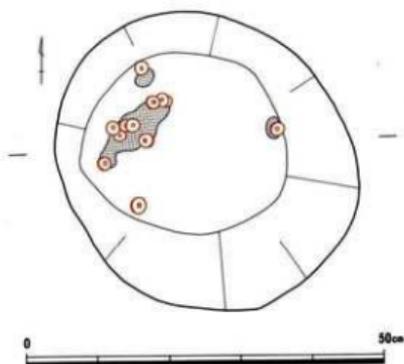
第113图 SP1178遺物出土状況実測図・同出土遺物実測図

た。(第114図) 銅銭は西側に11枚が集中し、東側には1枚のみが出土した。初めの分布も西側への集中が認められた。これら銅銭と初は、当初、皿の下部に散布されたものと考えられたが、その集中状態や上部の皿に銅銭が乗っている点、底面の銅銭には表裏両面に初が付着することなどから、皿の下に散布したものではなく、皿に乗せられていたものが底面に落ち込んだものと判断した。また柱痕が明瞭に残り、土の移動が認められないことから、遺物は掘立柱建物の柱を立てるのに伴い埋納されたものであると考えた。(第115図) これら埋納遺物は建物建築時に執り行われた地鎮めの痕跡であると考えられる⁽³⁾。埋納時期は後述するように、出土した銅銭中に永楽通寶が含まれていたことから、少なくとも15世紀以降と考えられる。

出土遺物 (第113図)

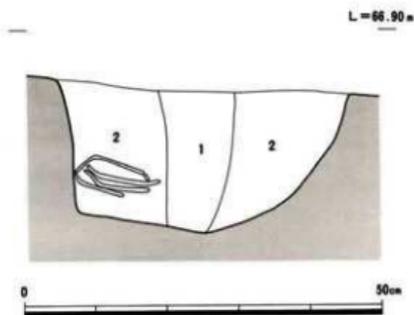
162~172は土師質土器皿である。いずれも口縁端部を尖り気味におさめ、内外面をヨコナデし、見込みに一定方

向のナデを施す。底部は静止糸切りされており、163・164・168・170・171は板状圧痕をとどめる。胎土は精良であり、色調はおおむね橙色である。これらは一括埋納されたものであり、法量、形態、胎土、色調に強い斉一性が認められる。銅銭173~187は表面に初が付着しており、劣化が著しいため拓本がとれず、銭銘も不明であったが、X線撮影をしたところ、この内の1枚が永楽通寶であることが判明した。



スクリーントーンは靉

第114図 SP1178底面銅銭・初出土状況実測図



- 1 灰黄褐色10Y R4/2砂質土
2 にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第115図 SP1178断面図

柱穴内出土遺物 (第116~117図)

ここでは掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴内より出土した遺物で、資料化可能なものについて述べる。

211は第5調査区C-31で検出したSP1319より出土した土師質土器釜の口縁部である。口縁部が内傾し断面三角形の鈎がつく。

200は第7調査区H-45で検出したSP1061より出土した土師質土器杯である。

202は第7調査区G-46で検出したSP1073より出土した土師質土器皿である。内外面をヨコナデし底部は静止糸切りである。

194は第7調査区F-54で検出したSP1100より出土した土師質土器皿である。底部は静止糸切りである。

192は第7調査区F-46で検出したSP1124より出土した土師質土器小皿である。底部は回転糸切りである。

195は第7調査区F-45で検出したSP1126より出土した土師質土器杯である。底部は静止糸切りである。

198・206は第7調査区F-45で検出したSP1128より出土した。198は土師質土器杯である。206は白磁皿である。横田・森田分類⁽⁴⁾白磁皿IX類に相当し、14世紀代に位置づけられる。

188~190・196・197は第7調査区E・F-46で検出したSP1148より出土した。188~190は土師質土器小皿である。いずれも底部は回転ヘラ切りである。196・197は土師質土器杯である。196は底部を回転ヘラ切りする。

225は第7調査区F-43で検出したSP1124より出土した銅銭「皇宋通寶」である。

191・203は第11調査区G-53で検出したSP1244より出土した。191は土師質土器小皿である。内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切りである。203は瓦質土器碗である。底部に断面三角形の高台を貼り付ける。内面には見込みから上方に向かい刷毛目状のイタナデを施す。香川県西村遺跡出土の瓦質土器碗⁽⁵⁾に近似する。

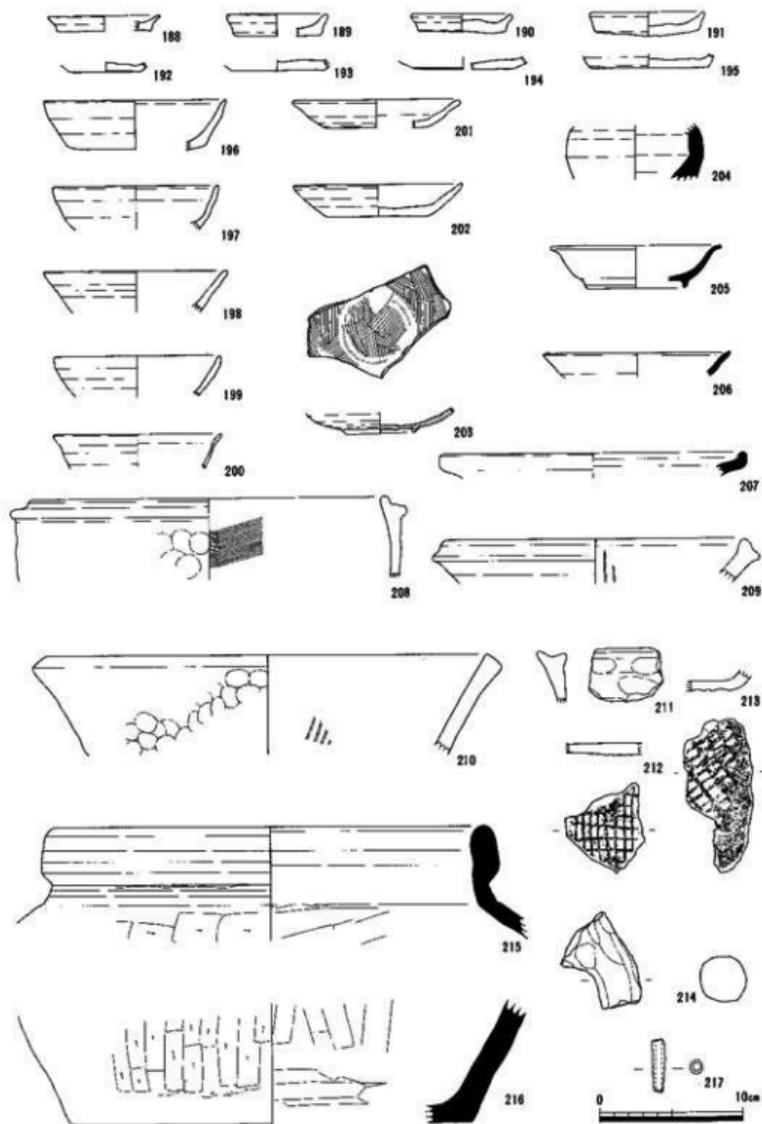
226は第11調査区G-55で検出したSP1263より出土した銅銭「洪武通寶」である。

208は第11調査区G-53・54で検出したSP1297より出土した土師質土器釜である。口縁部に断面台形状の短い鈎がつく。

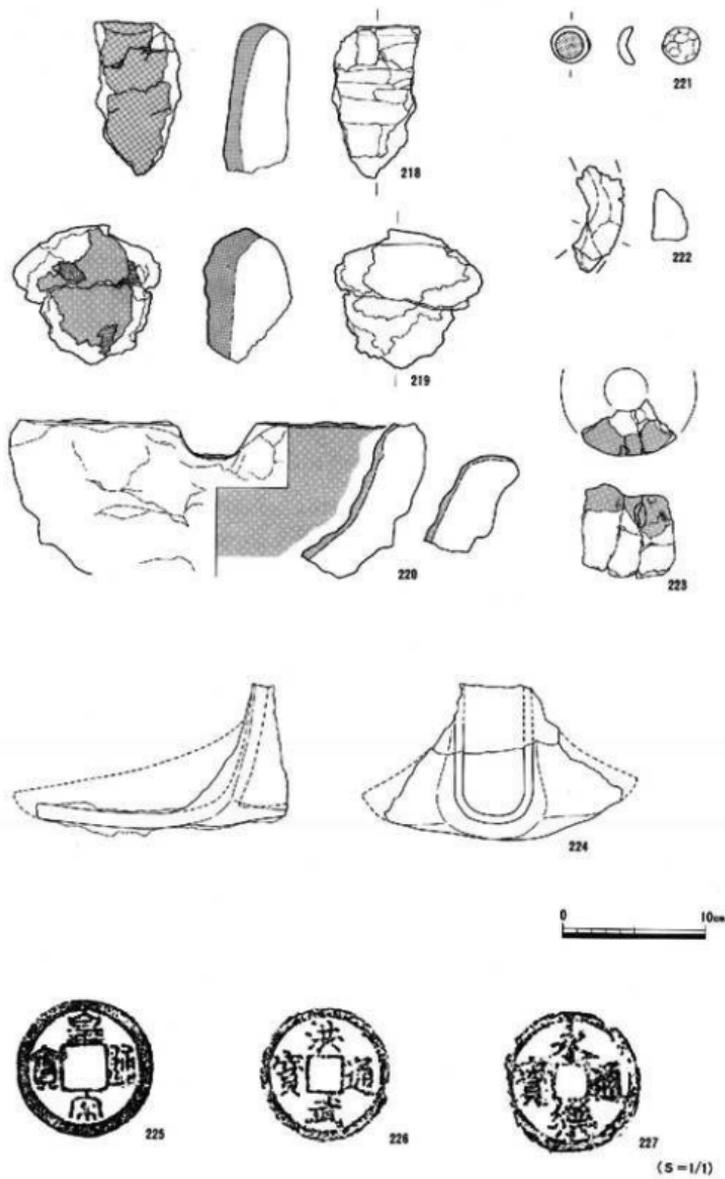
214は第11調査区G-50で検出したSP1274より出土した土師質土器煮沸具の脚部である。

207・212・224は第13調査区M-80で検出したSP1717(年報SK1038)より出土した。207は龍泉窯系の青磁盤の口縁部である。212は土師質土器煮沸具の底部である。平底で外面に格子タタキを施す。224は鉄鈹である。錆による劣化が著しく元の形状は確認できないが浅めの器部に袋状の軸受け部を持つ。

227は第13調査区L-80で検出したSP1724より出土した銅銭「永樂通寶」である。



第116图 柱穴出土物实测图(1)



第117圖 柱穴出土遺物實測圖(2)

218は第13調査区L-81・82で検出したSP1737より出土した溶解炉壁の端部である。外面に板ナデで施す。

222は第13調査区K-80で検出したSP1753より出土した環状の土製品である。断面三角形を呈し上端及び内側面は被熱変色する。

221は第13調査区K-80で検出したSP1756より出土した鋳型である。断面円錐形で背面にユビオサエをとどめ内側にクロミを塗布する。梵鐘乳頂部の鋳型と考えられる。

215・216・220は第13調査区M-83で検出したSP1761より出土した。215・216は同一個体と考えられる備前焼甕の口縁部と底部である。215は口縁端部の玉縁を幅広く作る。間壁編年のIV期に相当し、15世紀代に位置づけられる。220は増場である。内側に滓が付着し、部分的に緑青が付着している。口縁の一部を半円形に削り片口とする。

193は第13調査区L-83で検出したSP1764より出土した土師質土器小皿の底部である。底部は回転糸切りである。

223は第13調査区N-84で検出したSP1767より出土した輪羽口の先端部である。黒色に溶融した滓が付着し、内径3.0cm、外径9.5cmを測る。

204は第13調査区L-82で検出したSP1791より出土した備前焼の壺である。2ヶ所で屈曲する。体部外面に櫛描条線は認められないが間壁編年のIV期に出現する小形の壺に相当すると思われる。

210は第13調査区L-82で検出したSP1793より出土した土師質土器鉢である。口縁端部を若干肥厚し、方形におさめる。内面に4条1単位の櫛描条線を施す。

199は第13調査区L-80で検出したSP1803より出土した土師質土器杯である。

217は第13調査区M-80で検出したSP1810より出土した土師質の管状土唾である。

209は第13調査区L・M-81・82で検出したSP1817より出土した土師質土器鉢である。口縁端部は肥厚し、ヨコナデにより凹線状を呈する。内側に2条の櫛描条線が認められる。

219は第13調査区K・L-80・81で検出したSP1819より出土した溶解炉壁の端部である。外面に真土の付着が認められる。

201・213は第13調査区M-83で検出したSP1837より出土した。201は土師質土器皿である。内外面をヨコナデし底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。213は土師質土器煮沸具の底部である。平底で外面に格子タタキを施す。

205は第13調査区L-81で検出したSP1846より出土した白磁端反り皿である。口縁部を外反し畳付け端部を尖り気味にする。森田分類⁽⁹⁾の白磁E群に相当し、16世紀頃に位置づけられる。

(4) 包含層出土遺物 (第118~136図)

石器 (第118~121図)

228はサヌカイト製の翼状剥片である。背面はネガティブ、腹面はポジティブな1枚の剥離面により構成される。打面部側縁に若干の剥離が加えられている。R.F.あるいはナイフ形石器と振えることも可能であるが、定形的な石器とはみなしがたいため、ここでは翼状剥片とした。229~232はサヌカイト製の横長剥片である。いずれも背面はネガティブ、腹面はポジティブな剥離面により構成されているが形態的、技術的に斉一性に欠け、瀬戸内系とみなしえる横長剥片石核から剥離されたものとは考えられない。233・234はサヌカイト製の石核である。233は厚手の剥片を素材として打面調整後、裏裏両面を打面と作業面とし不定形剥片を剥離する。234は厚手の板状剥片を素材として打面調整後1枚の翼状剥片を剥離する。

235~246はサヌカイト製の石鏃である。235は大形の平基式である。先端部が欠損しているが鏃身は柳葉形を呈すると考えられる。236は先端部、基端部を欠損しているが凹基式と考えられる。237・238は鏃身が三角形を呈する平基式である。242~246は凹基式である。246は長さ3cmを越えると考えられる大形品である。

247は先端部を欠損し全体の形状は不明であるが、石槍の基部と考えられる。サヌカイトのやや厚手の剥片を素材とし、側縁に入念な調整を加え、基部を丸く作り出す。片面に主要剥離面をとどめる。

248はサヌカイト製のスクレイパーである。扁平な剥片を素材とし、側縁に調整を加え刃部を作り出す。一端を欠損する。

249・250はサヌカイト製の楔形石器である。ともに両極打法により作り出された剥片を素材とし、両端を折断して器形を整えている。

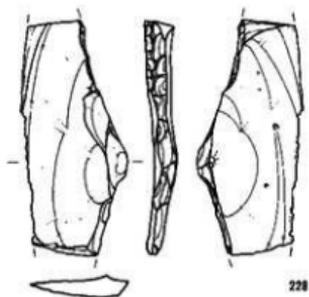
251は結晶片岩製の石砲丁である。扁平な横長剥片を素材とし、長側縁の一方に調整を加え刃部を作り出す。端部に抉りを持たず、一端は破損している。

縄文土器 (第122図)

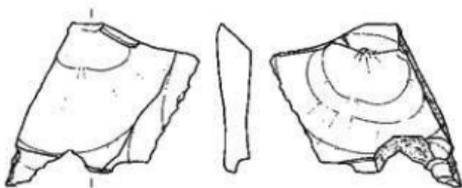
252は深鉢形土器の口縁部である。外面は撚りの粗いLRの原体を縦位に押圧施文した後に口縁部下に2条の爪形文を施す。口縁部内面には同じくLRの原体を縦位に押圧施文して縄文帯とする。瀬戸内地方の船元I式に併行すると考えられ、縄文時代中期に位置づけられる。

弥生土器 (第122図)

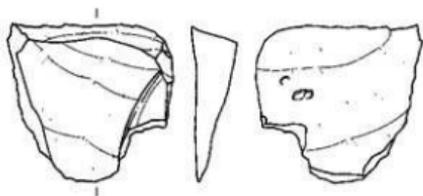
253~260は弥生土器である。253は壺形土器の口縁部、254~260は底部である。いずれも磨滅が著しいが、254・255は内面にヘラケズリ、258・259は外面にヘラミガキを施す。



228



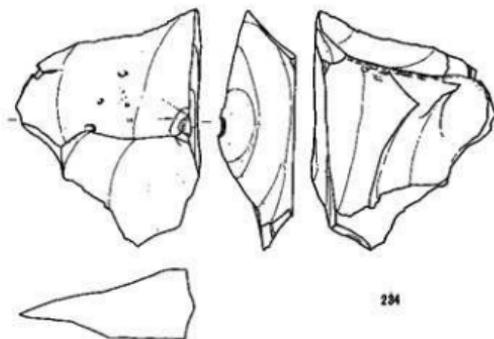
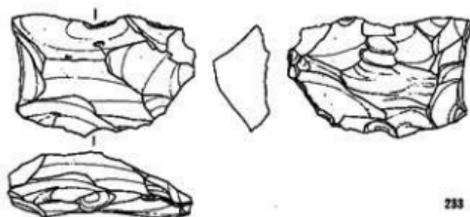
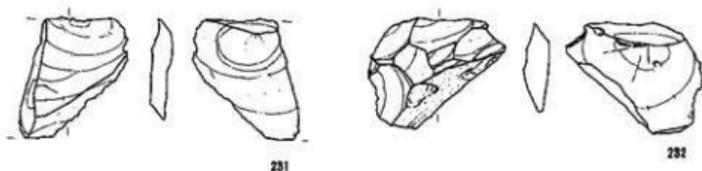
229



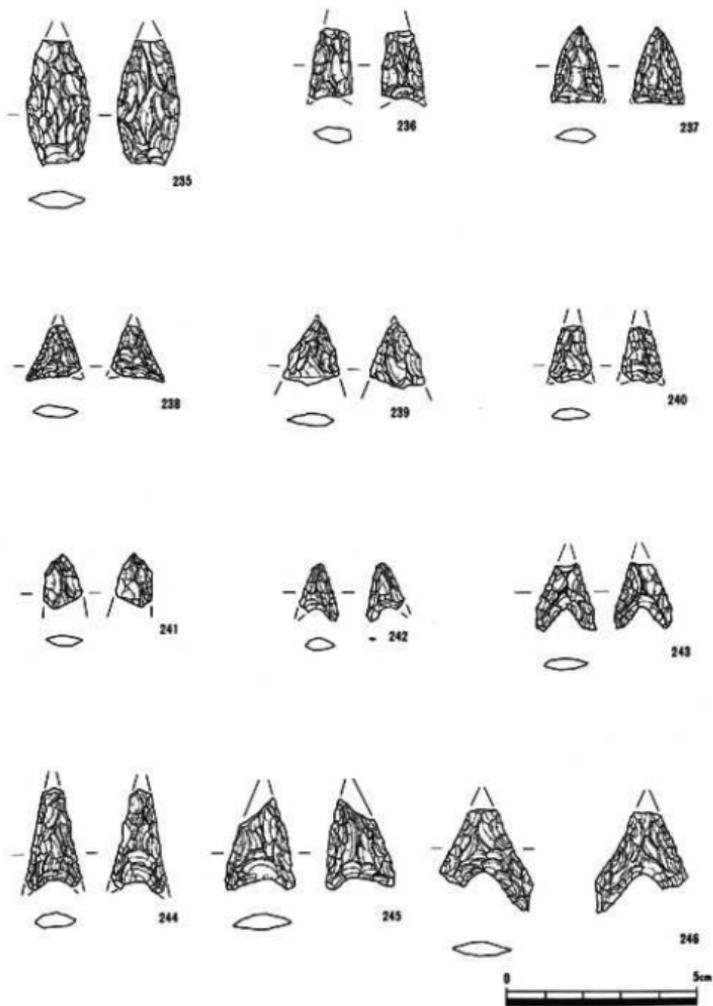
230



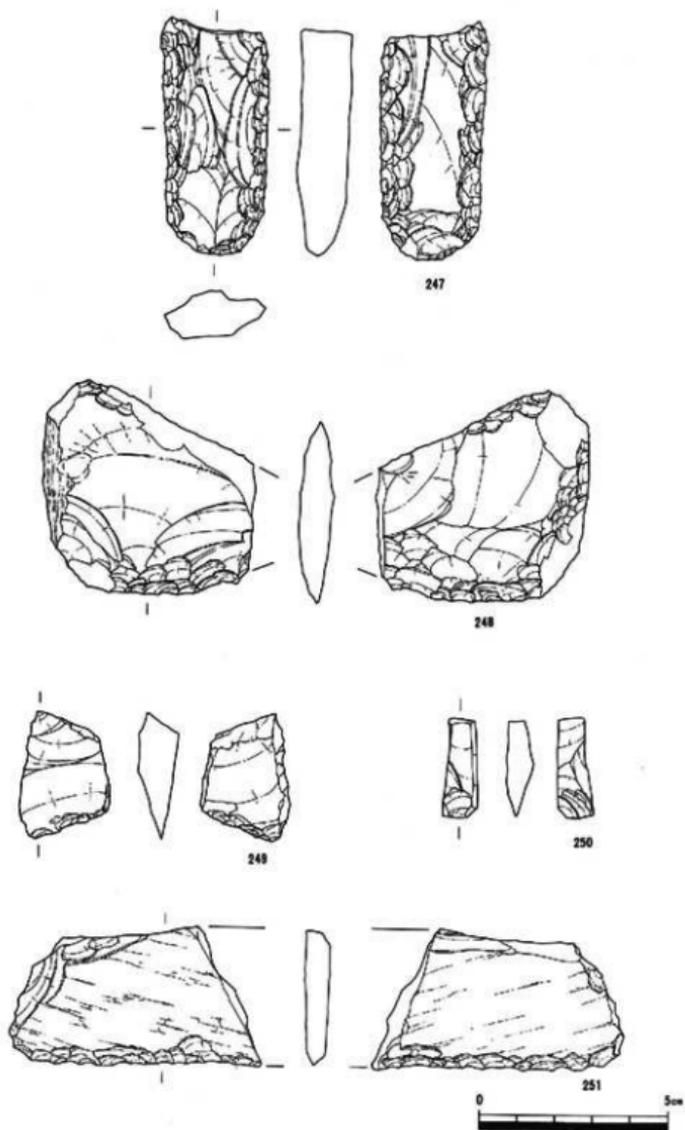
第118图 包含层出土遗物实测图(1)



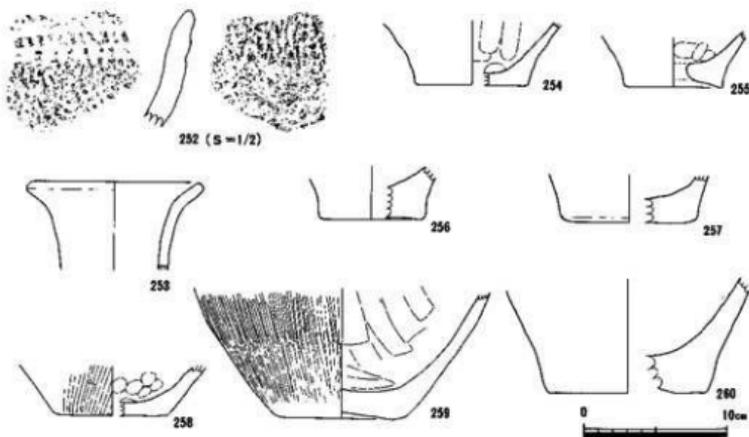
第119图 包含层出土遗物实测图(2)



第120图 包含层出土遗物实例图(3)



第121图 包含層出土遺物実測図(4)



第122図 包含層出土遺物実測図(5)

土師質土器供膳具(第123図)

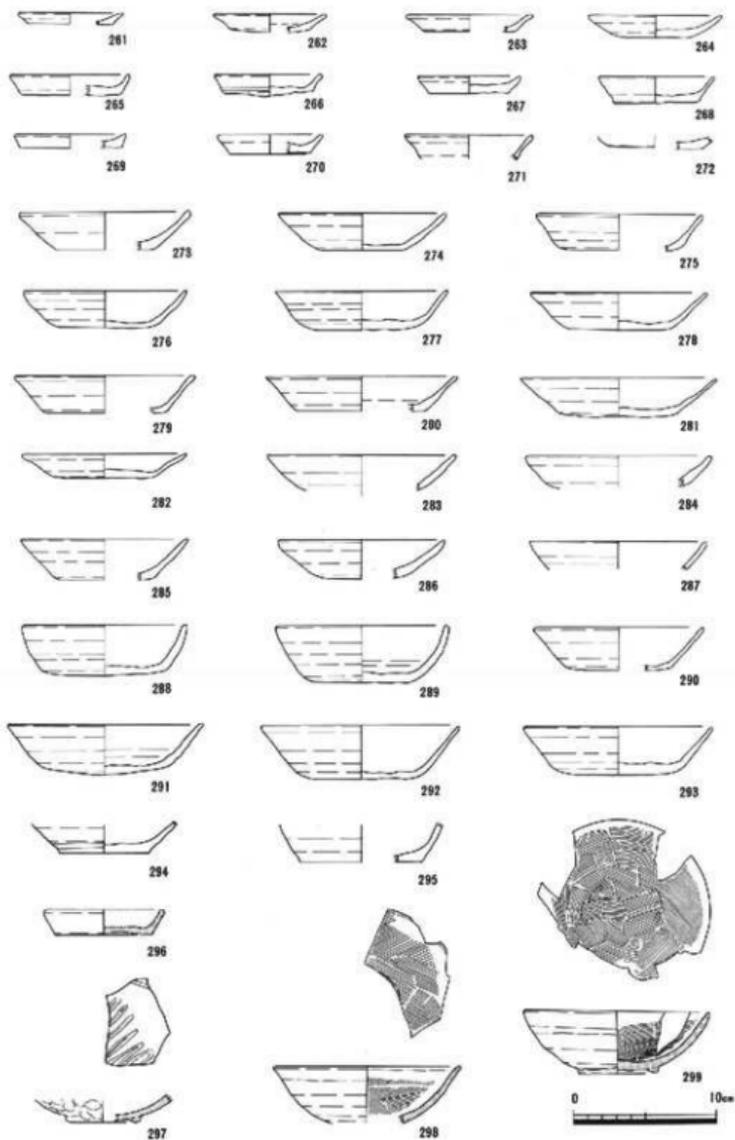
261~272は小皿である。261~270は内外面をヨコナデし、底部を回転ヘラ切りする。262・263は底部をヘラ切りした後にナデを施し、264・268は底部をヘラ切りした後に板状圧痕を施す。口縁部の形態には外反するもの(261~264・266)、内彎するもの(265・267)、直線的なもの(268~270)があり、長めの口縁部を持つものが多い。271は口縁部を若干肥厚するもので、口縁部外面に帯状にすずが付着しており、灯明皿として用いられたものと考えられる。272は底部を静止糸切りする。

273~284は皿である。口径に比して器高が低い。273~281は内外面をヨコナデし、底部を回転ヘラ切りする。273~275・278・281は底部をヘラ切りした後にナデを施す。体部外面のヨコナデは3~4段に及ぶものが多い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反する。282は底部を静止糸切りする皿である。体部中位で外反し口縁部を尖り気味におさめる。

285~293は杯である。口径に比して器高が高い。285~293は内外面をヨコナデし、底部を回転ヘラ切りする。288~290・292・293は底部をヘラ切りした後にナデを施し、291は底部をヘラ切りした後に板状圧痕を施す。体部は288・289を除き、外上方に向かい直線的に開く。288・289は体部が直立気味であり、口縁部が若干内彎する。294は底部を回転ヘラ切りし、側面に2周分のヘラ痕をとどめる。295は底部を静止糸切りする。

瓦器・瓦質土器供膳具(第123図)

296は内外面をヨコナデし、底部を回転糸切りする瓦質焼成の小皿である。13世紀代の



第123圖 包含層出土遺物実測圖(6)

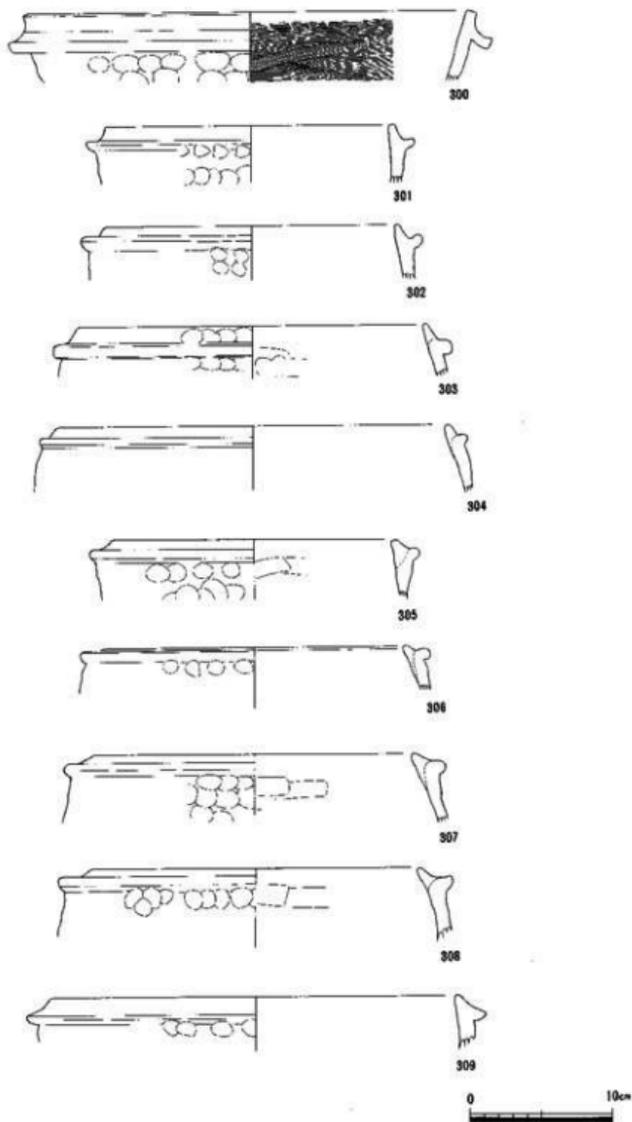
在地産瓦器小皿である。297は瓦器碗の底部である。体部外面にユビオサエをとどめ、見込みには太いヘラミガキをジグザク状に施す。298・299は瓦質焼成の碗である。298は体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面をヨコナデし、見込みから内側面にかけて刷毛目状の板ナデを渦巻状に施す。299は全体の形状のわかる個体である。体部から口縁部にかけて内反気味に立ち上がる。内外面をヨコナデし、見込みから内側面にかけて刷毛目状の板ナデを渦巻状に施す。底部は回転ヘラ切りした後に断面半円形の高台を貼り付ける。口縁部外面には幅2～3cmの黒色帯が認められ、見込みには高台の痕跡が輪状に残る。いずれも重ね焼きによる痕跡であると考えられる。香川県西村遺跡出土の瓦質土器碗に近似する。

土師質土器煮沸具（第124～127図）

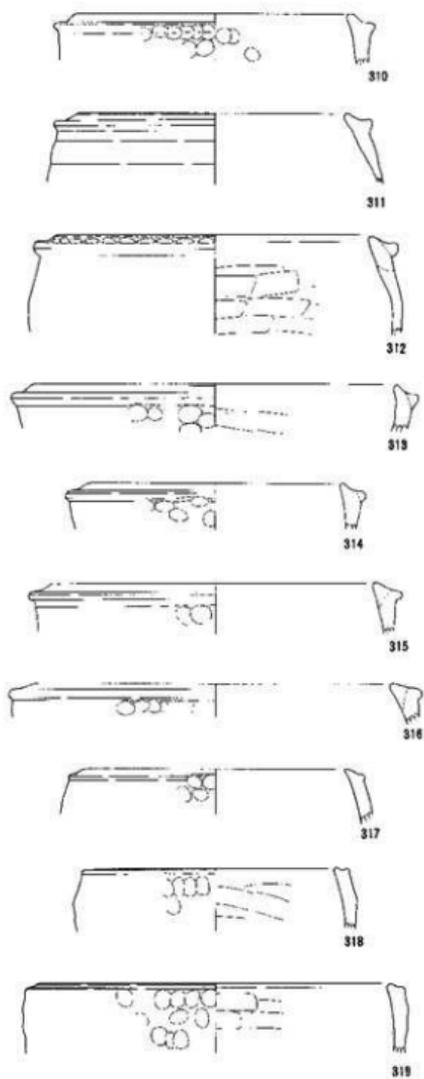
300～319は釜である。口縁部外面に鈎を持ち、断面方形のしっかりとした鈎をもつものから、口縁部の上端近くに痕跡程度に形骸化した鈎をもつものまでを含めて釜とした。300は口縁部が外上方に直線的に開くもので、断面方形のしっかりした鈎がやや下向きにつく。体部外面はユビオサエをとどめ、内面にはヨコハケを密に施す。301～316は口縁部の内傾するもので、長めの鈎が口縁部下寄りにつくもの（301～304）と短めの鈎が口縁部下直下につくもの（305～316）に大きく分けられる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面にはイタナデ、あるいはナデを施す。全体の形態のわかるものがないため底部の調整は不明であるが、別に出土した底部の破片からすると、外面には格子タタキを施したものと考えられる。鈎は概して短いものが多く、成形法としては粘土紐を貼り付けて鈎とするものその他、303～308・315・316のように体部上端を外側へ折り曲げて鈎とし、その上に粘土紐を貼り付けて口縁部とするものが断面の観察により確認できる。317～319は鈎といえるほどの突出は認められず、口縁上端部がヨコナデにより凹線状を呈するものである。法量はほとんどが破片を元にした復元値であるため確実性に欠けるが口径が20cm前後のもの30cm前後のもの大小2種類が認められる。320・321は底部の破片である。若干丸みを帯びた平底で外面に格子タタキを施す。322は瓦質焼成の釜である。内傾する口縁部外面に長めの鈎がやや下向きにつく。323は球形状の体部に短い直立した口縁部を持つ釜である。体部最張部に2個1対の板状の把手をもち、把手の内側に円孔を施す。体部外面はユビオサエをとどめ、ヨコナデ、ナデにより仕上げられる。内面にはヨコハケを施す。本遺跡出土の煮沸具の中では1例のみ確認された形態である。

324～326は銅の口縁部である。外面に鈎を持たず、口縁部が外反するものを銅とした。324・325は外反の度合いが弱く、326は外反の度合いが強い。

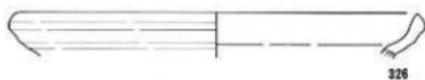
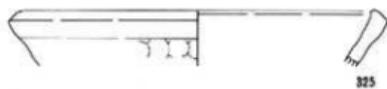
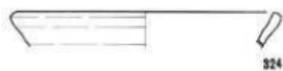
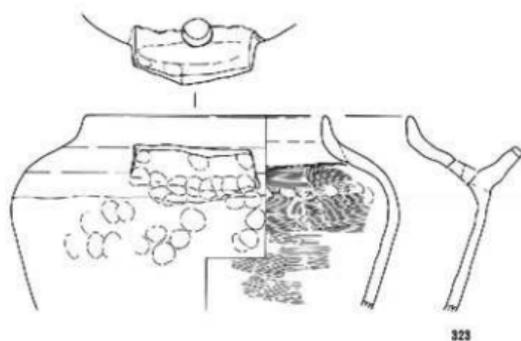
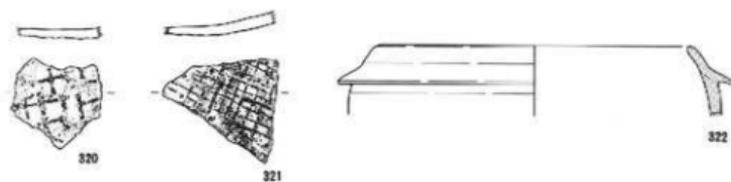
327～334は釜、あるいは銅につく脚である。いずれも基部が屈曲し周辺には貼り付けによるユビオサエが顕著である。身部はヘラズリとナデにより仕上げられる。



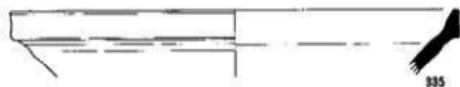
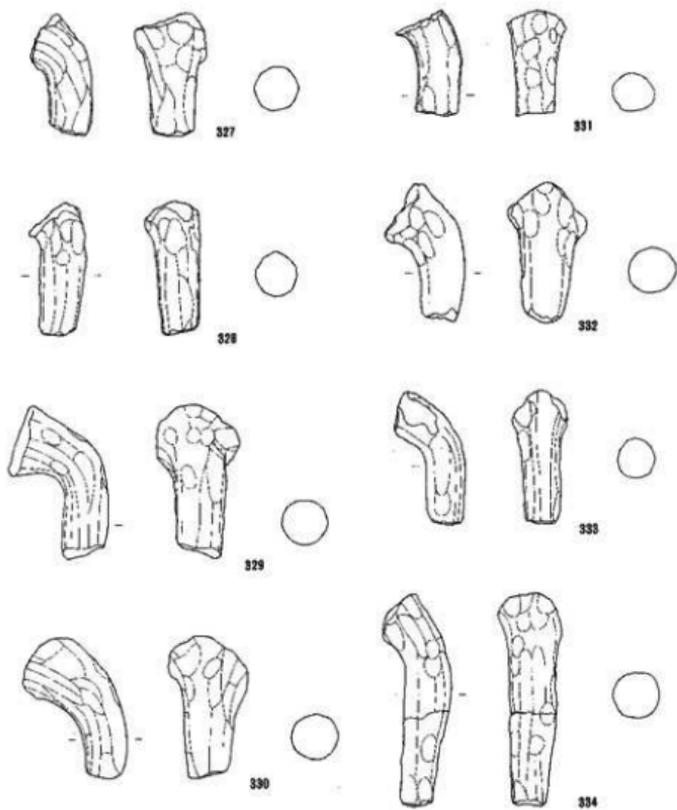
第124图 包含层出土物实测图(7)



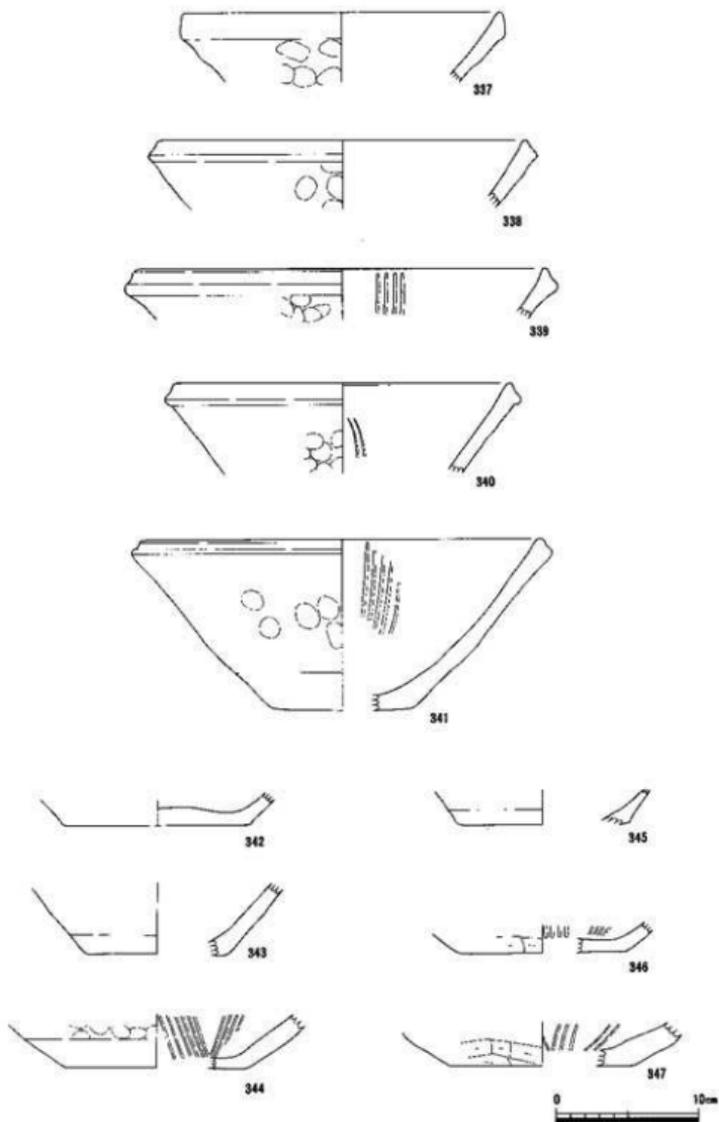
第125图 包含层出土遗物实测图(8)



第126图 包含层出土遗物实测图(9)



第127圖 包含層出土遺物実測図 (10)



第128图 包含层出土遗物实例图(11)

須恵質土器鉢 (第127図)

335・336は束播系こね鉢である。包含層中より2点のみ出土している。335は口縁端部を上方に立ちあげ幅広の面とする。336は口縁端部を上下に拡張し丸みを帯びた幅広の面とする。335は森田編年⁽⁷⁾の神出Ⅲ期1段階に相当し、13世紀半ば～後半、336は神出Ⅲ期2段階に相当し、13世紀末～15世紀前半に位置づけられる。

土師質土器播鉢 (第128図)

337～347は土師質土器播鉢である。337は口縁部の断面が三角形を呈する。338～341は口縁端部を肥厚し、上面はヨコナデにより凹線状を呈する。体部内面には339が4条1単位の櫛描条線、340が2条の櫛描条線を施し、すり目とする。全体の形態のわかる341は口径27.7cm、器高12cmを測り、体部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部を肥厚し、上面はヨコナデにより凹線状を呈する。体部外面はユビオサエをとどめ、底部付近には横位のヘラケズリを施す。内面には5条1組の櫛描条線を施し、すり目とする。342～347は底部である。343～347は外面に横位のヘラケズリを施す。内面は344は6条1単位の櫛描条線、346は4条の櫛描条線、347は3条1単位の櫛描条線を施し、すり目とする。

瓦質土器播鉢 (第129図)

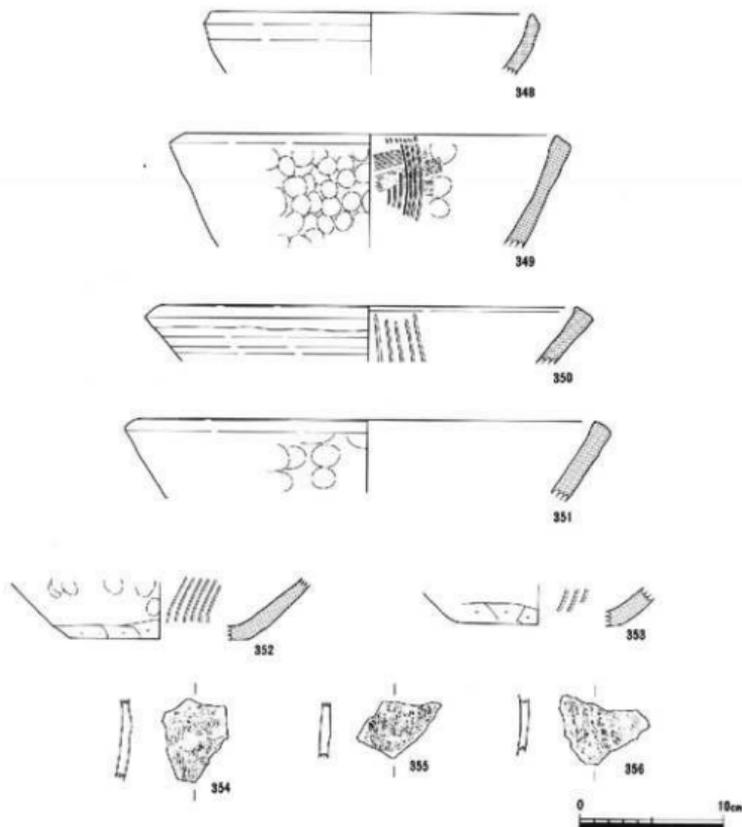
348は口縁端部を尖り気味におさめる。349は口縁端部を方形におさめる。体部外面にはユビオサエをとどめ、内面はヨコハケを施した後7条1単位の櫛描条線を施しすり目とする。350は口縁端部を方形気味におさめ、若く内側につまみ出す。体部外面をヨコナデし、内面には5条1単位の櫛描条線を施しすり目とする。351は口縁端部を方形におさめ、体部外面にユビオサエをとどめる。352は体部外面にユビオサエをとどめ、底部に横位のヘラケズリを施す。内面には6条1単位の櫛描条線を施しすり目とする。353は底部に横位のヘラケズリを施し、内面には3条1単位の櫛描条線を施しすり目とする。

土師質土器筒形容器 (第129図)

354～356は土師質の筒形容器である。体部の破片であるが円筒状を呈するものと考えられる。外面にタテハケを施し内面はヨコハケを施すが、部分的に粘土組織み上げの痕跡が認められる。中世墓群を検出した第6調査区の包含層より出土したものであり、類例⁽⁸⁾を見る限りは火葬灰器と考えられる。

瓦質土器甕 (第130図)

357は瓦質土器の甕の胴部である。外部にタテハケを施した後に格子タタキを施す。内面



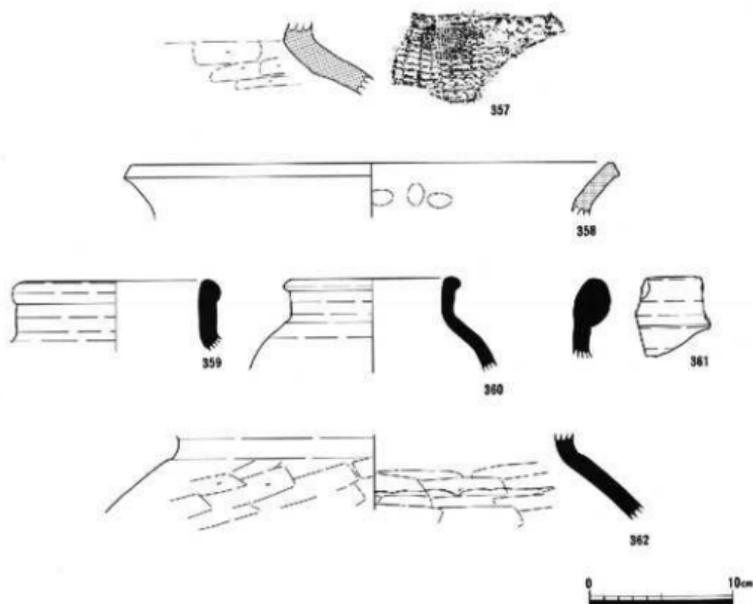
第129図 包含層出土遺物実測図 (12)

には横位のヘラケズリを施す。358は瓦質土器の甕の口縁部である。

備前焼 (第130～132図)

359・360は壺の口縁部である。359は短い直立した口縁部で端部を玉縁に作る。360は内彎気味の体部から短く直立する口縁部で、端部を玉縁に作る。間壁編年のIV期に相当し、15世紀代に位置づけられる。

361・362は甕である。361は口縁部である。端部は幅広の玉縁に作られる。間壁編年のIV期に相当し、15世紀代に位置づけられる。362は肩部である。口縁下部は内外面をヨコナデ



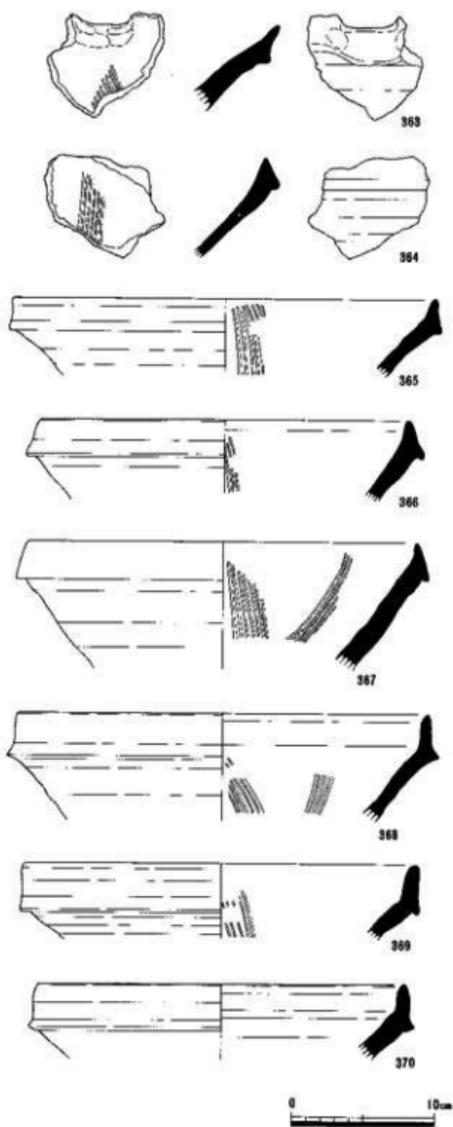
第130図 包含層出土遺物実測図 (13)

し体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。

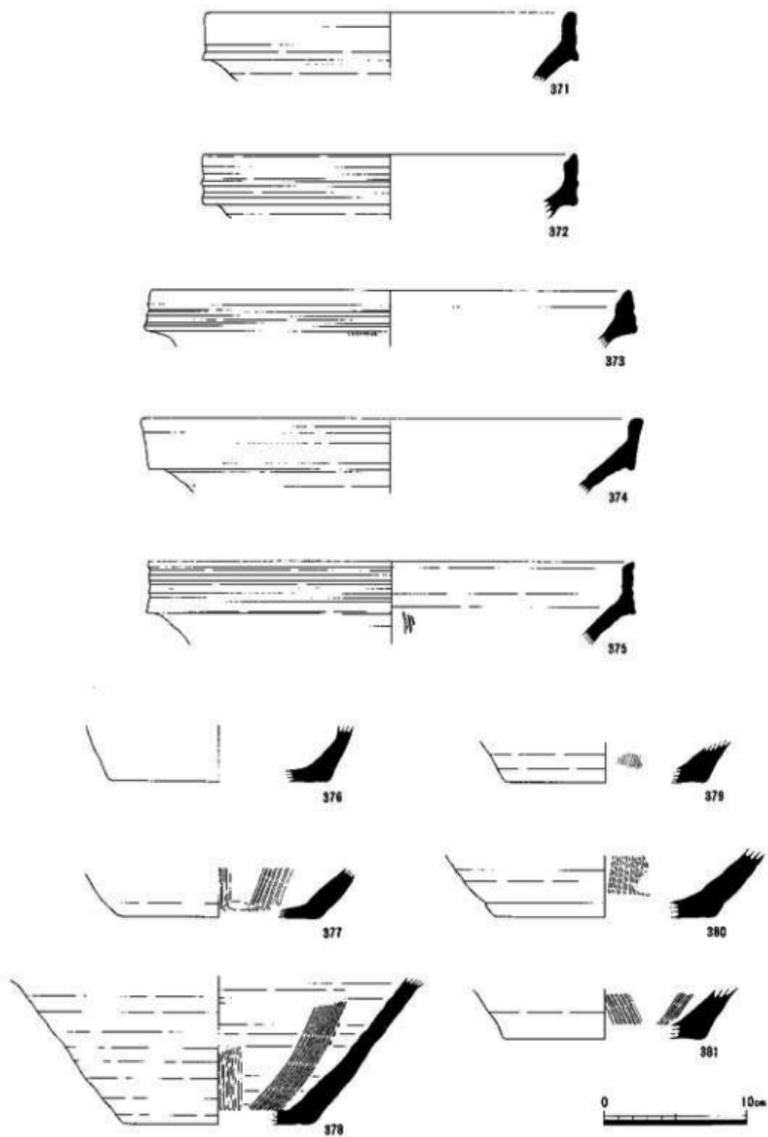
363～381は挿鉢である。363は片口部の破片である。口縁の一部を外方へ引き出したもので内外面にユビオサエをとどめる。364～375は口縁部である。断面の形状から、口縁端部の上下への拡張が小さいもの(364～367)、口縁端部を上方へ大きく拡張し、幅広の面とするもの(368～371)、口縁端部の上方への拡張が大きく、外面に凹線を持つもの(372～375)に分けられ、それぞれ間壁編年のIV期前半(15世紀前半)、IV期後半(15世紀後半)、V期(16世紀)に相当する。いずれも内面に数単位の櫛描条線を施し、すり目とするもので、1単位の条数の確認できるものは10条(378)、9条(380)、8条(363)、7条(365・367・381)、6条(364・368・377)、5条(369・379)である。胎土は砂粒、小礫を若干含み、色調は赤褐色を呈するものが多い。

国産施釉陶器 (第133図)

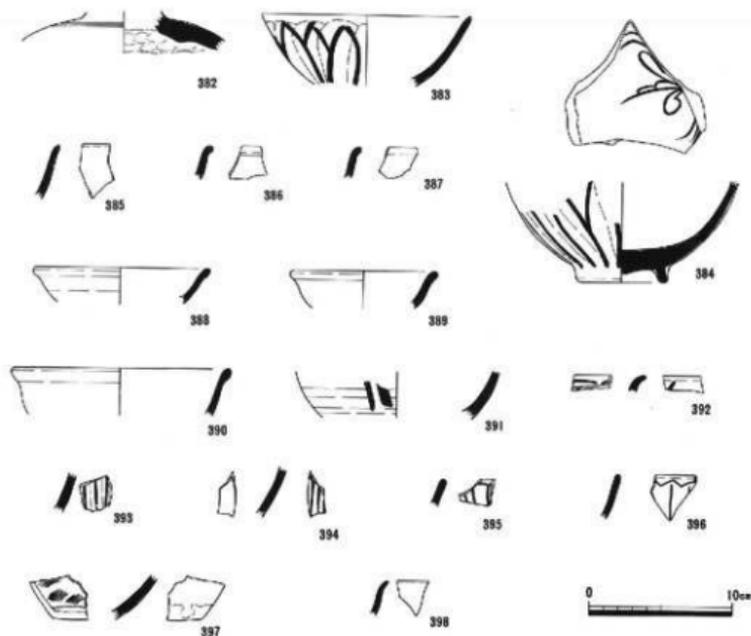
382は瀬戸焼の瓶子である。頸部外面下に櫛描文を施すもので、釉はオリーブ黄色に発色



第131图 包含层出土遗物实测图(14)



第132图 包含層出土遺物実測図 (15)

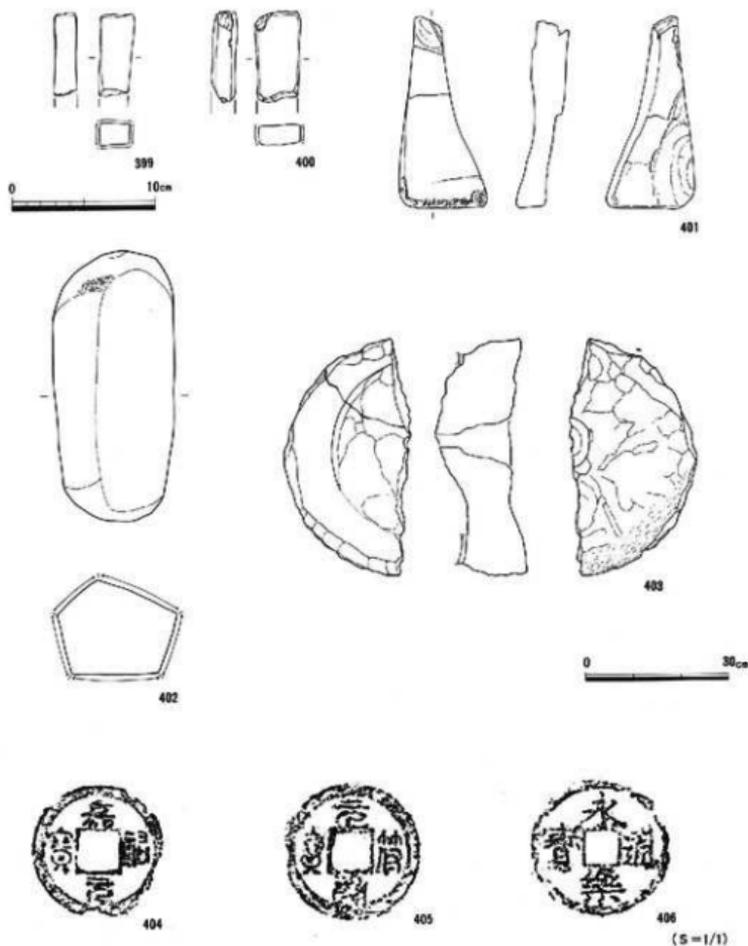


第133図 包含層出土遺物実測図 (16)

する。内面にはユビオサエが顕著であり、一部に接合痕が認められる。13世紀代のもと考えられる。

輸入磁器 (第133図)

383～398は中国産の輸入磁器である。383は青磁碗である。外面に片切彫による錦蓮弁文を施す。横田・森田分類のⅠ-5類に相当し、13世紀中頃に位置づけられる。384は外面に蓮弁文を施すが、明瞭な錦はない。内面には線彫による草花文を施す。385は内外面無文で、口縁端部を尖り気味におさめる青磁碗である。386～390は口縁部を外反し、端部を丸くおさめる青磁碗である。上田分類の龍泉窯系青磁碗D-II類に相当し、15世紀頃に位置づけられる。391は龍泉窯系の青磁碗である。体部下半に幅広の蓮弁文と思われる文様が施されている。392は龍泉窯系青磁高台付皿の口縁部と考えられる。口縁部が外反し内面に草花文を施す。393～396は体部外面に蓮弁文を施す青磁碗である。393は体部外面に弱い錦をもつ蓮弁文を施す。394～396は体部外面に線描蓮弁文を施すもので、396は蓮弁と剣頭がずれる。上

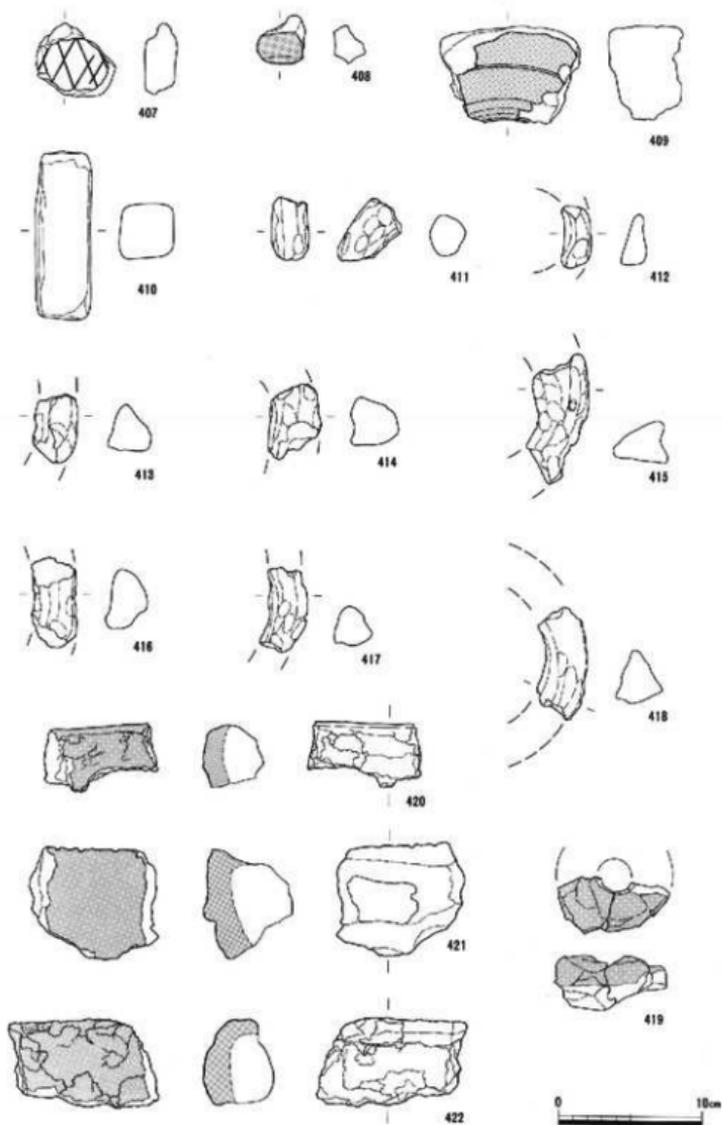


第134図 包含層出土遺物実測図 (17)

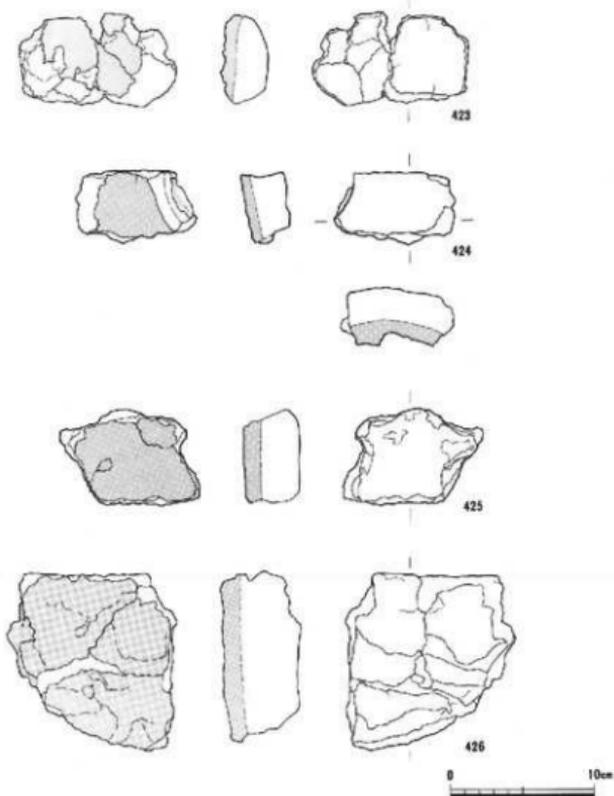
田分類の龍泉窯系青磁碗B-IV類に相当し、15~16世紀代に位置づけられる。397は白磁碗である。内面に櫛描文を施し、見込みに1条の圈線を施す。398は白磁碗である。口縁部を外反し、端部は尖り気味におさめる。

石製品 (第134図)

399~402は磁石である。399は4面、400は2面を使用する。401は3面を使用し、研ぎ減



第135图 包含层出土遗物实测图(18)



第136図 包含層出土遺物実測図(19)

りが著しく楕形を呈する。402は長側面の5面を使用し、断面は五角形を呈する。403は砂岩製の挽臼である。中心部に軸木受けを持ち、すり合わせ面は外傾する。

金属製品(第134図)

404は銅銭「嘉祐元寶」、405は銅銭「元符通寶」、406は銅銭「永樂通寶」である。

鑄造関連遺物(第135~136図)

407~409は鑄型である。407は表面に菱垣状の沈線を施すもので種型の一つと考えられる。

408は鋳型面に段を持ち、被熱により変色している。409は円盤状を呈し、鋳型面は段を持つ。中央部が被熱により変色している。羽釜の鋳型と考えられる。410～418は鋳造関連の土製品である。410は方柱状の上製品である。各面が比較的「率」に面取りされている。411は上製支脚である。412～418は環状の土製品である。いずれも粘土塊を手づくねで環状に成形したもので断面は三角形を呈する。内側面は被熱により変色し、下端面には真土が付着する。径の復元できた418は外径16.8cm、内径11.1cmを測る。419は轆羽口の先端部である。先端部は溶融し、黒色の滓が付着する。内径2.3cm、外径7.9cmを測る。420～426は溶解炉壁である。いずれも厚さ4cm前後で胎土に小礫、スサを含み、内側に滓が厚く付着する。420～423は端部である。424は中央に円形の羽口取付部と考えられる円孔が認められる。円孔内面には粘土が付着する。

注

- (1) 間壁忠彦「備前焼」ニューサイエンス社 1991
伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』1985
- (2) 山口秀大「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 1982
- (3) 辻佐伸「皿と錢貨—中世地鎮め遺溝の一樣相—」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』1992
- (4) 横口賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館論集』四 1978
- (5) 香川県教育委員会「西村遺跡」1980
- (6) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 1982
- (7) 森田勉「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987
- (8) 徳島県内の例では
石川重平「浦庄中世墳墓」『石井町史』1991
高岡裕「上喜来遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 3 1992
徳島県外の例では
川勝政太郎「丹後機地の室町時代庶民墓地の発掘」『史迹と美術』329号 1962
近藤滋「日野大谷遺跡」『佛教藝術』182号 1989
等があげられる。なお磁骨器としての筒形容器の研究については
杉原和雄「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器川土の遺跡について—」『考古学雑誌』第74巻第4号 1989 に詳しい。

3 考察

上喜来埜子～中佐古遺跡の鑄造工房の様相

(1) 鑄造関連遺物について

鑄型

鑄型は主に13・14調査区で出土したもので、製品の判断が可能なものには罎口、鍋、羽釜、梵燧がある。以下に出土した鑄型について検討を加える。

罎口は中空の製品であるため鑄造に際しては外型として上型、下型の2点と中子（内型）1点の計3点の鑄型が必要である。SK1109から出土した35～45は全て罎口の外型に相当すると考えられる。いずれも部分的な断片であるが、罎口外型は基本的には引型により形成される回転体であるため、断片部分から径を割り出していくことにより復元が可能となる。ここでは最も遺存のよい43を中心にその形状を復元する。

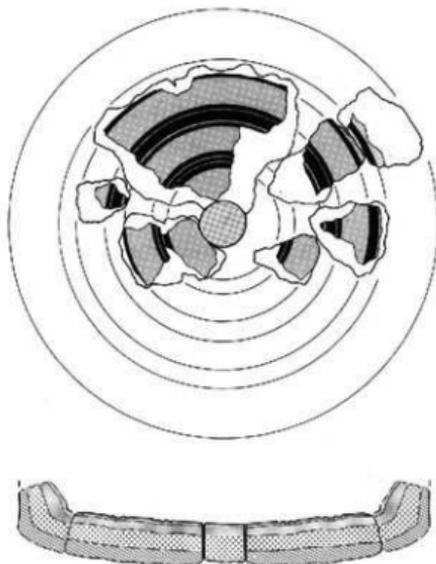
外型は中央部に引型の中心軸を通す鳥目穴と考えられる直径44mmの円孔を持ち、それを中心として外側に何重かの圏線状の沈線を施すものである。圏線は中心部から外側に向かい3組に分かれ、それぞれ「内圏線」、「中圏線」、「外圏線」となる。これら圏線に挟まれた無文帯は内側から外側に向かいそれぞれ「撞座区」、「中区」、「銘帯」ということになる。撞座区は直径100mmを測る。撞座区と中区を隔てる内圏線は幅2mmほどの沈線が3条一組で施される。中区は幅25mmで3条の子持ち線（幅2mmの沈線2条と幅9mmの凹線1条）で銘帯と隔てられる。銘帯は幅25mmで縁に外圏線がめぐり、これを参考に他の破片の部位を考えると35は撞座区から中区まで、36・37は銘帯前後、38は銘帯、39は中区にそれぞれ相当する。40は撞座区の中央、鳥目穴を充填したものである。41・42・45は縁から肩にかけての部分と考えられる。いずれも1条の沈線を持ち、この罎口が外圏線として少なくとも1条の実線を持っていたことがわかる。（第137図）

外型の厚さに関しては43を例に考えると鑄型面から背面までの厚さは41mmを測り、鑄型面から厚さ2～3mm程の灰白色の精良な真土部分が上真土、その外側8mmほどの黄褐色の真土部分が中真土、その外側30mmほどの糶、葉、小礫を混入した褐色の真土部分が粗真土にそれぞれ相当すると考えられる。中真土と粗真土の断面には1～3mm大の小孔が目立ち、鑄込み時のガス抜きおよび型の収縮に対する配慮がなされている。なお粗真土の最外部8mmほどは特に小礫の含み具合が顕著で分層が可能であり、この部分は鑄型外枠（種型・粗型）の剝離したものとも考えられる。（第137図）

梵燧や罎口、鍋、釜などの中空もしくは器状を呈する鑄物は外型とともに必ず中子（内型）

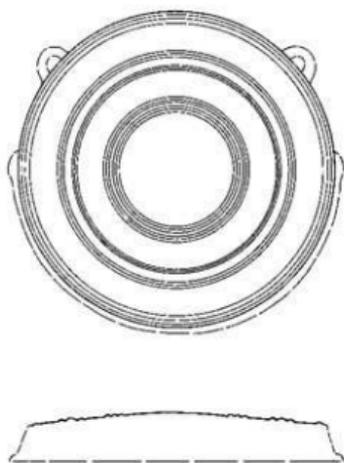
が必要なのであるが、鋳型片と考えられるもの全てを検討した結果、中子については確認できなかった。鋳口鋳型の場合は鋳込み終了後、型ばらしの際には中子は鋳口本体の内部に包み込まれるような形になっており、これを狭長な開口部から取り出すのは容易な作業でないと考えられる。この点について滋賀県五箇荘町の西澤梵鐘鋳造所では鋳口の中子は「中子砂」と呼ばれる砂を主体としたもので作られる。内部に数本の芯金を入れ、表面にハジロと呼ばれる粘土水を塗り、その上にクロミを塗り乾燥させて作るそうである。型ばらし時にはまず外型をはずした後に製品を吊り下げて、開口部からタガネを差し込んだり、ゆすったりして中子を壊し、少しずつ落下させる。この方法によると中子は取り出しが容易で、型ばらし時には細片あるいは砂となり、外型のような破片としては残らないそうである⁽¹⁾。本例の中子の場合もこのような成形法が採用されたために破片が確認できなかったものと考えられる。

撞座区は中央に蓮華文または略式蓮華文の撞座を隔鋳するものが多い。撞座は抜型により形成した雌型を外型に埋め込む方法を探るが、撞座の径が小さい場合は鳥目穴に直接埋め込み、鳥目穴より径が大きい場合は鳥目穴の周囲を削ってこれを埋め込む。本例の場合は、撞座に相当する鋳型片がみられないこと、鳥目穴の周囲に削った痕跡が認められないこと、鳥



第137図 鋳口鋳型復元素 (S=1/5)

目を充填した粘土と外型の厚みがほぼ一致すること、更に鳥目穴を充填した粘土の表面がかなり平滑に仕上げられており、鋳型面として被熱している点などから推座鋳型が埋め込まれたとは考えにくい。また前述したように外型には上型と下型があるが、鋳口は通常表裏同文であることを勘案すると、外型の上下にかかわらず推座が存在したとは考えられない。こうしたことから本例の鋳口推座は無文であったと判断する。この他鋳口には吊り手となる「耳」、音響のための「目」、「口」と呼ばれる突出部があるが、この部分に該当するものは確認できなかった。



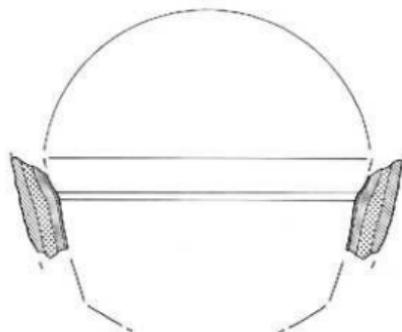
第138図 鋳口復元案 (S = 1/2)

以上SK1109より出上した鋳口鋳型の復元を試みたが、この鋳型により鑄造された鋳口は径30cm程で突線3条の内圏線、子持線の中圏線、突線1条以上の外圏線が巡り、推座区、中区、銘帯の三部分より構成されたと考えられる。また推座部分は無文であり、面中央部の張りの浅い、殆ど平坦に近い面を持ったものであったと考えられる。(第138図)

鋳口の形態のうち、圏線の時期的な変遷に関しては久保常晴氏⁽²⁾、香取忠彦氏⁽³⁾の研究に詳しい。これらによると外圏線は鎌倉、南北朝時代を通じて2条のものが多く、中圏線は鎌倉時代には2条、南北朝時代には3条のものが見られる。内圏線は鎌倉時代は2条、南北朝時代以降に3条のものが見られる。推座に関しては、奈良県長谷寺の建久三年銘鋳口、山梨県明王寺の貞応三年銘鋳口、京都府宝蔵寺の明德元年銘の鋳口等に推座が無文のものがみられる。久保氏によれば推座無文で重圏のみにより面が構成されるものは室町末期以前に多いとされており、鉦鼓様に面の張りが少なく扁平なものとなるという指摘⁽⁴⁾は本例に合致している。このように出土した鋳型から復元される鋳口は概ね室町末期以前の諸特徴を備えているといえよう。

銅の鋳型はSK1183から出土した89が相当する。鋳型は外型で体部上半から口縁下部にかけての部分と考えられる。体部が若干丸みを帯びて立ち上がり、口縁部で外方に若干屈曲する。鋳型より復元した銅屈曲部の外径は26.6cmを測り、口縁部外径はおおよそ30cmほどになる

ものと考えられる。鑄型面にはク
ロミが残っており、鑄型の断面
を観察すると鑄型から3mmほどの
部分が灰色の精良な上真土、13mm
ほどが橙色の中真土、10mmほどが
粒子の粗い明黄褐色の粗真土に相
当すると考えられる。更に外側の
10mmほどが小礫、榎、葉等を多量
に含む明褐色の外枠に相当すると
考えられる。外枠は真土部分と明
瞭に肌分かれすることから、あら
かじめ外枠として製作され、焼成
されたものと思われる。



第139図 銅鑄型復元案 (S=1/4)

また真土部分は前述したように3層認められるが、いずれも外枠のカーブに沿うように同心
円状に施されることから、引型を使用して製作された鑄型であることがわかる。(第139図)

この銅鑄型は口縁部の形態から五十川伸矢氏の分類⁽⁸⁾の銅Aに相当する。同様の鑄型は
大阪府真福寺遺跡⁽⁶⁾(13C後)、福岡県鉢ノ浦遺跡⁽⁷⁾(13C後~14C前)、滋賀県軽野正境遺
跡⁽⁸⁾(室町時代末)等から出土している。このうち、真福寺例はほぼ完形の出土であり、引
型を用いて製作された鑄型の技術的な面が看取できる。口縁部部分の上部には中子を支える
ハバキと考えられる段が設けられており、湯口は底部中央であったことがうかがえる。鉢ノ
浦例も同様に口縁部にハバキが認められる。軽野正境例は口縁部と底部の鑄型が報告されて
いるが、口縁部の屈曲が弱く、直立気味である点が本例と近い。

伝世の鉄鑄物や遺跡出土の鑄型を比較して銅Aの形態について検討した五十川氏は銅A
が中世の鉄鑄製の煮沸具として西日本を中心に分布することをあきらかにし、こうした銅A
の口縁部の形態が丸みを帯びた屈曲から、次第に屈曲が小さくなり中世末頃には直線的に斜
めに立ち上がるように変化していくことを指摘している⁽⁹⁾。本例もこうした事例と同様の
形態を示す。

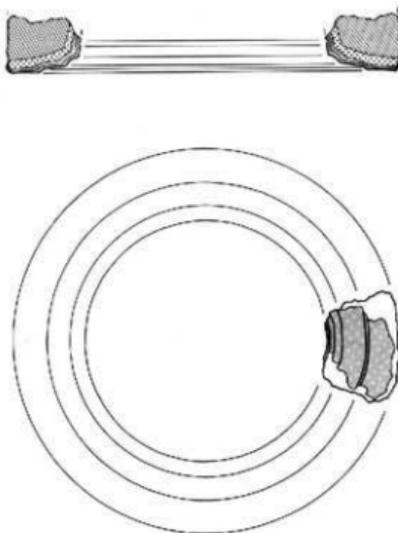
包含層出土の409は羽釜の鑄型と考えられる。口縁下部から鑄にかけての外型で鑄部分の復
元径は28cmを測る。口縁下部に1段の段を持ち、口縁部は内傾気味に立ち上がる。また口縁部
外面には1条の突線が巡る。羽釜の鑄型は銅鑄型と同様に外枠を用意その中に引型により真
土を塗り付けて鑄型を完成させるものであるが、外枠は構造上、鑄を境にして口縁部(上部)
と体部(下部)に分かれ中子を含めると全部で3種類の鑄型が必要になる。今回確認できた羽
釜鑄型は鑄から口縁下部にかけての上部の破片である。湯桶状の外枠最外縁部から鑄型面まで

が残存している。これによると口縁部の鋳型の厚さは約6.5cmを測り、外側から2.6cmほどの部分が下型との接合面に相当する。その内側の直径28cmほどの部分が鋳の外縁に相当する。真土は鋳型面から8mmほどが橙色を呈する上真土、5mmほどが淡黄色を呈する中真土、9mmほどが浅黄色を呈する粗真土に相当する。更にその外側の4.6cmほどが外枠に相当する。外枠は鋳型と同様に朽、葉や小礫を混入している。(第140図)

鋳口、銅、羽釜等の他に梵鐘を鋳造した可能性を示す鋳型が数点出土している。SK1183から出土した118は乳頂部の鋳型、119は龍頭鋳型のためがみ部分、SP1756から出土した221は乳頂部の鋳型

である。乳鋳型は通常抜型を粘土に押しつけて型を取り離型とするが、擬宝珠形など逆勾配を持つ複雑な形の場合は全体を粘土で巻き、半乾きの時にこれを分割して抜型を取り出し、再びこれを接合する方法が取られる。また乳鋳型そのものを引型によって作る方法もある。この場合は乳頂部に小さな鳥目穴が残り、これを粘土で充填した痕跡が観察できるので識別が可能である。本遺跡の例は乳頂部に鳥目穴がなく、型割りもされていないことから円錐状の抜型を粘土に押しつけただけの単純な形であったものと思われる。

龍頭の鋳型は仏像の裳裾とする見方もできるが、ここでは鋳型背面横のカーブが上方に向かい緩やかに内彎する点に注目したい。こうしたカーブは福岡県銚ノ浦遺跡出土の龍頭鋳型や「倉吉の鋳物師」⁽¹⁹⁾に見られる龍頭鋳型に認められる。このカーブは龍頭の鋳型が抜型を用いて作られる際に生ずるカーブであると考えられる。つまり龍頭の抜型自体の形態が吊り手基部となる口の部分から「たてがみ」を経て宝珠に至るまで、およそ三角形あるいは五角形を呈するため、抜型に粘土を巻いていく際に頂部、たてがみ部分に向かっては先すぼまりになっていくと考えられる。これが仏像の鋳型である場合は裳裾の部分では三角形に末広がりになり、龍頭鋳型の場合とは逆のカーブを持つことになる。こうした点を勘案すると119



第140図 羽釜鋳型復元案 (S = 1/4)

は仏像鋳型というよりも龍頭鋳型のたてがみ部分であるとしたほうが蓋然性が高い。梵鐘の全容は出土した鋳型が小片であるため不明である。

溶解炉・埴塙

今回の調査では主に13・14調査区より807点(27.8kg)の溶解炉壁が出土している。これらは胎土中に靨、葉などのスサや小礫を含んだ粘土で作られており、3～5cmほどの厚みを持つ。壁面は内側に向かい横方向にカーブしており、内面には滓が厚く付着する。同様の炉壁は鋳造遺跡では通常出土するもので、福岡県銚ノ浦遺跡、京都府京都大学構内遺跡⁽¹¹⁾、神奈川県長福寺址⁽¹²⁾、徳島県前田遺跡⁽¹³⁾で復元されたような、円筒形で3～4段に分割可能な炉体に鞆羽口の取り付け「甗炉」と呼ばれるものに相当する。炉壁は小片が多く、全容の復元には至らなかった。図示したものは比較的大きめの破片かあるいは炉体分割部分の上端、下端部に相当すると考えられるものである。

この溶解炉に関連して図示した「クライ」は内側に向かい横方向にカーブする薄板状の破片で元は輪状を呈したものと考えられる。内側には滓が付着し、外側は上下に粘土がはみ出し、断面はT字状を呈する。内側に滓が付着し、横方向のカーブが炉壁のカーブとほぼ一致することなどから、溶解炉に付属し地金の溶解に関係した遺物であることが推測できた。『倉吉の鋳物師』⁽¹⁴⁾によると、分割した甗炉を連結するために炉間にクライ上を置いて強く押しつけて密着させるとの記述があり、これに相当するものと考えた。『近江の鋳物師』⁽¹⁵⁾ではこうした結合のための粘土は炉間に用いずに、炉の接合部に外側から真土を塗って隙間を無くして完全に空気が遮断されるようにしたとあり、倉吉と近江の間に若干の技術的相違が認められる。本例の溶解炉は倉吉の例に近いものと考えられる。

埴塙はSP1761より出土した220が1点のみ確認されている。内面に滓が厚く付着することから埴塙と考えた。口縁部の一部に認められる片口は注口部の機能を持つものであり、鋳込み時に埴塙から直接湯を注いだものと思われる。内面の滓は部分的に緑青が吹いており、銅の溶解に用いられた可能性が高い。埴塙としては人形の部類と考えられるが、一方に大形品鋳造のための甗炉が出土していることを考え合わせると、こうした埴塙は青銅製の小形品(たとえば鋳口など)の鋳造作業で用いられた可能性が高い。

鞆羽口

鞆羽口は金属精錬作業や鋳造作業、鍛冶作業において、送風器である鞆から溶解炉や鍛冶炉内に風を送り込む送風管としての機能を持つ上製の管である。また一方では造滓剤としてカラミ成分となる粘土の補給を行う機能もかねており、そのため消耗が激しく頻繁に取り替える必要があった。

木遺跡出土の鑪羽口は鑄造作業に伴うものと考えられ、多数の溶解炉壁片や鑄型と共に13・14調査区で集中的に出土している。なかでも14調査区のSK1181では破片数で101点(3,420g)、SK1183では破片数で162点(7,050g)が出土している。いずれも先端部から体部外面にかけて滓が付着し、内面には認められないことから、実際に溶解炉に装着して稼働したものであるといえる。滓は先端部が小粒状の鉄質を呈し、体部外面の滓は暗赤褐色のガラス状を呈するものが多い。また中には体部外面から先端部より更に内側に滓が突出するものも認められる。これは溶解炉内の湯が羽口先端部間際まで上昇したことを示すものと考えられる。出土した鑪羽口のうち、先端部の内径が復元できるものは図示した20点である。これらは内径が12cm以上の大形品、9cm前後の中形品、3cm以下の小形品の3種に分類できる。大形品は4点で内径12.3~14.0cm、平均12.7cm、中形品は13点で内径8.1~10.7cm、平均9.4cm、小形品は2点で1.6~3.0cm、平均2.3cmを測る。大形と中形の羽口はともに器壁が1cmほどと薄手であり、小形の羽口は器壁が内径に比して厚い。

大形と中形の羽口は形態と滓の付着部位から考えて鑪炉に装着された羽口とするべきであろう。今回の調査では羽口が炉壁に装着されたかたちで出土したものはないが、SK1181出土の108や包含層出土の424は溶解炉壁の羽口装着部分に相当すると考えられる。108は炉壁面に径13cm前後の円孔を持ち、424は径10cm前後の円孔と羽口を炉壁に装着した際の隙間に充填した粘土が観察できる。小形の羽口は滓が先端部外面のみに付着することや形態から考えて大形、中形の羽口とは使用法を異にするものと考えられる。五「川仲欠氏は鑄造遺跡出土の炉壁の量を検討し、大形の溶解炉が使用された場合はかなりの量の炉壁が出土するが、小形の鑄物を鑄造する場合には小型の溶解装置でよく、必ずとこれに伴う鑪の形態が異なると考えた⁽¹⁶⁾が、鑪の形態が異なれば送風量も変化し、それに応じて羽口の内径が変化することは考えられよう。こうした小形の羽口は前述の埴埴の出土を考え合わせると、埴埴を用いた地金の溶解に使用されたものと考えられないだろうか。

鑄造関連土製品

今回の調査では鑄造作業に伴う遺物が多数出土しているが、その中には鑄型や溶解炉のように作業に直接用いられた道具の他に、鑄型成形時や溶解作業時に補助的に用いられたと考えられる道具類も若干出土している。これらは本文中では便宜上鑄造関連土製品とした。

三又状土製品は手づくねの三脚である。鑄型焼成の際に用いられるもので、現代の鑄造工房でも同様の形態のものが使用されており、倉吉では「サル」、近江では「エマラ」と呼ばれる。具体的な使用法は、鑄型を引型で成形した後に、鑄型を乾燥する目的で中央の鳥目の穴の上にこれを置き、その上に炭(松炭)を置いて火をつける。鳥目の穴の上に置くのは灰、炭が穴から落下しないようにするためであり、通気のためでもあるという⁽¹⁷⁾。こうした使

用法から、上面は被熱痕が顕著であり、SK1181出土の92・93にもそうした被熱痕が認められる。また92は高さ4.4cm、93は高さ5.6cmを測り、寸法に若干の差異が認められる。『倉吉の鋳物師』では一人の職人が20～30種類のサルを鋳型の大きさにより使い分けたとあり、本例もこうした使い分けを示すものと考えられる。三又状土製品は岐阜県金屋遺跡⁽¹⁸⁾(15C)、大阪府堺環濠都市遺跡⁽¹⁹⁾(SKT79)(16C)、福岡県室町遺跡(16C後半)、滋賀県野止境遺跡(室町時代末)、大阪府北花田口遺跡⁽²⁰⁾(17C後～18C)、神奈川県長福寺址(18C後半)等で出土しており、主として中世後半以降の鋳造遺跡での出土が目立つ。

本文中で環状土製品としたものは使用法が不明であったが、断面が三角形を呈し、上面、内側面に被熱痕跡が認められるなど定形的な特徴が認められるため、特定の作業に使用された道具であると考えた。滋賀県西澤梵鐘鋳造所の西澤吉太郎氏に遺物を実見していただいたところ半鋳、鋳口、祭紐等の小形品の鋳型の湯口のまわりを囲う土手のようなもので、鋳込みに際して湯のあふれを防ぐために用いられるとのことであった。これらは道具というほどのものではないが鋳造所によってはあらかじめ作って用意しておく所もあるという。

(2) 鋳造工房の構造と立地

鋳造関連遺構について

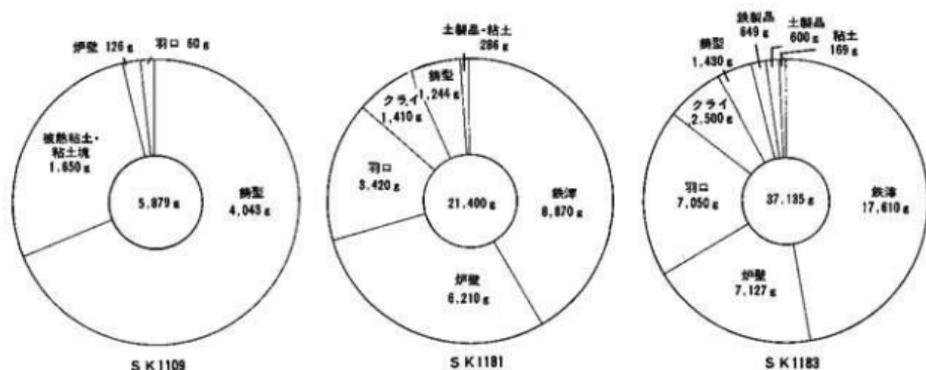
鋳型集積土坑・炉壁集積土坑

ここでは土坑内に大量の鋳造関連遺物を集積したSK1109・SK1181・SK1183の三者を比較してそれぞれの土坑の出土遺物の内容からその性格を類推してみたい。第141図は3基の土坑から出土した鋳造関連遺物を計量し、それぞれの出土量に占める割合を示したものである。SK1109では鋳型が69%、粘土塊・被熱粘土が28%を占め、炉壁2%、羽口1%となる。SK1181は滓が41%、炉壁が29%、次いで羽口が16%、クライ7%、鋳型6%、土製品・粘土1%の順となる。SK1183は滓が47%、炉壁が19%、次いで羽口19%、クライ7%、鋳型4%、鉄製品2%、土製品1%、粘土1%となる。SK1183はSK1181を切って構築されたものであるためSK1181の遺物をも含んでいると考えられるが両者はほぼ同様の出土傾向を示す。これからするとSK1109は鋳型に類する遺物の出土が顕著であり、SK1181・SK1183は溶解作業に伴う遺物の出土が顕著であるといえる。

出土遺物の内容をそれぞれ比較すると、鋳型はSK1109が51点(4,043g)、SK1181が48点(1,244g)、SK1183が103点(1,430g)で出土数そのものはSK1183が最も多いが、単純に鋳型1点あたりの平均重量を算出してみるとSK1109が79.2g、SK1181が25.9g、

SK1181が13.8gとなり、SK1109出土の鑄型片がSK1181・SK1183に比べて大形であることがわかる。実際出土した鑄型をそれぞれ比較するとSK1109出土の鑄型は遺存状態が良好であり、SK1181・SK1183のものは細片が多く、一部を除き鑄型面も不明瞭なものが多い。粘土塊・被熱粘土はSK1109で75点(1,650g)、SK1181で9点(82g)、SK1183で13点(169g)となり、SK1109の出土量が多い。地金の溶解作業に使用される遺物の出土は前述したようにSK1181・SK1183での出土が顕著である。溶解炉壁はSK1109では5点(126g)、SK1181では158点(6,210g)、SK1183では181点(7,127g)となり、SK1181・SK1183が圧倒的に多い。クライはSK1109では出土せず、SK1181で57点(1,410g)、SK1183で133点(2,500g)となる。羽口はSK1109で3点(60g)、SK1181で101点(3,420g)、SK1183で162点(7,050g)となり、SK1181・SK1183の出土量が圧倒的に多い。溶解作業の物的証拠ともいえる滓はSK1109ではまったく出土せず、SK1181では8,870g、SK1183では17,610gと大量に出土している。

鑄造関連物の出土割合を比較すると3基の上坑の性格の違いが明瞭になる。SK1109では鑄型、被熱粘土がその出土量のほとんどを占め、地金の溶解に関連する遺物の出土がみられないことから意識的に鑄型を選別し廃棄したと考えられる。こうした出土状態を積極的に評価するならば、程度のよい鑄型片や粘土塊を選んで集積したものと考えることもできよう。現代の鑄造作業においては鑄型の原料となる真土は原則的に使用済みの鑄型片を砕いて再利用するものであり、そのため鑄型片をストックする場を設ける所もある⁽²¹⁾。SK1109もこのような鑄型の再利用のための集積の場と考えることができる。SK1181・SK1183は「溶解炉壁」、「クライ」、「羽口」といった地金の溶解に用いられる道具の1セットとその廃棄物である滓が集中して大量に出土することから溶解、鑄込みの作業が終了した後それらを廃棄し



第141図 SK1109・1181・1183出土鑄造関連遺物構成

た場であることが理解できよう。またSK1183はこれら遺物とともに、炭、灰を多量に含み、火打ち石の出土がみられること、さらにSK1183を切るSK1182が焼上溜まりであることもこれら土坑が溶解作業に伴う廃棄土坑であることを裏付けるものである。

粘土集積土坑

粘土塊を特に多量に出土した粘土集積土坑ともいうべきものが3ヵ所で検出されている。13調査区のSP1818は柱穴状の小土坑であるが内部に13,600gの粘土塊が埋蔵されていた。14調査区のSK1186とSK1187ではそれぞれ3,420gと2,500gの粘土塊が埋蔵されていた。粘土塊はSK1109で出土した被熱粘土のような焼け面はなく、全体に浅黄色を呈する粒子の細かいもので、水に溶かして練ると粘りを持つものであった。

こうした鑄造工房に伴う粘土集積土坑の例としては福岡県銚子浦遺跡（13C後半～14C前半）で47SK550が粘土材料置き場として報告されている他、大阪府北花田遺跡（17C後半～18C）では板囲いの粘土溜施設が報告されている。報告者は鑄型の密集と粘土の使用を重視し、鑄造工房中の型焼き場といった性格を想定している。また大阪府道修町の調査⁽²²⁾では掘立柱建物に伴い壱先鑄型や壱炉とともに木箱に粘土を充填した施設が検出されている。これら粘土集積土坑は鋤柄俊夫氏により、炉跡や鑄造土坑、方形または不定形土坑、礫の集積とならんで鑄造遺跡に共通して見られる遺構として位置づけがなされており、特に室町以降に確認される場合が多いとされている⁽²³⁾。本遺跡の粘土集積土坑も鋤柄氏の指摘する粘土集積遺構に相当し、前述のSK1109出土の鑄型片と共に鑄型の原料、あるいは溶解炉壁、羽口等の原料として集積されたものと考えられる。

鉄製品集積土坑

SK1134は埋土中より鉄製品の破片が90点（4,100g）出土している。

『倉古の鑄物師』にある、倉古市斎江家の鉄購入状況によると、明治31年に「出荷元・吹野、品名・ならし」とある。「ならし」とは、銅・電など鑄物製品で古くなったものを回収して、再び鑄物原料にするものをさすとのことである。SK1134で検出された鉄製品も鑄造作業に際しては、地金の一部としてストックされたものと考えられる。

鑄造工房の構造

鑄造関連遺物を出土した13・14調査区の遺構群は遺物の出土量や集中状況から短期間に集中して鑄物の生産を行った鑄造工房であったと考えられる。ここでは鑄造工房の立地条件と工房そのものの構造について考える。

工房の稼働時期であるが、まず遺構内より出土した遺物と鑄造関連遺物の共存関係を考える。SK1109で鋳口鑄型と備前焼Ⅳ期⁽²⁴⁾の摺鉢が共存し、SX1011では羽口と備前焼Ⅳ期の壺、15～16世紀の龍泉窯系の青磁碗が共存して出土している。またSP1761では埴壇と備前焼Ⅳ期後半の甕が共存して出土している。こうした例からすると、鑄造工房での作業は15世紀後半～16世紀には終結していたと考えられる。鑄造作業の性格上、作業と廃棄の間には大きな時間差がないと考えられ、この年代が鑄造工房の稼働した年代と考えても大過はないであろう。

鑄造工房は日開谷川の扇状地に臨む段丘下位面の東突端に位置する。段丘上には14～16世紀を主体とする集落跡が検出されている。段丘下の扇状地上では遺構の検出が希薄であり、地形の状況からすると集落の範囲は段丘上を南に向かい広がるものと推定できる。鑄造工房はこの段丘上の集落の東端に、15世紀後半頃に設置されたものと考えられる。

鑄造工房の検出された13・14調査区は面積にしておよそ1,100㎡ほどである。これらは一連の遺構群として把握でき、遺構の集中状況によりいくつかのグループとして捉えることが可能である。13調査区は2条の溝(SD1001・SD1002)により南北に区画される。この区画溝の北側をA群、南側のSA1007～1009を中心とする範囲をB群と呼ぶ。さらにSD1003によりA・B群と隔てられる、ほぼ14調査区に相当する部分をC群と呼ぶ。C群はさらにSA1010を中心とした南半部とSA1011を中心とした北半部に分割して考えることも可能である。このように鑄造工房は区画溝と遺構の集中状況により3ないし4群に分けて考えることができる。ただしB群については溝が調査区外南側に延びることから溝に圍繞された範囲全体については不明である。

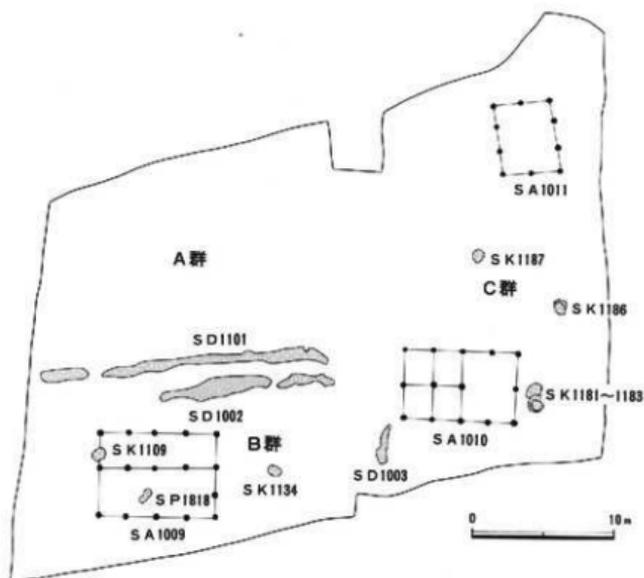
A～C群のうちA群では鑄造関連遺物の出土がB・C群に比べて希薄であり、鑄造工房の中心は溝で区画されたB群とその東側のC群における。B群では調査区内で最大規模の3×4間の掘立柱建物SA1009を中心としてそれに重複する2棟の建物SA1007・SA1008が検出されている。これら建物跡と重複して鋳型集積土坑SK1109、粘土集積土坑SP1818が検出されている。このことからB群のSA1009が工房の母屋的な建物であり、この場において鋳型の製作を中心とした作業が進められたことが推察できる。C群では前述したようにSA1010を中心とした南半部とSA1011を中心とした北半部分けて考えることができる。南半部のSA1010は2間×4間で棟方向がSA1009と一致することから同時期の建物と考えられる。東側に廃棄土坑SK1181～SK1183が隣接し、溶解作業、鋳込み作業が行われたものと考えられる。この2基の土坑は切りあっていることから少なくとも2回にわたる鋳込み作業が行われたことが推察できる。こうした建物に隣接した廃棄土坑の検出例としては大阪府堺区環濠都市遺跡⁽²⁵⁾(SKT153)(16C末～17C半)がある。さらにSK1183からは梵鐘鑄型の一部が出土していることから、すぐ東側の段丘斜面を利用した梵鐘などの大形鋳物の鋳込みが行わ

れた可能性も指摘できるが、斜面部の調査が行われていないため状況証拠的な判断にとどまる。C群北半部ではSA1011が検出された他は遺構は疎らである。あるいはSA1011は鑄造作業に必要な木炭、地金などを集積した倉庫的な役割を果たしたものかもしれない。鑄造工房の中心的な場であるB・C群の遺構をまとめると第142図ようになる。

B群：SA1009（作業棟）・SK1109（鑄型集積土坑）・SK1134（鉄製品集積土坑）・SP1818（粘土集積土坑）

C群：南半部 SA1010（鑄込み場）・SK1181～1183（廃棄土坑）

北半部 SA1011（倉庫）・SK1186・1187（粘土集積土坑）



第142図 13・14調査区鑄造工房配置図

注

- (1) 滋賀県神崎郡五箇荘町西澤梵鐘鑄造所、西澤吉太郎氏よりご教示を得た。なお、今回の報告に際しては西澤氏より数々のご教示と鑄造関連品実見等のご配慮を得た。
- (2) 久保常晴「鑄口の研究」『佛教考古学研究』ニューサイエンス社
- (3) 香取忠彦「鑄口」『新版仏教考古学講座』第五巻仏具 雄山閣 1976
- (4) (2)に同じ。
- (5) 五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 1992
- (6) 「真福寺遺跡」(財)大坂文化財センター 1986
- (7) 山本信夫・狭川真一「鉢ノ浦遺跡」『佛教藝術』174号 1987
- (8) 『経野正境遺跡』奈良町教育委員会 1979
- (9) (5)に同じ。
- (10) 『倉吉の鑄物師』倉吉市教育委員会 1986
- (11) 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養学部構内 AP22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- (12) 「北原 (NO. 9) 遺跡内長福寺址」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ』神奈川県埋蔵文化財センター 1993
- (13) 「前田遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2 徳島県教育委員会 1993
- (14) (10)に同じ。「クライは、火が漏れるのを防ぎ、こしき湯やノロ(浴槽)によって、ルとこしきが密着するのを防ぎ、こしきの取り外しを少しでも容易にし、こしきの破損を防いだ。」
- (15) 『近江の鑄物師』2 滋賀県教育委員会 1987
- (16) 五十川伸矢「中世白河の鑄造工房」『京都市埋蔵文化財調査報告』IV 1991
- (17) 西澤吉太郎氏よりご教示を得た。
- (18) 「金屋・星の宮遺跡」坂下町教育委員会 1975
- (19) 「塚原澤都市遺跡 (SKT79) 発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第37集 1988
- (20) 「北花田」遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第5冊 1990
- (21) 西澤吉太郎氏よりご教示を得た。
- (22) 森毅「大阪府人坂城跡—大阪市道修町の町屋の調査—」『日本考古学年報』39 1988
- (23) 鑄柄俊夫「中世丹南における職能民の集落遺跡—鑄造工人を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 1993
- (24) 間壁忠彦・間壁覆子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報』1・2・5号 1966

～1968

- (25) 續仲一郎「界隈塚都市遺跡（SKT153地点）発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第51集

1990

4 まとめ

今回の調査で対象となった範囲は、口開谷川の扇状地上とその右岸に広がる段丘の下位面と上位面の一部である。段丘下位面では旧石器時代から中世にかけての遺物、遺構が確認されているが、扇状地上では口開谷川の度重なる流路変更に伴うと考えられる砂礫層を確認したのみで、近世の段階に至るまで明確な遺構は検出されていない。ここでは段丘面上に確認された遺構を中心に、集落の変遷を述べて本報告のまとめとしたい。

旧石器時代

当遺跡の初現は出土した横長剥片や石核などを見る限り、旧石器時代まで遡り得る。当遺跡の周辺には上喜来遺跡、平地遺跡、上野段遺跡などの旧石器の散布地が知られており、当遺跡の旧石器もこれら日開谷川両岸の段丘上に点在する旧石器遺跡群と切り放して考えることはできないであろう。特に当遺跡の北側、比高差9mの崖面を隔てて段丘上位面に位置する上喜来遺跡とは一連の遺跡と考えられ、当地域内での旧石器遺跡群の拠点的な遺跡を形成したものと考えられる。

縄文時代

縄文時代の遺物としては、包含層中より出土した縄文時代中期に属する土器片があげられる。文様の特徴などからすると、中部瀬戸内地域の船元I式に併行するものと考えられる。遺構としては縄文時代晩期に属する土坑SK1039が検出されている。土坑内からは多量の砂岩角礫や炭化物、土器片が出土しており、廃棄土坑としての機能が想定できる。出土した土器は浅鉢形土器、深鉢形土器合わせて3個体分が確認できる。深鉢形土器は体部上半で大きく内屈し、口縁部が外方に開く器形を示す。1点は低い山形の口縁で、端部に刻目を巡らせ、山形から垂下する爪形文、体部と口縁部を画する爪形文が認められる。もう1点は体部をイタケズリし、口縁部外面に2本1組みの沈線により、山形文あるいは斜格子文を描出する。こうした文様を持つ深鉢形土器の組み合わせは、中部瀬戸内地域で原下層式と呼ばれる一群に比較的近い内容を持つものと考えられ、本上坑出土の土器も広く、原下層式に併行した時期のものとして捉えられる。縄文時代晩期に確実な遺構に属すると思われる遺構はSK1039のみであったが、当該期には段丘面上に一定の生活圏が形成されていたものと考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡SB1001が1軒のみ検出された。住居跡の検出された第1調査区は調査地の最西端に位置し、段丘上位面の南端に位置している。出土した壘形土

器より弥生時代中期に属するものと考えられる。弥生時代の遺物そのものは段丘下位面の包含層中より土器片、石鎌、石瓶などが出土していることから、当該期には段丘下位面にも一定の生活圏が形成されていたものと考えられるが、明確な遺構は検出されていない。集落の存在については、竪穴住居の検出された地点が段丘上位面の南端に位置していることから、集落の中心は下位面ではなく上位面に存在するものと推定しておきたい。

中世

弥生時代以降、当遺跡では古墳時代、奈良時代、平安時代に属する遺構、遺物は確認されていない。段丘面上に集落の形成が認められるのは中世以降のこととなる。

中世の集落は段丘下位面の東寄り、第4～14調査区にかけて検出されている。集落は11棟の掘立柱建物を中心に土坑207基、中世墓16基、溝などで構成されている。掘立柱建物は第7調査区で2棟、第11調査区で4棟、第13調査区で3棟、第14調査区で2棟を検出した。これら掘立柱建物は出土した備前焼や輸入陶磁器の年代観からすると15～16世紀のものが多く、この時期、集落の規模が最大化したと思われる。ただ、第7調査区で検出されたSA1001・1002、第11調査区で検出されたSA1004はこれらより若干古く、14世紀代まで遡るものと思われる。こうした掘立柱建物の時期幅を考えると、この集落は段丘上のやや西寄りに14世紀以降に形成が開始され、15世紀以降に段丘の東端まで拡大していったことがわかる。段丘下の扇状地上には当該期の遺構は検出できず、地形の状況からして、集落の範囲は段丘上を南に向かい、現在の窪二俣集落の方面に広がるものであったと推定できる。

この時期注目すべき遺構として、集落の東端に確認された鑄造工房がある。鑄造工房の稼働時期は前述したように15世紀後半～16世紀頃と考えられるが、これは集落の存続時期からするとやや後発の遺構である。こうした鑄造工房は火を扱うという作業の性格上、集落の中心に置かれることはなかったようであり、ここでも集落内の東端である段丘下位面の崖際に設けられている。この工房は稼働期間が比較的短期間であり、出土した滓や炉壁の量、鑄型の種類から考えて、集落内に根ざした定置的なものとするよりも臨時的な作業場として位置づけることができよう。同様の臨時的な工房はいわゆる「出吹き」あるいは「出職」と称される。鑄物師が特定の需要者の元に向いて行う出張作業、注文生産的な作業形態である。当遺跡出土の鑄型類を見る限り、鍋、羽釜といった煮沸具と罌口、梵鐘といった仏教関係の梵音具が製作されたことがわかるが、梵音具を製作したということは少なくとも需要者の一部に寺院関係者が含まれていたことが推察できる。

最後に今回の調査で出土した遺物のうち、比較的多量のある15・16世紀の上器・陶磁器の様相について簡単にまとめておきたい。

供膳具は在地産の土師質土器の杯、皿、小皿が主体を占め、これに少量の輸入磁器が加わ

る。土師質土器供具は内外面をヨコナデにより仕上げる回転台成形のものであるが、底部の切り抜き技法に回転ヘラ切りと静止糸切りの2者が認められる。回転ヘラ切り技法は比較的調査事例の多い吉野川下流域の状況からすると14世紀後半以降に盛行する技法と考えられる。静止糸切技法は従来吉野川流域では殆ど確認されていない技法であったが、当遺跡のSP1178の一括出土例を見る限り、遅くとも15世紀代には出現していた技法ということが出来る。さらに遺構内で共存した備前焼、輸入陶磁器などの年代観からすると、両技法は当遺跡においては15世紀後半には共存していたと考えられる。

輸入磁器には碗、皿がある。遺構内出土のものには口縁部を外反する青磁碗、外面に線描蓮弁文を施す青磁碗が量的に多い。白磁は端反皿が出土している。これらは概ね15～16世紀に位置づけられ、本遺跡の主体的な年代を示すものと考えられる。なお今回の調査では青花磁器の出土は確認できなかった。

煮沸具には土師質土器の鍋、釜がある。鍋は量的に少なく、煮沸形態の大半は釜が占める。釜は口縁部外面に鐙を持つもので、徳島県内に13世紀代に出現する脚付釜の系譜を引くものと考えられるが、当該期の釜は概して口縁部が内傾し、鐙は短く形骸化したものが一般的である。

調理具には土師質土器搥鉢、瓦質土器搥鉢、搬入品である備前焼搥鉢がある。量的には備前焼が主体を占め、土師質と瓦質のものがこれに加わる。備前焼は15世紀代のものが主に遺構内から出土し、16世紀代のものが包含層にみられる。

その他、貯蔵具は備前焼の壺、甕が主体を占める。

以上、今回の調査で出土した15・16世紀の土器・陶磁器の様相の概略を述べたが、従来調査事例の少なかった吉野川中流域の中世後半の土器様相の一端を示す資料を提供できたものと考えている。

IV 自然科学的分析

徳島県阿波郡市場町上喜来蛭子～中佐古遺跡の鋳造関係遺物の金属学的調査

中山 光夫

1 はじめに

(財)徳島県埋蔵文化財センターは1990年7月14日～1991年3月11日にかけて、徳島県阿波郡市場町上喜来字窪二俣の発掘調査で、15～16世紀に属する鋳造関係遺物を約1万点ほど検出した。⁽¹⁾同文化財センターより、粘土・溶解炉炉壁・羽口・ルツボ(トリベ)・鋳型などの耐火物と、鉄滓・銅滓・鉄片など洋種の金属学的調査の依頼を受けたので報告する。

2 遺物の調査

試料の調査については以下に示す要領と手順で行った。

(1) 試料の目視観察と計測・計量

試料の外観および形状をはじめ、内面・破面、色調、気孔、粒度の日視観察、計測・計量および、携帯式金属探知器による金属検知と磁石による着磁を行った。

(2) 試料の調査と仕分

試料は化学分析・物性試験・顕微鏡観察・CMA測定を行い、それぞれの測定には目的にあった個所の選定を行った。試料はダイヤモンド付き高速切断機とハンマーによる仕分を行った。各遺物の調査項目については表1に示す。

表1. 上喜来蛭子～中佐古遺跡の金属学的調査項目

No	試料	地区	層位	遺物	大きさ(mm)	調査項目		項目				
						重量(g)	化学分析	耐火度	融点	CMA	顕微鏡	
1	粘土	塚	13	土中	SP1818	132×83×52	460	○	○			
2	溶解炉炉壁	塚	14	土中	SK1185	93×50×87	240	○	○			
3	羽口	塚	14	土中	SK1183	68×31×10	32	○	○			
4	羽口	塚	14	土中	SK1183	67×48×16	100	○	○			
5	ルツボ(トリベ)	塚	13	土中	SP1761	110×27	212	○	○			
6	鋳型(粘土)	塚	14	土中	SK1188	40×38×25	85	○	○			
8	鉄	塚	14	土中	SK1189	117×69×57	249	○	○			○
9	鉄	塚	14	土中	SK1189	88×62×27	112	○	○			○
10	鉄	塚	14	土中	SK1188	64×58×19	90	○	○	○		○
11	鉄	塚	14	土中	SK1189	42×41×26	39	○	○			○
12	鉄	塚	13	土中	SK1184	78×57×15	65	○	○			○
13	銅	塚	14	土中	SK1188	65×64×20	90	○	○			○

3 調査結果

(1) 粘土塊(図版1)

白色にやや黄色をおびた粘土塊である。精製は極めて良好で礫や砂粒などの混入は認められない。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 78.0%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 9.61%で、その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.29%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 1.74%、酸化カルシウム (CaO) 0.40%、酸化マグネシウム (MgO) 0.24%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.46%、酸化カリウム (K_2O) 2.30%などを測定し、耐火粘土としてはシリカを主成分としアルミナ分はあまり多くない。

② 耐火度

耐火度は1380℃を測定する。

(2) 溶解炉炉壁 (図版2)

炉壁は赤褐色を呈し淡灰黒色の鉄滓を付着する。胎土の精製は極めてよくモミ殻らしき混入が認められる。炉壁のみの厚みは26mmを計る。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 72.3%を測りシリカが主成分である。これに酸化アルミニウム (Al_2O_3) 13.6%で、その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.14%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 3.82%、酸化カルシウム (CaO) 0.51%、酸化マグネシウム (MgO) 0.45%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.09%、酸化カリウム (K_2O) 2.13%などを測定する。

② 耐火度

耐火度は1370℃を測定する。

(3) 炉間緩衝バッキン (仮称) (民俗用語ではネナワ)⁽²⁾ (図版3)

厚みが10mm前後の薄い板状で円弧状を呈し、凹弧状の内側に鉄滓の付着がみられ、炉と炉の間に敷き詰められた炉間緩衝バッキンかと想定される。胎土の精製はよく上面・下面は淡灰色で内面は黄褐色がみられる。上面に0.3~0.5mm程の砂粒が観察される。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 72.4%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 14.32%でシリカが主体を占める。その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.36%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 3.85%、酸化カルシウム (CaO) 0.53%、酸化マグネシウム (MgO) 0.58%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.29%、酸化カリウム (K_2O) 2.67%などを測定する。

② 耐火度

耐火度は1340℃測定する。

(4) 羽口 (図版4)

羽口の口縁部で復元内径は130mm前後である。胎土は赤褐色を呈し精製は良好で硬く焼き

しまっている。外面と端面に灰黒色の鉄滓が付着する。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 72.1%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 14.61%で、その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.29%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 4.24%、酸化カルシウム (CaO) 0.58%、酸化マグネシウム (MgO) 0.59%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.20%、酸化カリウム (K_2O) 2.40%などを測り、シリカを主体としアルミナ分が他の耐火物より僅かに多い。

② 耐火度

耐火度は1380℃を測定する。

(5) ルツボ (トリベ) (図版5)

赤褐色を呈し胎土の精製は良好。内側に灰黒色と小豆色を呈した滓が付着する。破面の中心部付近に10×6mmと20×11mmの砂岩質の礫をかむ。外面は熱による肌荒れなどは見られない。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 72.2%でシリカを主体として、これに酸化アルミニウム (Al_2O_3) 12.73%を含む。その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.43%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 3.94%、酸化カルシウム (CaO) 0.49%、酸化マグネシウム (MgO) 0.39%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.13%、酸化カリウム (K_2O) 2.12%などを測る。

② 耐火度

耐火度は1380℃を測定する。

(6) 鋳型 (胎土) (図版6)

胎土は黄褐色を呈し精製は良く0.5mm以下の砂粒を含む。鋳型については破片が小さく器形の判断はできなかった。

① 化学組成

シリカが主体で二酸化珪素 (SiO_2) 70.7%、続いて酸化アルミニウム (Al_2O_3) 12.22%、その他酸化第一鉄 (FeO) 0.87%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 3.69%、酸化カルシウム (CaO) 0.72%、酸化マグネシウム (MgO) 0.48%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.63%、酸化カリウム (K_2O) 2.84%などを測る。

② 耐火度

耐火度は1330℃を測定する。

(7) 鋳型 (真土) (図版7)

前項(6)の鋳型の真土部分で、断面観察で中真土と肌真土の境を見分けることができる。

中真土の厚みは5mm程度で肌色を呈し、肌真土は1mm前後で黒みを打込んでいる。試料は肌真土が薄く中真土との分離は難しく、測定は中真土・肌真土の混合である。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO_2) 71.4%でシリカを主体として、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 12.63%である。その他、酸化第一鉄 (FeO) 0.79%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 4.04%、酸化カルシウム (CaO) 0.80%、酸化マグネシウム (MgO) 0.55%、酸化ナトリウム (Na_2O) 1.98%、酸化カリウム (K_2O) 2.75%などを測る。

② 耐火度

耐火度は1340℃を測定する。

(8) 鉄 滓 (図版8)

灰黒色を呈しガラス質化した部分と、鉄錆を呈した部分とがそれぞれ半分ずつに分かれた滓で、着磁・金属検知反応はない。滓の表面と内側近くに2箇所の木片屑を噛込み、また、木片痕を残すもの4箇所を観察できた。表4に目視観察で木片屑・木片痕の計測値を示した。

① 化学組成

全鉄分 (Total. Fe) 11.38%でこのうち酸化第一鉄 (FeO) 1.16%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 14.71%の割合である。ガラス質成分の(二酸化珪素 (SiO_2) 63.5% + 酸化アルミニウム (Al_2O_3) 11.51% + 酸化カルシウム (CaO) 2.05% + 酸化マグネシウム (MgO) 0.66% + 酸化カリウム (K_2O) 2.54%) で計80.26%ある。その他、

表4. 木片屑・木片痕の計測値

No	種 類	計 測 値 (たて×よこ×深さ) mm	形 状
1	木 片	14×11×13	立方体
2	木 片	20×8×15	立方体
3	木片痕	10×7×6	立方体
4	木片痕	15×7×13	楕円形
5	木片痕	12×7×9	立方体
6	木片痕	14×12×2	立方体?

二酸化チタン (TiO_2) 0.41%、バナジウム (V) 0.003%、銅 (Cu) 0.005%、五酸化磷 (P_2O_5) 0.24%、硫黄 (S) 0.02%などを測る。

② 顕微鏡組織

ガラス質の基地に白色の金属鉄粒と、金属鉄が錆化したゲーサイト (Goethite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$) が観察される。

(9) 鉄 滓 (図版9)

上面は灰黒色と緑色を呈し、下面の大部分は緑色を呈したガラス質の滓である。破面の中心付近には22×12mmほどの錆と、太さ12×6.5mmの木炭と、22×9mmの木片をかみ込む。着

磁はなく金属検知の反応も認められない。

① 化学組成

ガラス質成分が大半を占め、二酸化珪素 (SiO_2) 55.0%・酸化アルミニウム (Al_2O_3) 9.50%・酸化カルシウム (CaO) 11.50%・酸化マグネシウム (MgO) 1.61%・酸化カリウム (K_2O) 2.76%で、ガラス質成分は計80.37%である。ガラス質成分が主体であることから、全鉄分 (Total. Fe) 9.97%で、このうち酸化第一鉄 (FeO) 1.88%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 11.31%と少ない。その他、二酸化チタン (TiO_2) 0.36%、バナジウム (V) 0.003%、銅 (Cu) 0.002%、五酸化燐 (P_2O_5) 0.18%、硫黄 (S) 0.03%などを測る。

② 顕微鏡組織

ガラス質の基地に白色の金属鉄粒が認められる。

(10) 鉄 滓 (図版10)

上面は滑らかで小豆色を呈し、下面は淡灰黒色と鉄錆色がまざり流動状になっている。見かけに対して重量感がある。着磁はあるが金属検知の反応は認められない。

① 化学組成

全鉄分 (Total. Fe) 55.96%で、このうち酸化第一鉄 (FeO) 28.04%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 48.71%で、今回の鉄滓中で鉄分が最も多い。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O}$) 計22.29%である。その他、二酸化チタン (TiO_2) 0.11%、バナジウム (V) 0.011%、銅 (Cu) 0.013%、五酸化燐 (P_2O_5) 0.54%、硫黄 (S) 0.01%などを測る。

② 顕微鏡組織

ガラス質の基地に白色多角形樹枝状のマグネタイト (Magnetite: (Fe_3O_4)) が認められる。

③ CMA⁽³⁾ (第1図2次電子像)

顕微鏡組織で確認されたガラス質の基地とマグネタイトをCMA1000倍で観察した。ガラス質には珪素・カルシウム・カリウム・アルミニウムで、マグネタイトは鉄に僅かながらカルシウム・カリウムが存在しアルミニウムはやや多い。炭素はガラス質とマグネタイトの全域にわたり、燐は僅かながらガラス質に、マンガン・チタンは全域に僅かながら認められる。

④ 融点

加熱変形は1200℃付近では変化がみられず、1310℃で上部と下部にわずかに変形が始まり、膨脹開始は1400℃で試料全体が歪みだした。1490℃付近から収縮溶解がおこり、1510℃で全溶解、1520℃で流動点に達した。

(11) 鉄 滓 (図版11)

上面のほぼ全体に薄い乳白色状のものがかかる。下面の約半分ほどは鉄錆色を呈し、下面

に19×11mm・6×8mm・6×7mmの木片痕を残す。着磁および金属検知の反応は認められない。

① 化学組成

ガラス質化した滓のため鉄分は少なく全鉄分 (Total. Fe) 15.31%である。酸化第一鉄 (FeO) 2.02%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 19.29%の割合である。造滓成分である (二酸化珪素 (SiO₂) 49.4% + 酸化アルミニウム (Al₂O₃) 8.80% + 酸化カルシウム (CaO) 7.78% + 酸化マグネシウム (MgO) 1.02% + 酸化カリウム (K₂O) 2.30%) で計69.30%である。

② 顕微鏡組織

ガラス質の基地に白色の金属鉄粒と、金属鉄が錆化したゲーサイト (Goethite: Fe₂O₃・H₂O) が認められる。

(12) 鉄片 (図版12)

表面全体がかなり錆びている。着磁は僅かに認められるが金属検知の反応は認められない。

① 化学組成

全鉄分 (Total. Fe) 51.84%で酸化第一鉄 (FeO) 6.79%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 66.25%の割合である。炭素 (C) 1.89%を測る。その他、二酸化チタン (TiO₂) 0.08%、バナジウム (V) 0.003%、銅 (Cu) 0.005%、五酸化燐 (P₂O₅) 0.67%、硫黄 (S) 0.02%などを測る。

② 顕微鏡組織

組織は金属鉄が錆化したゲーサイト (Goethite: Fe₂O₃・H₂O) と、白色部分のセメントタイト (Cementite (Fe₃C))、黒い部分はオーステナイト (Austenite) より変化したパーライト (Pearlite)、蜂の巣状の部分はセメントタイトとオーステナイトの共晶レデブライト (Ledebulite) で、白鑄鉄 (白鉄) (White cast iron) である。

(13) 銅滓 (図版13)

上面は暗小豆色を呈しガスによる2~3mm程度の気孔がみられる。下面の大半は小豆色で2~7mmほどの緑青が数箇所点に在する。金属検知の反応が認められる。

① 化学組成

二酸化珪素 (SiO₂) 56.2%・酸化アルミニウム (Al₂O₃) 9.49%・酸化カルシウム (CaO) 5.28%などガラス質が大半を占める。銅 (Cu) 7.65%、錫 1.97%、鉛 (Pb) 1.54%、亜鉛 (Zn) 0.54%、砒素 (As) 0.03%を測る。

② 顕微鏡組織

ガラス質の基地に赤銅色の金属銅粒が認められる。

4 まとめ

上喜来峠予〜中佐古遺跡の鑄造遺物の金属学的調査から、以下の示すようなことが大方明らかになった。

まず耐火物の炉壁・羽口・ルツボ（トリベ）・鑄型については、二酸化珪素70.7〜72.4%、酸化アルミニウム2.22〜14.32%、全鉄分2.86〜3.37%、酸化カルシウム0.49〜0.80%と、酸化アルミニウムは約12%ほどの差はあるものの、珪素・カルシウム・鉄分やその他の微量元素についてもほぼ同等か同等に近い。一方、耐火度についても1330〜1380℃で50℃の差であることから、同質に近い耐火材料を用いた可能性が考えられよう。ただし、粘土塊については化学組成が若干異なり、炉壁や羽口などと異なる耐火粘土の可能性が高い。

つぎに鉄滓の分析結果から、五酸化磷0.24%〜0.54%・硫黄0.01〜0.03%・酸化マンガン0.06〜0.12%と低値で、錳鉄に悪影響をおよぼしていない。そして二酸化チタン0.11〜0.41%、パイナジウム0.003〜0.011%から、始発主原料を想定すると砂鉄系原料の可能性が考えられる。しかし、鑄造は回収された鉄屑などの投入があり、鉄滓には複数の成分が混ざり合うことも考慮を要する。副原料については、酸化カルシウム2.00〜11.50%とバラツキがみられるが、炉壁や羽口の酸化カルシウムは0.51〜0.58%と鉄滓よりはるかに低い。これらの耐火物が溶融して造滓剤の役割を果たしたとは考えにくく、造滓剤として焼石灰や燐灰などが投入されたとみなされる。

鉄滓の目視観察で2点ほど注目すべきものがあった。まず1点は(8)の鉄滓はガラス質と鉄錆部分の両方からなり、鉄錆部分はもともと鉄塊であったとみられ、しかも木片屑や木片痕を多数残すことから、おそらく炉の上面近くのガラス質部分の滓と、溶融鉄が一緒になったものと推定される。そして木片屑や木片痕を多数含むことは、湯を注入前に送風停止により温度が降下を来すので、その防止策と保温状態を保つため木片屑を投入した時のものであろう。

つぎに(11)の鉄滓については、滓全体が薄い乳白色状のものがかり、この滓も木片痕を残すことからこの滓も炉の上面近くの滓とみなされる。とくに乳白色状のものは焼石灰や燐灰を投入後、それらが溶融沸騰状態のものが滓の表面に付着したものと推定される。

操業については鉄滓の融点1510℃を測定し、溶解帯部分では1500℃+ α まで温度を上げて見たとみなされる。

鉄片については鑄鉄で回収された鉄屑か、鑄造後の不良品で破砕して再投入のために置かれていたものとみられる。ただ鑄鉄と鉄滓の微量元素などが近似することから後者の方であろうと考えたい。

銅滓については銅滓中に残留する珪元素から、銅に錫・鉛を混入した銅合金（青銅）と推考される。ただ銅合金中の錫と鉛の割合がどれほどだったかは、滓だけの判断では明らかにできない。神奈川県の18世紀代中頃の梵鐘鑄造遺構の、銅滓と銅塊の分析例⁽⁴⁾からみれば、

成分的にはバラツキがあるが、銅滓と銅塊の錫と鉛の割合は相対的に比例している。一例だけで断定するのは危険であり今後の検討を要するが、上喜米姪子～中佐古遺跡の銅鑄物の錫と鉛の含有量はほぼ同比率であった可能性も考えられる。

上喜米姪子～中佐古遺跡での鑄造は、鉄と銅のそれぞれの溶解炉を用いて所定の鑄物を製作した。鑄型についてはすべてを突見していないので多くを語れないが、鉄関係では鍋・釜類が一般的製作品で、銅関係では鑿口の鑄型が検出されており、梵鐘などの大型の鑄物でなく中型から小型の銅鑄物などの製作が行われたものと想定している。

(註)

(1) 『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 2 徳島県埋蔵文化財センター、1991年7月1日。

(2) 『倉古の鑄物師』倉吉市教育委員会、1986年5月31日。

ねなわ(クライ)「クライは、火が触れるのを防ぎ、また、湯やノロ(溶滓)によって、ルとこしきの破損を防いだ」

(3) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer)

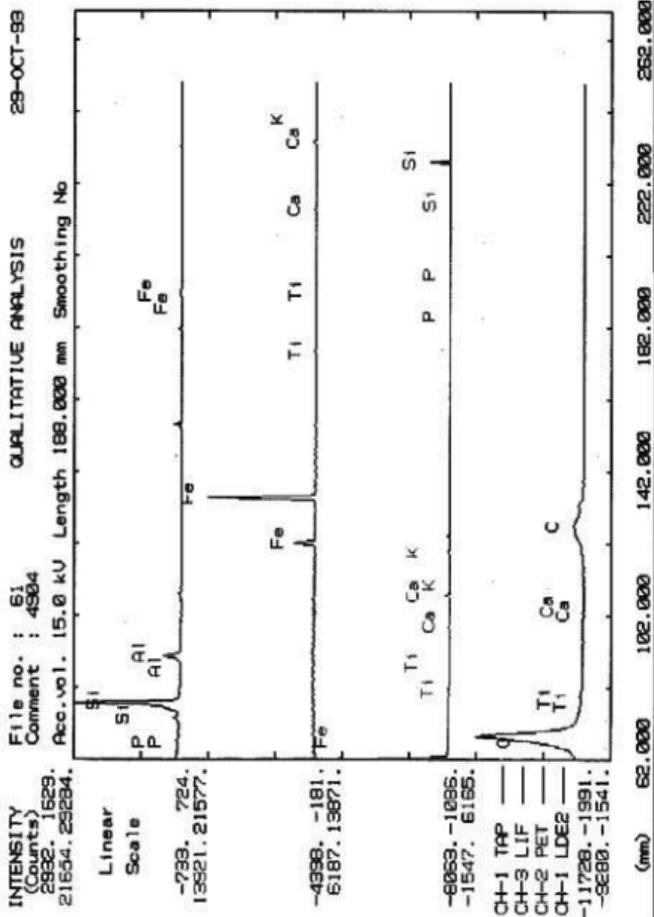
顕微鏡試料観察後、真空中で試料面に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し定性結果を得た後、標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター内蔵機器。

(4) 中山光夫「神奈川県愛甲郡清川村「宮ヶ瀬遺跡群北原(No.9)遺跡・長福寺址梵鐘鑄造遺構出土遺物の金属学的調査」「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ」(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告

21) 神奈川県立埋蔵文化財センター、1993年2月26日。

銅滓と銅塊の錫と鉛の分析値

種別	錫	鉛
銅滓	0.14～0.32	0.01～0.08
銅塊	4.27～6.04	0.42～1.02

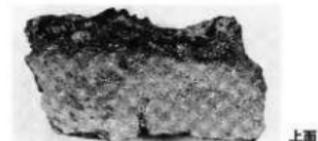


第10 図 No. 10. SK1183 鉄滓のCMAによる定性分析結果

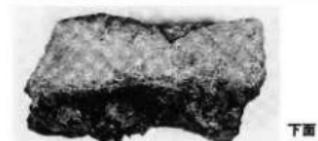
第10 図 No. 10 SK1183 鉄滓のCMAによる定性分析結果



図版1 NO. 1 粘土塊・外観



上面



下面

図版3 NO. 3 炉間緩衝パッキン・外観



内面



側面

図版4 NO. 4 羽口・外観

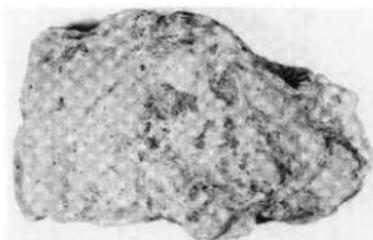


外面

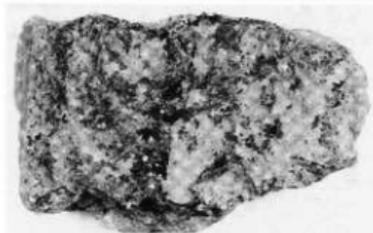


内面

図版2 NO. 2 炉壁・外観



外面



内面

図版5 NO. 5 ルツボ (トリベ) ・外観